

山元町文化財調査報告書第 19 集

蓑首城跡

二の丸跡の発掘調査

—東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅱ—

平成 31 年 3 月

宮城県亶理郡山元町教育委員会

序 文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に分布しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。それらは先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びついた埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通して貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の養首城跡の発掘調査は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の復興事業に伴う山元町立坂元小学校講堂（屋内運動場）改築事業に際し、平成25年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の調査によって、江戸時代に仙台藩伊達家の家臣「大條氏」が居城した養首城二の丸跡の遺構群が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、その調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際し、全面的な御協力くださいました宮城県教育委員会をはじめとする関係機関ならびに関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。

平成31年3月

山元町教育委員会
教育長 菊池 卓郎

例 言

1. 本書は、宮城県亶理郡山元町坂元字館下地内に所在する葺首城跡（宮城県遺跡登録番号 14007）の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、東日本大震災の復興事業・山元町立坂元小学校講堂（屋内運動場）改築事業（復興交付金事業：事業番号 A2-1）に伴う本発掘調査として行ったものである。発掘調査・整理事業・報告書作成に係る一連の業務は、事業主体者である山元町役場工事担当部局から執行委任を受けた山元町教育委員会生涯学習課が平成 25 年度及び平成 30 年度に実施した。
3. 本遺跡の発掘調査と整理事業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。現地発掘調査・報告書作成業務に携わった職員の体制は、本書第 1 章第 5 節に掲載した。
4. 発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。
高橋栄一（宮城県教育庁文化財課）、日下和寿（白石市教育委員会）、佐藤洋（仙台市教育委員会）
5. 発掘調査の方法等については、本書第 1 章第 5 節にまとめた。
6. 本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第 X 系による。発掘区の測量基準点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災後の値を基本としている。また、それぞれの基準点の位置は本書第 8 図の図中に表記した。
MK1: X=-231049.604 Y=5247.363 Z=9.806m MK3: X=-231014.387 Y=5240.733 Z=9.246m
MK5: X=-231023.219 Y=5240.353 Z=9.279m MK6: X=-231006.422 Y=5234.851 Z=9.055m
MK9: X=-231013.763 Y=5256.863 Z=9.181m
7. 標高は、水準点を基にした海拔高度で示した。
8. 本書の第 2 図は、土地分類基本調査における 1/50,000 地形分類図「角田」をもとに作成したものである。
9. 本書の第 3 図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 の地形図を複製して作成したものである。
10. 本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帖 2010 年版」（小山・竹原 1967）を参照した。
11. 陶磁器等の中近世の遺物の産地・年代については、仙台市教育委員会の佐藤洋氏にご教示いただいた。
12. 本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」（文化庁文化財部記念物課 2010a・b）を参考にし、以下の通りとした。
SA 柱穴列跡 SB: 掘立柱建物跡 SD: 溝跡 SE: 井戸跡 SK: 土坑 SX: 竪穴状遺構 P: 柱穴・小穴
13. 出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。
B: 弥生土器 C: 土師器 E: 須恵器 F: 土製品 G: 瓦 H: 瓦質土器 I: 陶器 J: 磁器 K: 石器 N: 金属製品
14. 遺物の実測図において、土器類の実測図は、須恵器の断面を黒塗り、その他の土器を白抜きとした。
15. 遺構・遺物実測図の主な縮尺は、それぞれ図中にスケールを付して示した。
16. 遺構内の傾斜の部分は「TTT」、後世の攪乱は「擾」と表記し、その傾斜部は「下」で示した。
17. 本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、山田が執筆した。
図版の版組みは山田・佐伯・渡邊、報告書編集は山田・佐伯が行った。
18. 発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

目 次

序文

例言・目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章 遺跡の概要と調査の経過	1
第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	1
第3節 養首城跡の概要	9
第4節 発掘調査に至る経緯	12
第5節 本発掘調査の経過と方法	14
第2章 発掘調査の成果	18
第1節 基本層序	18
第2節 発見された遺構と遺物の概要	18
1. 掘立柱建物跡、柱穴列跡、その他の柱穴・小穴	28
2. 溝跡	62
3. 井戸跡	68
4. 土坑	72
5. 竪穴状遺構	75
第3章 総括	77
第1節 出土遺物の特徴と時期	77
第2節 検出遺構の特徴	80
第3節 まとめ	82

註

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図	山元町と養首城跡の位置	1
第 2 図	山元町内の地形分類図	2
第 3 図	山元町内の遺跡分布	4
第 4 図	大塚家文書・養首城築城由来覚書/貞享元年	9
第 5 図	養首城に関する絵図	10
第 6 図	養首城跡 調査箇所	13
第 7 図	養首城跡 調査区全体図	19・20
第 8 図	養首城跡 個別平面図 禹載区分図	21
第 9-1 図	養首城跡 個別平面図(1)	22
第 9-2 図	養首城跡 個別平面図(2)	23
第 9-3 図	養首城跡 個別平面図(3)	24
第 9-4 図	養首城跡 個別平面図(4)	25
第 9-5 図	養首城跡 個別平面図(5)	26
第 9-6 図	養首城跡 個別平面図(6)	27
第 10 図	養首城跡 竪立建物跡 平面図	31・32
第 11 図	SB1・2 竪立建物跡	33
第 12 図	SB3・4 竪立建物跡	34
第 13 図	SB5 竪立建物跡	35
第 14 図	SB6・7 竪立建物跡	36
第 15 図	SB8・9 竪立建物跡	37
第 16 図	SB10・11 竪立建物跡	38
第 17 図	SB12・13 竪立建物跡	39
第 18 図	SB14・15 竪立建物跡	40
第 19 図	SB16・17 竪立建物跡	41
第 20 図	SB18・19 竪立建物跡	42
第 21 図	SB20・21 竪立建物跡	43
第 22 図	SB22・23 竪立建物跡	44
第 23 図	SB24 竪立建物跡	45
第 24 図	養首城跡 柱列跡 平面図	46
第 25 図	SA1~3 柱穴列跡	47
第 26 図	SA4~6 柱穴列跡	48
第 27 図	SA7・8 柱穴列跡	49
第 28 図	SA9・10 柱穴列跡	50
第 29 図	SA11~13 柱穴列跡	51
第 30 図	SA14・15 柱穴列跡	52
第 31 図	竪立建物跡(SB)・小穴(IP1c) 出土遺物	53
第 32 図	柱穴・小穴(SA・SB以外)断面図(1)	59
第 33 図	柱穴・小穴(SA・SB以外)断面図(2)	60
第 34 図	柱穴・小穴(SA・SB以外)断面図(3)	61
第 35 図	SD1~6 溝跡 平面図	64
第 36 図	SD7 溝跡 平面図・SD1~7 溝跡 断面図	65
第 37 図	SD6 溝跡出土遺物	66
第 38 図	SD7 溝跡出土遺物	67
第 39 図	SE1・2 井戸跡	68
第 40 図	SE3~7 井戸跡	70
第 41 図	SE1~5・7 井戸跡出土遺物	71
第 42 図	SK1~3 土坑	72
第 43 図	SK4・5 土坑	73
第 44 図	SK6・7 土坑	74
第 45 図	SK8 土坑	75
第 46 図	SK1 竪穴状遺構	76
第 47 図	SK1 竪穴状遺構出土遺物	76
第 48 図	養首城二の丸跡出土陶磁器一覧	79
第 49 図	養首城跡主要遺構の新田関係	80
第 50 図	今回の調査位置と主要遺構	81

表 目 次

第 1 表	山元町遺跡一覧	5
第 2 表	大塚氏略譜	11
第 3 表	養首城跡の調査体制(現場・整理)	14
第 4 表	山元町への埋蔵文化財専門職員の 派遣状況(直接派遣)	17
第 5 表	山元町への埋蔵文化財専門職員の 派遣状況(宮城県経由・出張扱い)	17
第 6 表	養首城跡 竪立建物跡(SB1~24)一覧表	30
第 7 表	養首城跡 柱穴列跡(SA1~15)一覧表	46
第 8-1 表	養首城跡 ビット(柱穴・小穴) 属性表(1)	54
第 8-2 表	養首城跡 ビット(柱穴・小穴) 属性表(2)	55
第 8-3 表	養首城跡 ビット(柱穴・小穴) 属性表(3)	56
第 8-4 表	養首城跡 ビット(柱穴・小穴) 属性表(4)	57
第 8-5 表	養首城跡 ビット(柱穴・小穴) 属性表(5)	58
第 9 表	養首城跡 出土遺物一覧	77
第 10 表	養首城跡 出土陶磁器一覧	78
第 11 表	養首城跡出土陶磁器類 産地・器種一覧	78

写真図版目次

図 版 1	養首城跡 A 区全景	85
図 版 2	竪立建物跡	86
図 版 3	竪立建物跡 柱穴断面	87
図 版 4	柱穴列跡	88
図 版 5	柱穴列跡 柱穴断面	89
図 版 6	溝跡全景	90
図 版 7	溝跡 土層断面・完備状況	91
図 版 8	井戸跡 土層断面・完備状況	92
図 版 9	土坑・竪穴状遺構	93
図 版 10	養首城跡 B 区全景	94
図 版 11	出土遺物(1)	95
図 版 12	出土遺物(2)	96
図 版 13	出土遺物(3)	97
図 版 14	出土遺物(4)	98

第1章 遺跡の概要と調査の経過

第1節 遺跡の位置と地理的環境

宮城県亶理郡山元町は、仙台市から南南東に約40km離れた県南東端に位置し、地理的には仙台平野南端に当たる(第1図)。町域は南北約10km、東西約5kmの長方形を呈する。町の西辺には、宮城・福島県境で二つに枝分かれした阿武隈山地の東支脈が南北に連なり、東辺は太平洋に面している。町城西半は、阿武隈山地に源を発する山麓丘陵地並びに小河川により開析された縞状の谷地形となり、谷中平野が形成されている。その東方に広がる沖積地を挟んで、沿岸部には4列の浜堤(第Ⅱ浜堤列・第Ⅲa～c浜堤列)が海岸線に平行する(伊藤2006、藤本・松本2012)。

養首城跡(宮城県遺跡登録番号14007)は、亶理郡山元町坂元字釜下地内に所在する。城跡は、町域の南西部に位置し、海岸線からは2.5km余り西方の標高20m前後の丘陵地とその北側に広がる標高5～10mの平野地に立地する(第2図)。山元町歴史民俗資料館所蔵の大徳家文書「養首城築城由来覚書(貞享元(1684)年)」によれば、元亀3(1572)年に亶理美濃守重宗の家臣である坂本三河が築城した城跡とされている。その現況は本丸跡が神社、二の丸跡が小学校、三の丸跡が宅地・畑地・道路である。なお、養首城本丸跡は、昭和53年に町指定文化財に指定されている。



第1図 山元町と養首城跡の位置

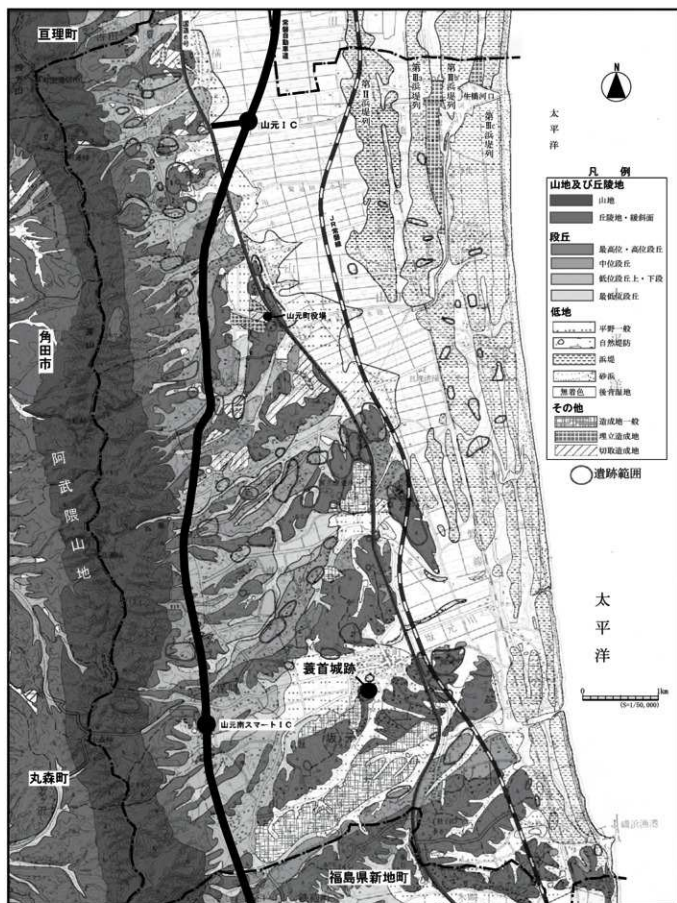
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

山元町には、現在まで100余りの遺跡が登録されている(第3図、第1表)。その分布は、立地面からは阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁部、浜堤列周辺の大きく3つに分けることができる。

阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がみられる。丘陵縁部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体を占めるのは古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見した遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が多い。

近年、町内では、常磐自動車道(県境―山元間)建設工事、それに伴い実施された周辺地区の開発事業、そして、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の復興事業等に伴う大規模な発掘調査が継続的に進められており、これまで知られていなかった町の歴史が飛躍的に明らかとなってきている。

以下、代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。



第2図 山元町内の地形分類図

【縄文時代の遺跡】

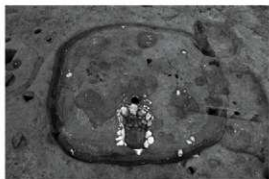
前期の北経塚遺跡(10)、上宮前北遺跡(109)、前期～中期の西石山原遺跡(84)、中期後半の南山神B遺跡(89)、中期末～後期前葉の谷原遺跡(67)、中期～晩期の中島貝塚(4)、後・晩期の涌沢遺跡(107)、晩期中筋遺跡(80)などがある。

北経塚遺跡では、平成15・21・23年度に山元町教育委員会(以下、「町教委」)が調査を行い、前期初頭の竪穴建物跡・土坑・遺物包含層・ピット群などが検出され、前期初頭の上川名Ⅱ式の古い段階の土器群や石器が出土した(町教委2004、2010、2013)。上宮前北遺跡では、平成24年度に宮城県教育庁文化財保護課(以下、「県教委」)が実施した調査で、早期末～前期初頭の遺物包含層・竪穴状遺構・集石遺構が検出され、主として前期前葉の上川名Ⅱ式の土器群が出土した(県教委2015)。

西石山原遺跡では、平成22・23年度に県教委による調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴建物跡などが検出され、前期前葉の上川名Ⅱ式、後期後葉～末葉の大木10式の土器群が出土している(県教委2012)。南山神B遺跡では、平成23・24年度調査で中期後半の遺物包含層・柱穴・土坑が検出され、中期後半の大木9式の土器群が出土した(県教委2015)。

谷原遺跡では、平成22・24年度調査で中期末～後期前葉の掘立柱建物で構成される南北40m・東西35mの環状集落、その周囲で同時期の土坑・土器埋設遺構・遺物包含層などを検出し、中期末の大木10式、後期初頭～前葉の綱取Ⅰ・Ⅱ式の土器群が出土した(町教委2016a・b)。

昭和53年に調査を実施した中島貝塚では、後期～晩期の縄文土器・石器とともに貝殻・魚骨・獣骨が数多く出土した(山元町誌編纂委員会1986)。涌沢遺跡では、平成24年度調査で後・晩期の遺物包含層が検出され、後期後半の瘤付土器・晩期前葉の大洞B～BC式の土器群が出土した(県教委2015)。中筋遺跡では、平成24年度調査で晩期の遺物包含層を検出し、晩期前葉～末の大洞BC式・大洞C2式・大洞A～A'式の土器群や後期前葉～後葉の土器も出土している(町教委2015b)。



西石山原遺跡 縄文時代の竪穴住居跡 (縄文時代中前期)



谷原遺跡 2次調査で発見した縄文時代の環状集落 (北から)

【弥生時代の遺跡】

中筋遺跡(80)、狐塚遺跡(56)、館の内遺跡(9)、北経塚遺跡(10)、谷原遺跡(67)、日向遺跡(68)などがある。

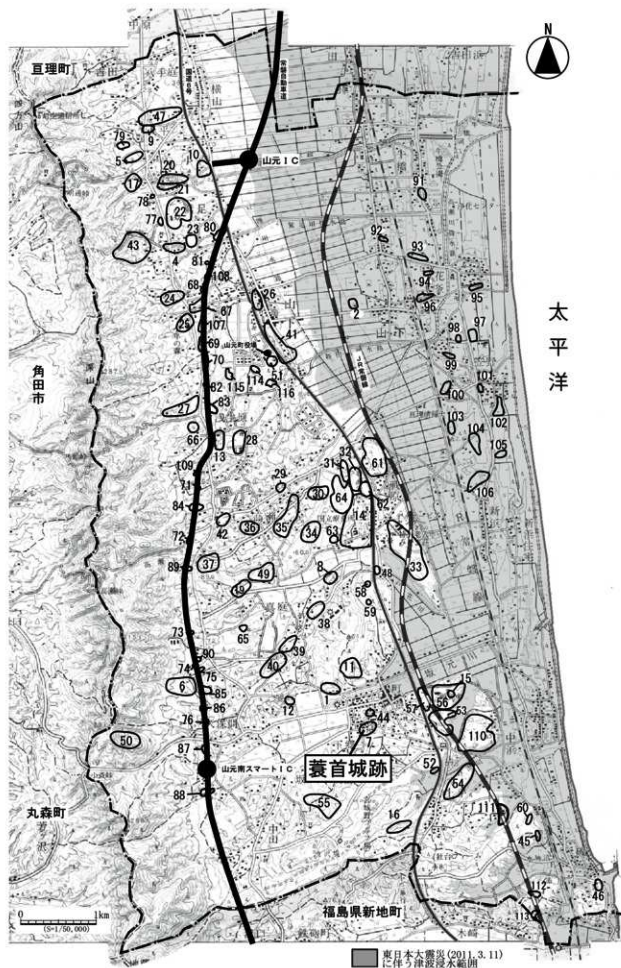
中筋遺跡では、平成24年度調査で水田跡や遺物包含層などを検出し、中期前葉の鱸沼式～中期中葉の枳形囲式を中心とする土器群や石包丁・板状石器などが出土した。また、同時期の津波痕跡の可能性のある砂層も確認している(町教委2015b、山田2015a)。

狐塚遺跡では、平成5年度調査で溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土したほか、平成25年度調査では遺物包含層から同時期の土器、石包丁などが出土している(町教委1995、県教委2016ほか)。



中筋遺跡 弥生時代の水田跡 (弥生時代中期中葉)

このほか、北経塚遺跡・館の内遺跡・谷原遺跡・日向遺跡などにおいて、遺構は確認されていないものの、弥生時代の遺物が出土している。北経塚遺跡では、平成21・23年度調査で中期後半の十三塚式・後期の天王山式



第3図 山元町内の遺跡分布

第1表 山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後	59	北越塚	塚	中世、近世
2	新田遺跡	散布地	古墳後、古代	60	東作経塚	経塚	中世
3	欠著	—	—	61	合戦原E遺跡	製鉄	古代
4	中島貝塚	貝塚	縄文中～後	62	合戦原C遺跡	古墳	古墳中
5	味曾野横穴墓群	横穴墓	古墳後	63	北名生東B家跡	家跡	古代
6	影倉遺跡	散布地	古墳後・晩	64	大久保E遺跡	散布地	古代
7	養首城跡	城館	中世、近世	65	北権視遺跡	製鉄	古代
8	上台遺跡	散布地	弥生、平安	66	山王遺跡	製鉄	古代?
9	鯉の内遺跡	集落	古代	67	谷原遺跡	集落	縄文後、弥生～中世
10	北経塚遺跡	集落・古墳・経塚	縄文前、古墳前・中、中世	68	日向遺跡	集落	縄文後、古墳後～中世
11	安宕山館跡	城館	中世	69	石堀遺跡	集落	縄文、古墳前、平安、近世
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後	70	的場遺跡	集落	縄文前、古墳前、平安、近世
13	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後、中世	71	上宮前遺跡	散布地	平安、中世
14	合戦原遺跡	集落・横穴墓・須恵器家跡・製鉄	古墳中・後、古代	72	北山神遺跡	散布地	縄文
15	狐塚古墳群	古墳	古墳後	73	新田B遺跡	散布地	古代
16	一の沢遺跡	散布地	弥生	74	影倉B遺跡	散布地	縄文
17	清水遺跡	散布地	弥生	75	影倉C遺跡	散布地	古代
18	欠著	—	—	76	荷駄場遺跡	散布地	縄文
19	北鹿野遺跡	散布地	古墳	77	北ノ入遺跡	散布地	古代
20	小平館跡	城館・散布地	古墳前、古代、中世	78	北ノ入遺跡	散布地	古代
21	館横穴墓群	横穴墓	古墳後	79	味増野遺跡	—	—
22	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後	80	中筋遺跡	水田・包含層 墓域?	縄文晩、弥生中、 古墳前
23	中道遺跡	散布地	縄文、古墳後	81	赤坂遺跡	散布地	縄文、弥生
24	石堂遺跡	散布地	古代	82	山王B遺跡	集落・散布地	縄文、近世
25	山寺館跡	城館	中世	83	内手遺跡	製鉄・生産	平安
26	作田山館跡	城館	中世	84	西石山原遺跡	集落	縄文前・中、平安
27	入山遺跡	散布地	縄文、古代	85	影倉D遺跡	製鉄	古代
28	下大沢遺跡	散布地	縄文前	86	荷駄場B遺跡	散布地	古代
29	宮後遺跡	散布地	古代	87	上小山遺跡	散布地	古代、中世
30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	88	法隆遺跡	散布地	縄文
31	館下家跡	須恵器家跡	古代	89	南山神B遺跡	散布地	縄文、古代
32	中島館跡	城館	中世	90	影倉E遺跡	散布地	縄文、古代、中世
33	芦花山遺跡	古墳・須恵器家・ 製鉄・散布地	縄文、古墳、古代	91	北沢沼遺跡	散布地	古代
34	北名生東家跡	須恵器家跡	古代	92	泥沼遺跡	散布地	古代
35	堂原遺跡	散布地	古代	93	畑合遺跡	散布地	古代
36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後	94	北畑無遺跡	散布地	古代
37	南山神遺跡	散布地	縄文早・前	95	浜遺跡	散布地	古代
38	原遺跡	散布地	古墳	96	頭無遺跡	散布地	古代
39	浅生遺跡	散布地	古代	97	花笠遺跡	散布地	古代
40	南権視遺跡	散布地	縄文早・前、古墳	98	西北谷地人遺跡	散布地	古代
41	山下館跡	城館	中世	99	西北谷地B遺跡	散布地	古代
42	石山原遺跡	散布地	縄文	100	西須賀遺跡	散布地	古代
43	蟹足館跡	城館	中世	101	笠野A遺跡	散布地	古代
44	館下遺跡	散布地	弥生	102	笠野B遺跡	散布地	古代
45	大塚小塚十三塚	塚	近世	103	北中須賀遺跡	散布地	古代
46	唐船番所跡	番所	近世	104	狐須賀遺跡	散布地	古代
47	大平館跡	集落・城館	平安、中世	105	笠浜遺跡	散布地	古代
48	貝吹城跡	城館	中世	106	新浜遺跡	散布地	古代
49	真庭館跡	城館	中世	107	溝沢遺跡	集落	縄文、古代～近世
50	新城山古館跡	城館	中世	108	日向北遺跡	集落	古墳後、中世～近世
51	日向家跡	家跡	古代	109	上宮前北遺跡	集落	古代
52	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後	110	大塚遺跡	製鉄	古代
53	鯉の作道跡	集落	古墳後、古代	111	新中水塚遺跡	集落・須恵器家・ 製鉄	古代
54	駒場原遺跡	散布地	古代	112	雷神遺跡	集落・生産	古代
55	川内遺跡	製鉄	古代	113	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
56	狐塚遺跡	集落・生産	古墳中～古代	114	作田山遺跡	製鉄	古代
57	向山遺跡	集落・生産	古墳、古代	115	内手B遺跡	製鉄・須恵器家	古代
58	即月崎塚	塚	中世、近世	116	作田山B遺跡	生産	古代

の土器のほか、石包丁が出土した(町教委 2010・2013)。館の内遺跡では、平成 13 年度調査で中期後半の十三塚式の土器が出土した(県教委 2002)。谷原遺跡では、平成 22・24 年度調査で中期前半～中期中葉の土器が出土した(町教委 2016a・b)。日向遺跡では、平成 23 年度調査で中期後半の十三塚式の土器や石包丁が出土した(町教委 2015a)。

【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡(80)・石垣遺跡(69)・的場遺跡(70)・大塚遺跡(110)、前期～中期の北経塚遺跡(10)、中期～終末期の合戦原遺跡(14)、後期～終末期の狐塚遺跡(56)・日向北遺跡(108)・日向遺跡(68)・谷原遺跡(67)・熊の作遺跡(53)・井戸沢横穴墓群(1)などがある。

中筋遺跡では、平成 24 年度調査で前期の土坑墓群を検出した(町教委 2015b)。石垣遺跡では、平成 23 年度調査で前期の竪穴建物跡を検出した(町教委 2014b)。的場遺跡では、平成 23 年度調査で前期の竪穴建物跡・土坑・溝跡を検出した(町教委 2014a)。大塚遺跡では、平成 27 年度調査で前期の方形周溝を伴う墳丘を確認している(宮城県考古学会 2015)。北経塚遺跡では、平成 21・23 年度調査で前期の竪穴建物跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡を検出した(町教委 2010・2013)。

合戦原遺跡では、平成 2 年度調査において中期末頃の大型の竪穴建物跡が検出された(県教委 1991)。また、平成 8・9 年に実施された測量調査で、前方後円墳を含む古墳群が確認されている(青山ほか 2000)。さらに、平成 26 年度から 28 年度にかけて震災復興に伴い実施した大規模調査において、終末期の横穴墓群や竪穴建物跡を確認しており、特に横穴墓群の調査では、玄室奥壁に線刻画が描かれた横穴墓を発見したほか、副葬品として土師器・須恵器・玉類、それに直刀・巖手刀・鉄鏃・馬具などの多くの金属製品が出土し、注目を集めている(山田 2015b・2017、宮城県考古学会 2015)。

狐塚遺跡では、平成 4・5 年度調査で後期の竪穴建物跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された(県教委 1993、町教委 1995)。日向北遺跡では、平成 24 年度調査で終末期前後の竪穴建物跡を検出した(町教委 2014c)。日向遺跡では、平成 23・28 年度調査で後期の竪穴建物跡、終末期の遺物包含層を検出した(町教委 2015a・2017b)。谷原遺跡では、平成 22・24 年度調査で終末期頃の竪穴建物跡を検出した(町教委 2016b)。熊の作遺跡では、平成 25・26 年度調査で後期～終末期の竪穴建物跡・掘立柱建物跡が検出された(県教委 2016)。昭和 44 年に調査が行われた井戸沢横穴墓群は、確認された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、それらとの関連性が指摘されている(山元町誌編纂委員会 1971)。



中筋遺跡 古墳時代前期の土坑墓 (平成 24 年度調査)



北経塚遺跡 古墳時代中期の円墳周溝跡 (平成 23 年度調査)



合戦原遺跡の横穴墓群 (平成 26～28 年度調査)



合戦原遺跡で発見された線刻壁面 (平成 26～28 年度調査)

【奈良・平安時代の遺跡】

熊の作遺跡(53)、谷原遺跡(67)、涌沢遺跡(107)、館の内遺跡(9)、日向遺跡(68)、石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、雷神遺跡(112)、山ノ上遺跡(113)、大塚遺跡(110)、新中永窪遺跡(111)、北名生東窯跡(34)、合戦原遺跡(14)、狐塚遺跡(56)、内手遺跡(83)、上宮前北遺跡(109)、向山遺跡(57)、川内遺跡(55)、内手B遺跡(115)、作田山遺跡(114)などがある。

熊の作遺跡では、平成25～28年度調査で奈良～平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、四脚門跡が検出され、「坂本願」・「大領」・「子弟」などの墨書土器や風字硯・石帯・木簡・木製品が出土するなど大きな成果が得られており、陸奥国亶理郡に関連する役所跡と推定されている(県教委2016・町教委2018c)。

谷原遺跡では、平成22・24年度調査で7世紀末～8世紀前半、8世紀後半～9世紀前半、9世紀後半の竪穴建物跡などを検出し、風字硯・円面硯、墨書土器などが出土した(町教委2016b)。

涌沢遺跡では、平成24年度調査で8世紀末～10世紀後半の竪穴建物跡・竪穴状遺構・土器廃棄土坑や8世紀末～9世紀初頭の鍛冶関連遺構などが検出され、「田人」・「十万」・「千万」の墨書土器や10世紀後半の八稜鏡などが出土した(県教委2015)。

館の内遺跡では、平成13年度調査で規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴建物跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している(県教委2002)。

日向遺跡では、平成23・28年度調査で8世紀後半～10世紀前半の集落跡を検出した(町教委2015a・2017b)。

石垣遺跡では、平成23年度調査で9世紀後半の竪穴建物跡・竪穴状遺構・土器廃棄土坑を検出し、土器廃棄土坑からは墨書土器(「田」・「人」)が出土した(町教委2014b)。

的場遺跡では、平成23・25年度調査で9世紀後半の竪穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構を検出した(町教委2014a)。**雷神・山ノ上遺跡**では、平成25年度調査で奈良時代頃の竪穴建物跡などが検出されている(県教委2016)。

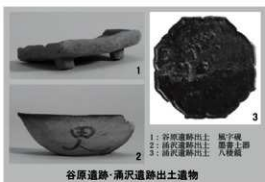
大塚遺跡では、平成25年度から27年度にかけて県教委と町教委が実施した調査において、奈良時代前半を中心とする竪穴建物跡・木炭窯跡・横口付木炭窯跡・製鉄炉跡が検出された(宮城県考古学会2015、県教委2016)。

新中永窪遺跡では、平成25・26年度調査で奈良～平安時代初期の竪穴建物跡・製鉄炉跡・須恵器窯跡・木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された(県教委2016)。

北名生東窯跡では、昭和37・38・52年度に須恵器窯跡の調査が行われ、8世紀後半～9世紀初頭の須恵器が出土した(山元町誌編纂委員会1971)。

合戦原遺跡では、平成2年度調査で奈良～平安時代の須恵器窯跡を(県教委1991)、平成26・27年度調査で製鉄炉跡・木炭窯跡・焼成土坑を確認している(山田2015b、宮城県考古学会2015)。

狐塚遺跡では、平成4・5年度調査で平安時代の竪穴建物跡・木炭窯跡



谷原遺跡・涌沢遺跡出土遺物



熊の作遺跡出土 墨書土器・木簡



などが検出された(県教委1993、町教委1995)。**内手遺跡**では、平成23年度調査で9世紀代の地下式木炭窯跡7基・横口付木炭窯跡1基が検出されている(県教委2015)。**上宮前北遺跡**では、平成24年度調査で9世紀の製鉄炉跡4基が検出されている(県教委2015)。**向山遺跡**では、平成25年度調査で平安時代の堅穴建物跡や鍛冶工房が検出されている(県教委2016)。**川内遺跡**では、平成28年度調査で平安時代の製鉄遺構4基・木炭窯跡5基が検出されている(町教委2018a)。**内手B遺跡**では、平成26年度試掘調査で奈良時代の須恵器窯跡を、**作田山遺跡**では、平成25年度試掘調査で古代の製鉄関連遺構を検出している。



川内遺跡から出土した製鉄関連遺物(平成28年度調査)

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(10)、小平館跡(20)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、山下館跡(41)、鷲足館跡(43)などがある。

北経塚遺跡では、平成21・23・28年度調査で13世紀後半～14世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑を検出した(町教委2010・2013・2017)。**小平館跡**は、天文年間(1532～1555年)に亘理要害14世亘理宗隆が居館したとされている館跡で(柴橋1974)、平成24・25・27年度に調査を実施し、掘立柱建物跡・溝跡を確認した(町教委2015c)。**日向遺跡**では、平成23年度調査で13世紀後半～16世紀の掘立柱建物跡・井戸跡を検出した(町教委2015a)。**谷原遺跡**では、平成22・24年度調査で多数の掘立柱建物跡のほか井戸跡・土坑・溝跡などを検出し、中世の大規模な屋敷跡の存在を確認した(町教委2016b)。**山下館跡**では平成26年度に調査を実施し、良好な状態の平場・土塁・堀切を確認し、掘立柱建物跡や柱穴列跡を検出した(宮城県考古学会2014)。**鷲足館跡**では、平成24～28年度に中世山城の調査を実施し、平場・土塁・堀切・掘立柱建物跡・柱穴列跡などを検出した(町教委2018b)。



山下館跡の平場・土塁・堀切(平成26年度調査)



鷲足館跡の平場と建物群(平成24～28年度調査)

【近世の遺跡】

石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、山王B遺跡(82)などがある。

石垣遺跡では、平成23年度調査で掘立柱建物跡・柱穴列跡・土坑・井戸跡で構成される屋敷跡を検出した(町教委2014b)。**的場遺跡**では、平成23・25年度調査で17～19世紀の掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡で構成される屋敷跡を検出した(町教委2014a)。**山王B遺跡**では、平成22年度調査で掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された(県教委2012)。



的場遺跡の近世の建物群(平成23年度調査)

第3節 養首城跡の概要

1 養首城跡について

(1) 養首城の歴史

養首城は、戦国時代末期から幕末まで機能した城館である。その築城は、当時巨理郡一带を治めていた巨理氏の家臣「坂本三河」が元亀3年(1572年)に築城したと伝えられている。養首城は「坂本要害」とも呼ばれ、坂本氏以後、後藤・黒木・津田の諸氏が居城した後、元和2(1616)年に、大條宗綱が伊達政宗より城を拝領し、明治維新までの252年間、大條氏の居城となる。こうした養首城の築城と大條氏が城を拝領するまでの経緯については、貞享元年(1684)の大條家文書「養首城築城由来 覚書」(第4図)の中に詳細な記述が残されている。なお、養首城という名称の由来については、「養をかたどった縄張りからこの名称が生まれた」、「坂元の養首山に築城されたため、養首城と呼んだ」など、様々な説が伝えられているが、その詳細は定かではない(志間1982・藤沼ほか1981)。

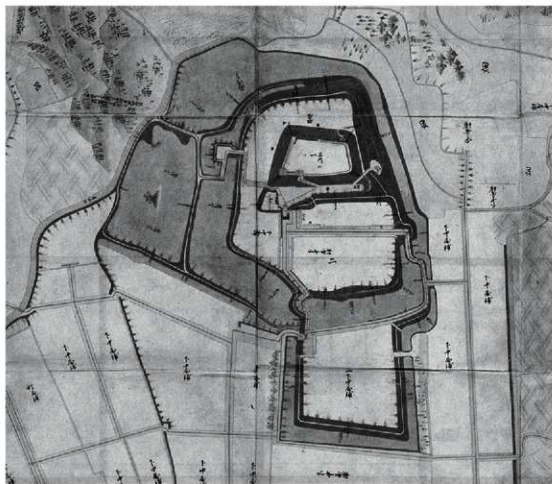


第4図 大條家文書・養首城築城由来覚書/貞享元年(山元町歴史民俗資料館所蔵)

(2) 養首城の構造

養首城の構造が確認できる史料としては、平成12年に発行された『復刻 仙台領国絵図』(渡辺2000)に掲載されている「巨理郡坂本要害屋敷惣絵図」[貞享4(1687)年/271cm×282cm/宮城県図書館所蔵](第5図1)や、大條氏の歴史をまとめた『大條家坂元間邑三百五十年祭小志』(佐藤1966)に収録されている「巨理郡坂本要害屋敷惣絵図」[貞享4年(1687)](第5図2)、「明治維新当時 養首城平面図并家中屋敷(複製)」[昭和8年調製](第5図3)などがある。

これらの史料をもとに、その構造を概観すると、養首城は水堀や土塁に区画された本丸・二ノ丸・三ノ丸から成る。「本丸」は城全体の中央やや南寄りに位置する。その規模は、高さが八間ほどで、東西三十間、南北二十間ほどの長方形に近い平面形を呈する。その北側には東西六十間・南北五十間ほどの「二の丸」、さらにその北側に東西五十間・南北六十間ほどの「三の丸」が配置され、これらの郭の間には土塁や堀が巡る。それぞれの絵図の時代により内容は異なるが、本丸には「要害屋敷・詰門・埋門・鐘堂・井戸」、二の丸には「的場・馬場・井戸・家中屋敷」、三の丸には「家中屋敷・下屋敷・講武所」などの記載がみられることからこうした建造物が配置されていたとみられる。また、二の丸の西に「西門」、東に「新門」・「兵具蔵」、三の丸の東に「大手門」などの記載もある。これらの遺構のうち、三の丸の「大手門」については、現在も絵図の位置とほぼ同位置に現存している。このように、養首城の各所に建てられた建造物の概要は、残された絵図の記載から、ある程度、推定することができるが、その具体的な配置図は現在のところ確認されておらず、これ以上の城内部の状況は不明である。現在の養首城一帯は、明治維新後に行われた開発により、水堀や土塁の跡は残されておらず、本丸跡は坂元神社(明治44年～現在)、二の丸跡は小学校(明治13年～現在)、三の丸跡とその周辺は水田や畑・住宅として利用されている(山元町誌編纂委員会1971)。



1.「亶理郡坂本要害屋敷惣絵図」貞享4（1687）年（『複製 仙台備前絵図』より転載・一部加工）



2.「亶理郡坂本要害屋敷惣絵図」貞享4（1687）年 原本不明



3.「明治維新当時 亶首城平面図并家中屋敷」昭和8（1933）年 原本不明
 (2・3:『大塚家板元開邑三百五十年整小志』より転載・一部加工)

第5図 亶首城に関する絵図

2 大條氏の歴史

菟首城を長く治めた大條氏の歴史は、「伊達世臣家譜」によると、伊達家第八代・宗達の三男である「宗行」が応永 22 (1415) 年に伊達郡大枝 (現在の福島県伊達郡国見町、伊達市梁川付近) を領地とし、大枝孫三郎宗行と称したことに始まったとされる (後に「大條」と名乗る)。その後、大條氏は、天正 19 (1591) 年に伊具郡大蔵村 (現在の丸森町) → 文祿元 (1592) 年に名取郡北目 (現在の仙台市太白区) → 文祿 2 (1593) 年に志田郡蟻ヶ袋 (現在の大崎市・旧三本木町) → 慶長 9 (1604) 年に気仙郡長部村 (現在の岩手県陸前高田市) → 慶長 18 (1613) 年に磐井郡東山大原 (現在の岩手県一関市・旧大東町付近) を経て、元和 2 (1616) 年に大條家第 8 代宗綱の時代に菟首城を拝領し、明治維新までの 252 年間、坂元一帯を領有するようになる。大條氏は、仙台藩伊達家の家臣の「御一家」として、歴代 7 名の仙台藩の奉行職を輩出した家系であり、明治維新以後は、戊辰戦争の敗戦処理等の功績を称えられ、姓を「伊達」に復している。大條氏の系譜・略記のついでには第 2 表のとおりである。

第 2 表 大條氏略譜

(佐藤 1966・伊藤 1988 をもとに作成)

	年代	備考
初代 大條宗行	応永 22 (1415) 嘉吉 2 (1442)	伊達家八代宗達の三男として出生。分家し、伊達郡大枝村を領地とする (以後「大條」と名乗る) 1 月 5 日逝去
2 世 大條宗景	徳仁元 (1467)	3 月 2 日逝去
3 世 大條宗元	明応 9 (1500)	9 月 28 日逝去
4 世 大條宗澄	永正 4 (1507)	6 月 15 日逝去
5 世 大條宗助	弘治元 (1555)	11 月 9 日逝去
6 世 大條宗家	天文 22 (1553) 天正 4 (1576)	留守景宗次男が養子となり大條家を継ぐ 12 月 8 日逝去
7 世 大條宗直	天正 19 (1591) 文祿元 (1592) 文祿 2 (1593) 慶長 9 (1604) 慶長 15 (1610)	伊具郡大蔵村に移る 名取郡北目村に移る/伊達政宗朝鮮出兵時、伏見城の警護にあたる 志田郡蟻ヶ袋に移る 気仙郡長部村二日市城に移る/知行高 二百貫百十三文を拝領 7 月 10 日逝去
8 世 大條宗綱	慶長 18 (1613) 慶長 19 (1614) 元和 2 (1616) 元和 3 (1617)	磐井郡東山大原村に移る 伊達政宗に従い、大坂の陣に従軍 互理郡坂本に移る (菟首城の城主となる) /知行高 二百貫百五十八文を拝領 仙台藩の奉行職に就任 12 月 24 日江戸にて客死
9 世 大條宗頼	正保 3 (1646) 慶安 2 (1649) 万治元 (1658) 延宝 4 (1676)	坂元の磯崎山に唐船番所が設置される 江戸御留守番役となる 仙台藩の奉行職に就任 2 月 21 日逝去
10 世 大條宗快	寛文 2 (1662) 寛文 13 (1673) 貞享 3 (1686)	仙台藩の奉行職に就任 開発新田十六貫百四十六文を拝領 9 月 1 日逝去
11 世 大條宗道	元禄元 (1688) 宝永 2 (1705)	日光御廟普請総奉行に就任 10 月 18 日逝去
12 世 大條道頼	享保 17 (1732) 元文 4 (1739) 寛保 3 (1743) 宝暦 12 (1762)	仙台藩の奉行職に就任 坂元の磯沖に異国船が出現 勤功により田五百石を加賜される (三千五百石の禄となる) 田五百石を加賜される (四千石の禄となる) /5 月 3 日逝去
13 世 大條篤恭	安永 2 (1773) 文化 7 (1810)	若年寄に就任 9 月 11 日逝去
14 世 大條道英	寛政 12 (1800) 文政 8 (1825)	若年寄に就任 7 月 21 日逝去
15 世 大條道直	文政 10 (1827) 天保 3 (1832) 明治 10 (1877)	藩主の世継に関して功績を残す 仙台藩の奉行職に就任 10 月 19 日逝去
16 世 大條道治	安政 2 (1855) 明治 28 (1895)	仙台藩の奉行職に就任 10 月 11 日逝去
17 世 大條道徳 (伊達宗亮)	元治元 (1864) 慶応 4 (1868) 明治 5 (1872) 大正 13 (1924)	奉行職に就任 奉行職に再任/戊辰戦争の敗戦処理を担当 伊達慶邦の命により「伊達」姓に復す (以後、伊達姓を名乗る) /伊予人伊達翠雨としても活躍 3 月 2 日逝去
18 世 伊達宗康	昭和 12 (1937) 昭和 27 (1952)	坂元村長を務める 10 月 11 日逝去

第4節 発掘調査に至る経緯

1 事前協議

平成25年7月、宮城県亶理郡山元町坂元字窟下地内における山元町立坂元小学校講堂（屋内運動場）改築事業計画と埋蔵文化財のかかりについて、山元町教育委員会学務課（以下、町関係課）から山元町教育委員会生涯学習課（以下、町文化財担当課）に遺跡照会がなされた。その内容は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災（以下、震災）により被害を受け使用不可となった屋内運動場の解体・新築、それに付随する駐車場・既存の校舎と屋内運動場を連結する渡り廊下の造成を行うというものであり、この事業は震災の復興事業の基幹事業（事業番号A2-2）として位置付けられていた。

町文化財担当課では、この事業予定範囲が、周知の埋蔵文化財包蔵地である「養首城跡」の本丸跡に隣接する養首城の二の丸跡に該当していたことから（第6図）、町関係課に対し事前の協議を行う旨の回答を行った。平成25年7月24日、「山元町立坂元小学校講堂（屋内運動場）改築事業計画と埋蔵文化財のかかりについて」の協議書が町関係課から町文化財担当課に提出され、同日、町文化財担当課では意見書を付し、「山教委発第683号」により県教委から協議書を進達した。工事予定地は、明治維新以後、学校用地として活用されてきた範囲であったが、過去に本格的な発掘調査は実施されておらず、学校敷地造成・校舎建設によって、どの程度当時の遺構面が削平を受けているか把握されていない状況にあった。これを受け、上記三者による協議を行った結果、事業の実施により、埋蔵文化財に影響が及ぶ可能性があると判断された。そのため、平成25年7月31日付文第1138号・県教委通知により、事業地内の遺構の分布状況を把握することを目的とした確認調査を実施することが決定した。

以上の経緯を受けて、平成25年8月5日付で文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の届出が町担当課から提出され、町文化財担当課では同日付「山教委発第741号」により県教委へ進達を行い、平成25年8月21日付で県教委から調査実施の通知（「文第1330号」）がなされた。

なお、今回の事業は、震災に伴う小学校屋内運動場の再建を目的とするものであったことから、平成23年に文化庁及び宮城県教育委員会から示された基本方針（平成23年4月28日付け23庁第61号文化庁次長通知及び平成23年6月3日付け文第268号宮城県教育委員会教育長通知）に基づき、「復興事業」に認定されたことを受け、本件の発掘調査は「復興の基準」により調査を実施した（具体的な対応については、本書第5節1を参照）。

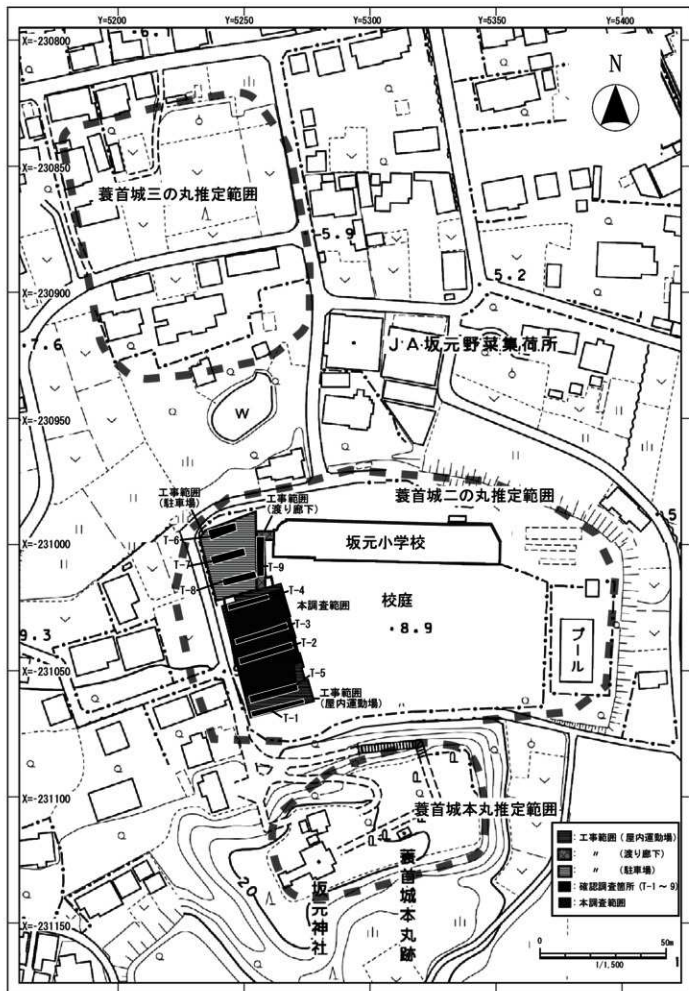
2 確認調査

確認調査は、平成25年8月21日から8月27日にかけて実施した。実働日数は5日間で、町文化財担当課が調査主体となった。調査は、既に解体されていた講堂（屋内運動場）跡地を含む工事対象箇所の平坦面に等間隔でトレンチ（試掘坑）を9カ所設定（T-1～9）し、遺構の有無を確認する方法をとった（第6図）。調査にあたっては、トレンチの掘削についてはバックホウ（0.45 m³）を使用し、遺構検出作業は人力により行った（確認調査面積：約410 m²）。

確認調査の結果、T-2～4・7～9の範囲で柱穴跡や井戸跡とみられる遺構が多数検出され、今回の事業範囲内には、養首城機能時のものと考えられる遺構が残存していることが判明した。これにより、事業実施のためには、事前に本格的な発掘調査を行う必要があると判断された。

この結果を受け、事業担当課と再度協議を行ったが、本事業が「震災の復興事業」に位置付けられており、既に各種事務手続きが進捗していたこと、町として平成25年度中の屋内運動場の復旧が不可欠であると判断されたことなどの理由から、事業の計画変更は困難との結論に至ったことから、遺構が発見された範囲を対象に記録保存を目的とした本発掘調査が実施されることとなった。

なお、本事業に伴う確認調査の経費については、復興交付金事業の基幹事業である「埋蔵文化財発掘調査事業（事業番号:A4-1）」の交付金を活用した。



第6図 養首城跡 調査箇所

第5節 本発掘調査の経過と方法

1 現地調査の経過

養首城跡の本発掘調査は、町教委が主体となり、平成25年8月28日から9月13日、11月11日から11月14日の期間に実施した。調査体制は第3表、調査箇所は第6図のとおりで、本調査面積(A区)は880㎡、のべ調査日数は17日である。前述のとおり、今回の事業は「復興事業」に認定されていたため、町教委と調整した結果、遺構が確認された駐車場(T-6・7)と渡り廊下(T-9)の範囲(B区)に関しては、確認調査の結果、工事による掘削が遺構面まで達しないことが判明したことから、トレンチ内で検出した遺構の平面記録と一部の遺構の掘り込みを行うのみの調査にとどめることとなった。また、屋内運動場の範囲に関しては、建物基礎の掘削が遺構確認面より下まで及ぶことが確認されたため、建設予定地のうち、遺構が検出された範囲(T4～T5の間:A区)については、事前に発掘調査を実施し記録保存を行う対応とした。

調査はまず、バックホウ及び人力による表土除去から着手した。その後、測量のための基準点設置を調査員が行い、調査員の指揮のもと、作業員の人力による遺構の検出・掘削・精査を開始した。遺構の精査完了後は、俯瞰システムによる発掘区的全景撮影・その他の予備調査を行い、現場資材等を撤収し調査を完了した。事前の取り決めに従い、現場の埋戻しを行わず、発掘区を町関係機関に引き渡した。発掘調査完了後、遺失物法に基づく手続き、出土遺物の文化財認定に係る一連の手続きを実施した。

なお、本事業に伴う本発掘調査の経費(現地調査・整理・報告書)については、復興交付金事業の基幹事業である「山元町立坂元小学校講堂(屋内運動場)改築事業(事業番号A2-1)」の交付金を活用した。

第3表 養首城跡の調査体制(現場・整理)

年度	調査内容	教育委員会生涯学習課の体制		応援職員(整理)	現場作業員・整理作業員(臨時職員)
		事務局	町担当職員		
H25	現地調査 整理作業	教育長 森 惠一 課長 齋藤三郎 班長 武田賢一	主 事 山田隆博 主 事 丹野修太 (任期付職員) 調査補助員 藤田祐 (臨時職員)	森秀之 (北海道釧路市派遣) 小栗野亮 (福岡県筑野市派遣) 日下和寿 (宮城県白石市派遣)	(現場作業) 相原一智、飯川幸男、石井進、伊藤清、伊藤成夫、及川博子、太田千佳子、小野和寿子、後藤征郎、齋藤健二、佐藤明、白鳥浩二、立谷重晴、玉田眞智子、倉塚義博、西山ゆり子、増川悠記、松本昭彦、三浦良、森忠男、道佐豊美、横山ゆり子、渡部修、渡邊洋子 (整理作業) 柳村眞智子、及川博子、高橋みゆき、萩本厚子、橋元和子、水本直子、矢吹共子、渡邊洋子
H30	整理作業 報告書作成	教育長 菊池卓郎 課長 佐山学 班長 伊藤和重	主 査 山田隆博 調査補助員 佐伯高弓 (臨時職員)	—	(整理作業) 柳村眞智子、齋藤田彦、玉田眞智子、西山ゆり子、橋元和子、矢吹共子、渡邊洋子

2 整理・報告書作成作業の経過

養首城跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。整理・報告書作成作業については、現地調査が完了した直後の平成25年度下半期から、震災の復興事業に伴う発掘調査が急増し、現場対応が優先せざるを得ない状況となったため、平成25年度中に基礎的な作業を行った後、作業を一時中断し、報告書編集・執筆を含む本格的な整理作業は平成30年度に再開し、同年中に報告書の刊行を行った。それぞれの年度で行った具体的な作業内容は以下のとおりである。

【平成25年度の作業内容】

- 出土遺物の整理(洗浄・接合・注記・抽出・陶磁器類の一部の実測図作成、陶磁器類の鑑定)
- 記録写真類の整理(リネーム・分類)
- 記録図面整理(平面図・断面図修正・トレース、土層注記の修正)

【平成30年度の作業内容】

- 出土遺物の整理(遺物の実測図作成・拓本図の作成・トレース)
- 出土遺物の写真撮影
- 平面図・写真類の版組み、検出遺構・出土遺物の報告書執筆
- 出土遺物、記録類の収納

3 調査の方法

(1) 現地調査

①発掘区の設定

首古城跡の発掘調査では、本格的な精査を行った T-1～T-5 の範囲を A 区、部分的な精査でとどめた範囲を B 区 (B-1 区:T-9 の範囲/ B-2 区:T-7 の範囲/ B-3 区:T-8 の範囲/ B-4 区:T-6 の範囲) とした。

②表土除去・遺構精査

表土除去作業は原則としてバックホウ (0.45 m³) による掘削とした。表土掘削により発生した排土は、重機または人力により発掘区外の斜面に搬出した。遺構検出以降の作業は人力により行った。

③遺構番号

遺構番号は、現地調査の段階で遺構の種類ごとに1から通し番号を振り、各種記録類を作成した。遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。

④遺構測量

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション (SRX5X) 及び電子平板システム (遺構くん cubic 2016 12.03)、遺構の土層断面図は手実測により縮尺 1/20 により行った。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。

⑤遺構の記録作成

今回の調査で検出した遺構のうち、溝跡・井戸跡・土坑等については、原則として、すべての記録作成 (平面図・断面図・写真撮影) を行った。掘立柱建物跡や柱穴列跡を構成する柱穴やその他のピット・小穴については、調査を円滑に進めるため、遺構平面の下場の計測を省略し、また堆積土が1層のみのピット類は、遺構断面図・写真等の記録作成の一部を省略した。なお、今回の調査で掘り込みを行った遺構の底面標高はすべて記録することとした。

⑥土層の記録作成

土層番号は、遺構内堆積層は上層から順にアラビア数字 (算用数字) 「1, 2, 3…」、基本層序はローマ数字 「I・II・III…」を用いて表記した。土層の観察は『標準土色帖』(小山・竹原1967) に従い「色相 明度/彩度」を数値と記号で示し、日本語表記を併記した。土性については、粒径の大きなものから順に「礫>砂>砂質シルト>シルト>粘土質シルト>粘土>」に分け、土層の混入物は多い方の順から「多量 (多く)>含む>少量含む>微量含む」と表記し、その他必要な事項は備考等に記録することとした。

⑦遺物の記録・取り上げ

遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物で且つ残存状況の良いもののみとした。遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土遺物は検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半截時 (分層前) に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

⑧写真撮影

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ (NikonD5300/レンズ SIGMA 18-200mm/画質モード FINE) を使用した。発掘区の全景写真については、俯瞰システム (CUBIC) による撮影を行った。

(2) 室内整理

①遺物の整理作業

【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物 (土師器など) については、土器強化剤 (使用薬剤: バインダー-17) による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他 (検出面・排土など) から出土した遺物の接合を行った。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー（第一合成株式会社）を一定期間リースし、機械による注記を行った。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

【遺物抽出・登録】

遺物の抽出・登録は町担当職員（山田）が行った。遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外（基本層出土遺物も含む）出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。また、陶磁器については小破片であっても、文様や器形などが特徴的なものや時期・産地推定が可能なものについても抽出の対象とした。抽出した資料は原則として報告書掲載遺物として扱い、それぞれ種別1点ごとに登録番号を付し、非抽出遺物は種別・出土遺構・層位ごとに分け袋詰めし、袋ごとに非抽出遺物の登録を行った。

遺物はそれぞれの種別ごとに登録を行った。遺物種別の略記号は、例言に示したとおりである。

【遺物の実測図作成】

遺物の実測図作成は、土器類は町職員（山田）・自治法派遣職員〔森秀之（北海道恵庭市派遣）〕、石器類は町調査補助員（藤田）が行った。なお、実測図は原則として手実測により作成した。

【拓本図作成】

遺物の拓本図作成は町整理作業員が行い、報告書用の拓本図作成は町調査補助員（佐伯）が担当した。拓本図作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーでPCに画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

【実測図トレース、掲載遺物の写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は、素図をスキャナーで取り込み、PC上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影・加工作業は民間機関（株式会社アートプロフィール）に委託した。

②図面の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正、断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。記録写真の整理作業は、撮影年月日ごとにデータを整理し、それらのデータをコピーしたものに対しリネームを行った。その後、各種遺構ごとに分け収納した。報告書の版組み・執筆は、町職員（山田）が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みについては、遺構くん cubic 2016 12.03、Adobe Illustrator CS6、Adobe Photoshop CS6、Adobe InDesign CS6、表データ・報告書原稿の作成についてはMicrosoft Office Word・Excelのソフトウェアを使用した。

4 東日本大震災に伴う埋蔵文化財専門職員の支援

平成23年3月11日、東日本大震災が発生し、岩手・宮城・福島の子三県では甚大な被害を受けた。被災三県では、震災からの復旧・復興事業に関連した工事に伴う発掘調査が急増した。これを受け、震災復興事業に関連した復興調査に迅速に対応するため、文化庁を通じて、埋蔵文化財専門職員の自治法派遣や県内陸市町村からの短期出張による、被災3県の発掘調査体制の強化が図られた（宮城県教育委員会 2014・2015・2016）。

(1) 山元町における復興調査等の現状

山元町では、平成22年度から開始された常磐道関連遺跡の発掘調査を機に、町内での遺跡調査が増加した。加えて、東日本大震災後の平成24年度以降、公共事業や個人住宅建設などの震災復興事業に関連した発掘調査が町内各所で行われるようになり、町内遺跡の発掘調査件数はここ数年で劇的に増加した。また、土砂採取事業等といった復興事業に関連した民間開発の案件も発生した。

具体的な実績でみると、平成22年4月から平成31年3月末の段階で、山元町内において発掘調査が実施された遺跡は、63遺跡104地点で、その調査総面積は約222,000㎡にのぼる。

(2) 山元町における発掘調査体制と派遣職員受入状況

常磐道関連遺跡の調査が開始された平成22年度当時、山元町では、発掘調査に対応する専門職員(町職員)が1名のみの配置だったため、町単独でその調査に対応することが困難な状況にあった。このことから、常磐道関連遺跡の調査は、県教委の全面的な協力を得て対応していた。こうした状況の中、平成23年3月11日に東日本大震災が発生したことにより、常磐道以外の各種復興関連事業や民間開発に関連した発掘調査がさらに増加し、専門職員の不足はさらに悪化した。これを受け、町では、平成25年度から、前述の手法による専門職員の派遣を本格的に受けることができ、激増する発掘調査に対応することができた。

具体的な山元町での専門職員受け入れ状況は第4・5表のとおりで、平成25年4月～平成31年3月の7年間でべ46名の派遣を受けることができた[町への直接派遣のべ15名(平成25年度4名、平成26年度2名、平成27年度4名、平成28年度3名、平成29年度1名、平成30年度1名)/県教委経由による職員派遣のべ31名(平成26年度8名、平成27年度9名、平成28年度8名、平成29年度3名、平成30年度3名)]。

(3) 養首城跡発掘調査への支援

今回報告する養首城跡の本発掘調査では、平成25年度の現地調査において、町担当職員の現場対応に係る業務時間確保のために、派遣職員による他の現場対応といった支援を受けることができ、町担当職員の負担軽減につながった。また、現地調査終了後に実施した出土遺物(陶磁器)の基礎整理に際しては、北海道恵庭市派遣の森秀之氏、福岡県筑紫野市の小鹿野亮氏、白石市派遣の日下和寿氏の支援を受けた。町内での発掘調査が継続して実施される中、本報告書の刊行を完了することができた背景には、こうした派遣職員の支援・協力があつたことは言うまでもない。改めて、本書作成を担当した職員として、感謝の意を表したい。

第4表 山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況(直接派遣) (H25年4月～H31年3月末現在)

派遣年度	氏名	派遣元	派遣期間	備考
H25年度	森 秀之	北海道恵庭市	H25.4.1～H26.3.31	文化財業務全般(埋蔵文化財事前協議・確認調査等対応ほか) 養首城跡出土遺物整理の支援
	草場 啓一	福岡県筑紫野市	H26.12.1～12.31	合戦原遺跡確認調査
	小鹿野 亮	福岡県筑紫野市	H26.1.1～2.28	合戦原遺跡確認調査、養首城跡出土遺物整理の支援
	日下 和寿	宮城県白石市	H25.12.1～H26.3.31	遺1日程度の支援
H26年度	小南 裕一	福岡県北九州市	H27.1.1～2.28	大塚遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
	中村 昇平	福岡県春日市	H27.3.1～3.31	大塚遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
H27年度	木下 晴一	香川県	H27.4.1～H28.3.31	各種業務全般支援、復興事業・民間開発の支援
	城門 義廣	福岡県	H27.4.1～H28.3.31	各種業務全般支援、大塚遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
	熊代 昌之	福岡県久留米市	H27.6.1～7.31	大塚遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
	川口 陽子	福岡県筑紫野市	H27.8.1～10.9	北経原遺跡(民間・店舗開発)本調査対応
H28年度	城門 義廣	福岡県	H28.4.1～9.30	合戦原遺跡線刻画移設工事対応 大塚遺跡(民間・土砂採取)報告書対応
	星野 恵美	福岡県福岡市	H28.4.1～9.30	日向遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
H29年度	飯倉 有六	福岡県福岡市	H28.10.1～H29.3.31	川内遺跡(民間・土砂採取)本調査対応
	瀧本 正志	神奈川県	H29.4.1～H30.3.31	各種業務全般支援、復興事業・収蔵庫建設対応
H30年度	瀧本 正志	神奈川県	H30.4.1～H31.3.31	各種業務全般支援、復興事業・収蔵庫建設対応

第5表 山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況(宮城県経由・出張扱い) (H25年4月～H31年3月末現在)

派遣年度	人数	派遣職員(派遣元)	備考			
H26年度	8名	大友 邦彦・佐藤 則之(宮城県)、 長橋 至(山形県)、石川 智紀(新潟県)、小瀧 忠司(岐阜県)、東影 悠(奈良県)、 御旗 貞義(福井県)、守岡 正司(鳥根県)	復興事業の支援			
		H27年度		9名	高橋 洋彰・下山 貴生・長内 祐輔・佐藤 則之(宮城県)、 長橋 至(山形県)、伊藤 智樹(千葉県)、飯坂 盛泰(新潟県)、小瀧 忠司(岐阜県)、 杉山 一雄(岡山県)	#
		H28年度		8名	高橋 洋彰・下山 貴生・佐藤 則之・熊谷 宏規・白崎 恵介・三好 秀樹(宮城県) 長橋 至(山形県)、飯坂 盛泰(新潟県)	復興事業の支援 民間開発の支援
H29年度	3名	下山 貴生・山口 貴久・廣谷 和也(宮城県)	#			
H30年度	3名	下山 貴生・廣谷 和也・高橋 透(宮城県)	復興事業の支援			

第2章 発掘調査の成果

第1節 基本層序

荻首城跡は、標高5～20mの丘陵及び平野部に位置する。今回発掘調査を実施したA・B区は荻首城跡本丸北側に位置する標高9m前後の「二の丸跡」の一部に該当し、明治維新から現代に至るまで坂元小学校の用地として活用されてきた範囲にあたる。発掘調査による基本層序の確認の結果、A区の南半（荻首城二の丸跡南半）については、旧表土等は全く残存しておらず、現在の学校校庭構築土（基本層Ⅰ層）直下（浅いところで数cm程度）で地山（基本層Ⅴ層）が確認された。一方、A区北半～B区（荻首城二の丸跡北半）にかけては、地山（基本層Ⅴ層）の直上に旧表土（Ⅳ層）と学校造成時の盛土（Ⅱ～Ⅲ）が厚く堆積していた。このことから、今回の発掘区を含む荻首城二の丸跡は、明治維新以後、学校用地の造成工事により、その南半付近が大きく削平を受けているものの、北半については盛土により当時の遺構面が良好に保存されていることが確認された。今回調査を実施したA・B区の基本層序の概要をまとめると以下のとおりとなる。

[荻首城跡 A区及びB-1区 基本層序]（第7図参照）

- Ⅰ層**：現代の表土及び盛土。地点によりその様相が異なり、A区東端においては現在の小学校校庭の砂質土〔Ⅰb層：にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土〕とその下の校庭構築土〔Ⅰc層：明黄褐色（10YR6/6）シルト土〕、A区北側においてはその他学校施設造成時の盛土〔Ⅰa層：褐灰色（10YR4/1）シルト土〕が認められる。
- Ⅱ層**：旧表土及び盛土。色調・混入物等の違いにより、Ⅱa層〔黒褐色（10YR3/2）シルト土〕とⅡb層〔にぶい黄褐色（10YR5/3・10YR4/3）シルト土〕に細別される。Ⅱb層は地山ブロックや碎石等が多量含まれる盛土で、その上層に比較的混入物の少ないⅡa層が堆積している。現代の小学校以前の表土・盛土とみられる。
- Ⅲ層**：盛土。暗褐色（10YR3/4）シルト土。碎石を含む層で、この層の上面から碎石を含む方形の基礎が掘り込まれている。Ⅱ層以前の小学校旧校舎造成に伴う盛土と考えられる。
- Ⅳ層**：旧表土。Ⅰ～Ⅲ層とは異なり、碎石等は含まれない比較的均一な堆積層である。色調・混入物等の違いにより、Ⅳa層〔暗褐色（10YR3/3）シルト土〕とⅣb層〔褐色（10YR4/4）シルト土〕に細別される。基本的にはⅣb層→Ⅳa層の順に堆積している。Ⅳa層には近世の遺物等が含まれることから、近世以前の旧表土、Ⅳb層は地山への漸移層とみられる。
- Ⅴ層**：地山。各地点で異なる種類の地山が確認された。
基本的にはⅤb層〔明黄褐色（10YR6/6）シルト土/細礫を含む〕→Ⅴa層〔浅黄色（2.5Y7/4）砂質シルト土/花崗岩質の砂礫を含む〕の順に堆積していると思われる。

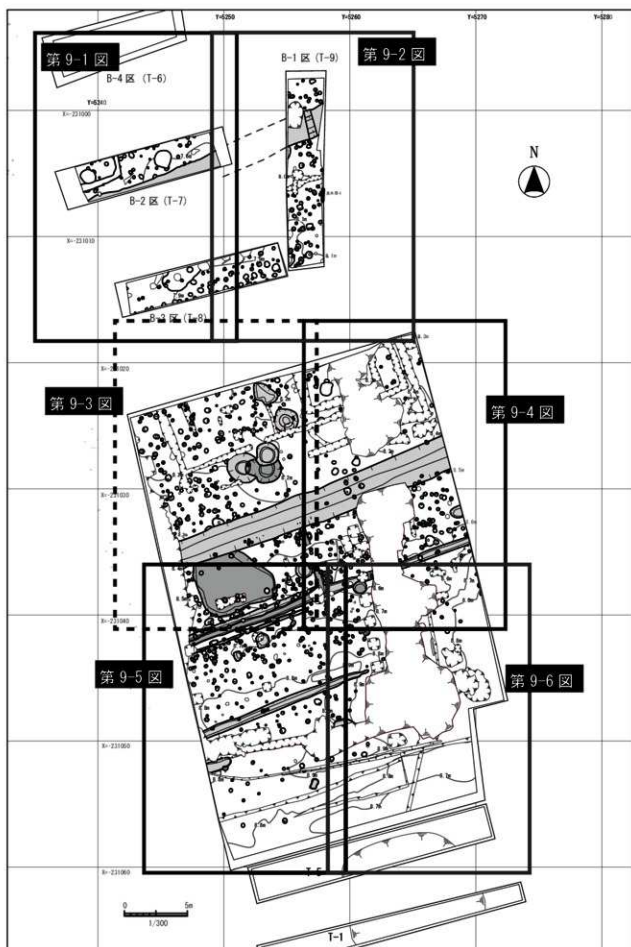
第2節 発見された遺構と遺物の概要

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡24棟、柱穴列跡15条、溝跡7条、井戸跡7基、土坑8基、竪穴状遺構1基、柱穴跡・小穴746個（掘立柱建物跡・柱穴列跡を構成する柱穴を含む）である（全体図：第7図、掲載区分図：第8図、個別平面図：第9-1～6図参照）。

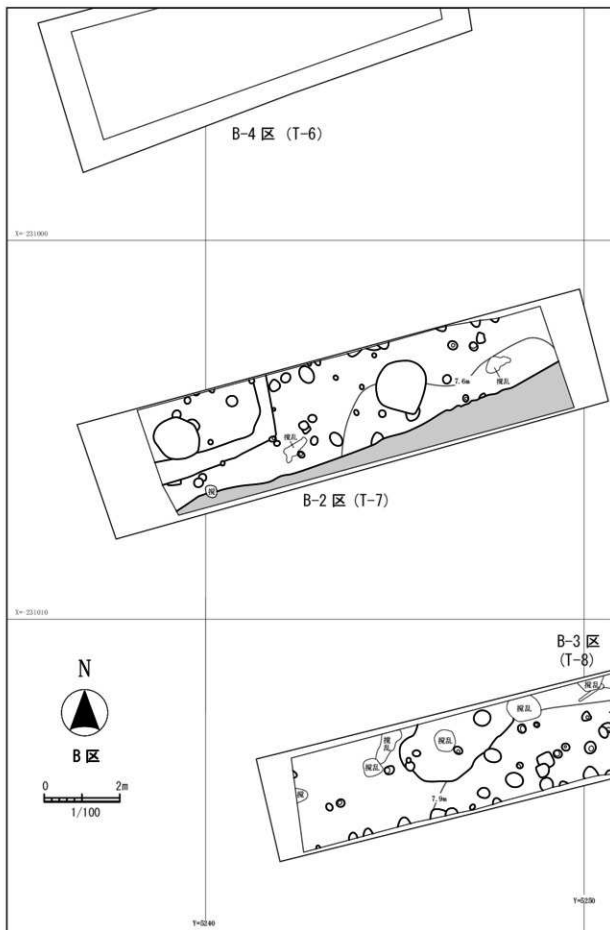
これらの遺構から出土した遺物は、遺物収納箱（長59cm×幅38cm×深20cm）で6箱程度出土しており、その内訳は、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦質土器、鉄製品、石器、土製品などである。検出した遺構のほとんどは、その特徴・出土遺物の年代と荻首城の歴史的経緯からみて、中世末～近世に属するものと考えられる。以下、発見された遺構・遺物について記述する。



第7図 藁首城跡 調査区全体図



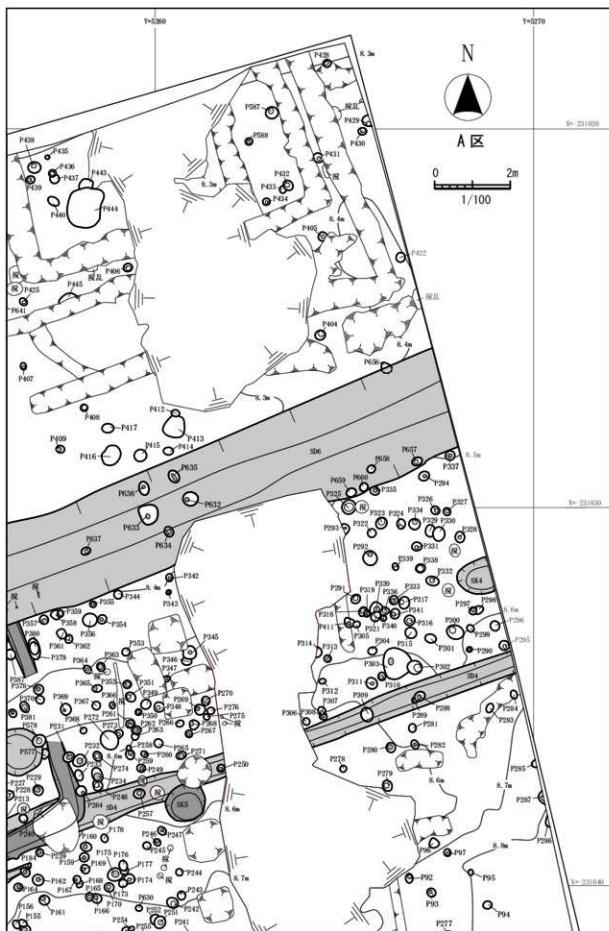
第8図 葺首城跡 個別平面図 掲載区分図



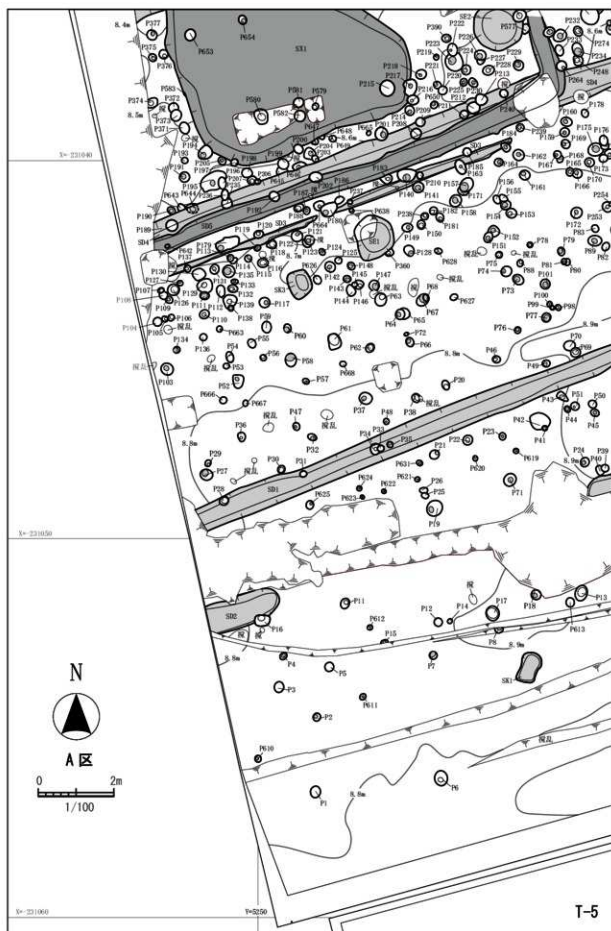
第9-1図 葦首城跡 個別平面図(1)



第9-2図 葦首城跡 個別平面図(2)



第9-4図 葦首城跡 個別平面図(4)



第9-5図 葦首城跡 個別平面図(5)

1 掘立柱建物跡、柱穴列跡、その他の柱穴・小穴

今回の調査では、746個の柱穴跡・小穴を精査した。これらの柱穴・小穴の多くは、掘立柱建物跡や柱穴列跡などを構成する柱穴であったと考えられる。これらの遺構を検討した結果、掘立柱建物跡24棟、柱穴列跡15条を抽出することができた。以下、柱穴・小穴の調査方法と建物の認定基準、確認した建物の詳細、その他の柱穴・小穴の特徴について記載する。

(1) 柱穴・小穴の調査方法と掘立柱建物跡の認定方法

本項で報告する掘立柱建物跡については、次の手順で検討を行い、その認定を行った。また、検出した柱穴・小穴の調査方法は以下のとおり行った。

【柱穴・小穴の調査方法】

今回の調査は、工事等の工程の関係から現場での調査期間に限りがあったこと、復興事業に伴う発掘調査であったこと等から、柱穴・小穴の記録作成の一部省略（単層ないし柱痕跡のない小穴の断面図作成の省略、柱穴・小穴の下場計測の省略）を行った。ただし、今後も建物の再検討ができる情報を記録・提示するために、柱痕跡の有無の確認、重複関係の確認、柱穴・小穴すべての土層注記作成、底面標高の記録、柱穴の断面写真撮影は徹底して行うこととした。したがって、本報告においては、検出した柱穴・小穴すべての情報（平面・属性表）を掲載している。

【建物・柱穴列の認定基準】

- ① 建物については、柱通り・柱の対応関係のよいもので、歪みの少ない四角形・長方形となるものを建物として認定した。また、柱通り・柱の対応関係が多少悪い場合でも、柱列が平行し、隅柱の位置が対応する歪みの少ないものも建物として認定した。
- ② 柱穴列については、原則として柱穴が直線的・かつある程度一定の間隔で並ぶものを優先して「柱穴列」として認定した。

【建物・柱穴列抽出の手順】

建物の抽出作業は、原則として、現地調査の段階で行い、その後、整理作業段階でそれらの建物についての再検討を行うといった2段階での作業を経て建物・柱穴列を認定した。

（現地作業での手順）

- ① 遺構検出段階で、柱穴及び柱痕跡のプランを測量して作成した白図をもとに建物・柱穴列を検討。
- ② 柱穴精査（半裁）時に遺構の重複関係・深さ・埋土の状態を確認し、①で検討した建物・柱穴列と照らし合わせ、切合の矛盾や柱筋等を考慮しながら再度検討。
- ③ ①と②の検討により、建物・柱穴列として想定しても差し支えないと判断できたものを建物・柱穴列として認定。
- ④ 建物・柱穴列として認定できなかった柱穴のみを抽出し、かつ、柱穴群の周囲を再度精査し、柱穴の検出漏れがないか確認した上で、残った柱穴で再度建物を検討。

（整理作業での手順）

- ① 現地調査で認定した建物・柱穴列の方向・軸をもとに、再度余った柱穴で建物を検討。
検討にあたっては、現場で作成した柱穴の属性表（埋土・底面標高などの情報）を参考にした。
- ② 現地調査で認定した建物・柱穴列の再確認（より大型にならないか、建物として無理がないか、庇等の付属施設がないかなどの再確認）。

以上の方法により、掘立柱建物跡・柱穴列跡を認定したが、これらを構成する柱穴として判断できたものは746個中286個（全体の3割程度）であり、約7割の「柱穴・小穴」が残る結果となった。これらの残された柱穴・小穴の多くは、本来、建物等を構成する柱穴であったと考えられ、今回の調査区内ではさらに建物・柱穴列などが存在したと推定される。このことから、今回報告する建物・柱穴列については、今後の掘立柱建物等の研究の進展、建物群の再検討等により、変更・追加する可能性があることを申し添えておく。

(2) 検出した掘立柱建物跡・柱穴列跡

今回の調査では、掘立柱建物跡24棟(SB1~24)、柱穴列跡15条(SA1~15)を検出した。以下、それぞれの詳細について記載する。なお、本書での掘立柱建物跡・柱穴列跡の情報掲載にあたっては、柱穴規模・柱間寸法・傾きなどの各計測値、柱穴の土層観察表、平面図の表記方法は以下のとおりとした。

【各柱穴・ピットの個別情報の記載方法】

(例) SB★■ 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット番号(遺構・坑跡) No. 遺構規模(m)			柱穴規模			柱間寸法	傾き	備考
	早期	中期	後期	早期	中期	後期			
P1	100	100	100	100	100	100	100	100	100
P2	100	100	100	100	100	100	100	100	100
P3	100	100	100	100	100	100	100	100	100
P4	100	100	100	100	100	100	100	100	100

(※) 100の内訳は推定値

①類型表
により
変号化

②その他の
記載事項参照

●遺構跡におけるピット(柱穴・小穴)類型



【柱穴前・後方の埋土・埋土上部】

- 土色
- 1: 黒褐色 (T.0003/2)
 - 2: 暗褐色 (T.0003/3)
 - 3: 褐色 (T.0003/3)
 - 4: 黒色 (T.0002/1)
 - 5: 黒褐色 (T.0003/1)
 - 6: 黒褐色 (T.0003/2)
 - 7: 暗褐色 (T.0003/3)
 - 8: 暗褐色 (T.0003/4)
 - 9: 灰褐色 (T.0004/2)
 - 10: 灰褐色 (T.0005/2)
 - 11: 灰褐色 (T.0004/3)
 - 12: 灰褐色 (T.0005/3)
 - 13: 灰褐色 (T.0005/4)
 - 14: 灰褐色 (T.0006/3)
 - 15: 灰褐色 (T.0007/2)
 - 16: 暗褐色 (T.0003/1)
 - 17: 暗褐色 (T.0003/2)
- 土質
- ピット
- 埋入物
- ▲ 埋土ブロック多く含む
 - 埋土ブロック少量含む
 - △ 埋土粒子多く含む
 - ◇ 埋土粒子少量含む
 - ▽ 埋土粒子微量含む

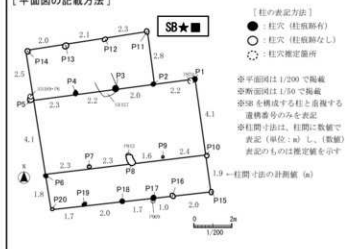
(※) 土を掘り出した場合は埋土層と埋土層を区別して記載する。下記の内容については記載を省略した。灰色は埋土・埋土上部、埋土上部、埋土上部ブロック・埋土

【記載例】 100-1-1: 土色: 黒褐色 (T.0003/2)、土質: シルト、埋入物: 埋土ブロック多く含む

●その他の記載事項

- 柱穴・ピットの計測値
- (傾き) は推定値を示す
- 柱穴・ピット種類の「埋土・埋土上部」記載事項
- 柱穴の場合には「埋土層」を省略する
- (埋土層) 等の記載は「柱穴・小穴」の埋土層が2層以上に分類した場合は示す
- 「傾き」は柱穴掘り出し時の埋土・埋土上部 / 「傾き」は柱穴掘り出し時の埋土・埋土上部 / 「埋土」は柱穴掘り出し時の埋土・埋土上部 / 「埋土」は柱穴掘り出し時の埋土・埋土上部
- 埋入物の記載事項
- 埋入物: 柱穴に埋められているもの
- 傾き: 柱穴に埋められているもの
- この他、埋入物前・出土遺物も

【平面図の記載方法】



1) 掘立柱建物跡 (第10~23図、第6表)

今回の調査では、掘立柱建物跡を24棟(SB1~24)確認した(第10図)。建物跡はA区中央部から北側の平坦面上に分布する。なお、B区周辺においても同様の柱穴跡が分布していることから、本来はA区北側にも建物跡が存在していた可能性が高いが、B区については、調査範囲が限られていたことから、建物の認定には至っていない。今回検出した掘立柱建物跡については、柱穴の特徴・遺構の重複関係・遺跡の性格などから、そのほとんどが中世末~近世の建物であると考えられる。以下、その概要について説明する。それぞれの建物の詳細については、第11~23図、第6表を参照していただきたい。

【建物の規模】

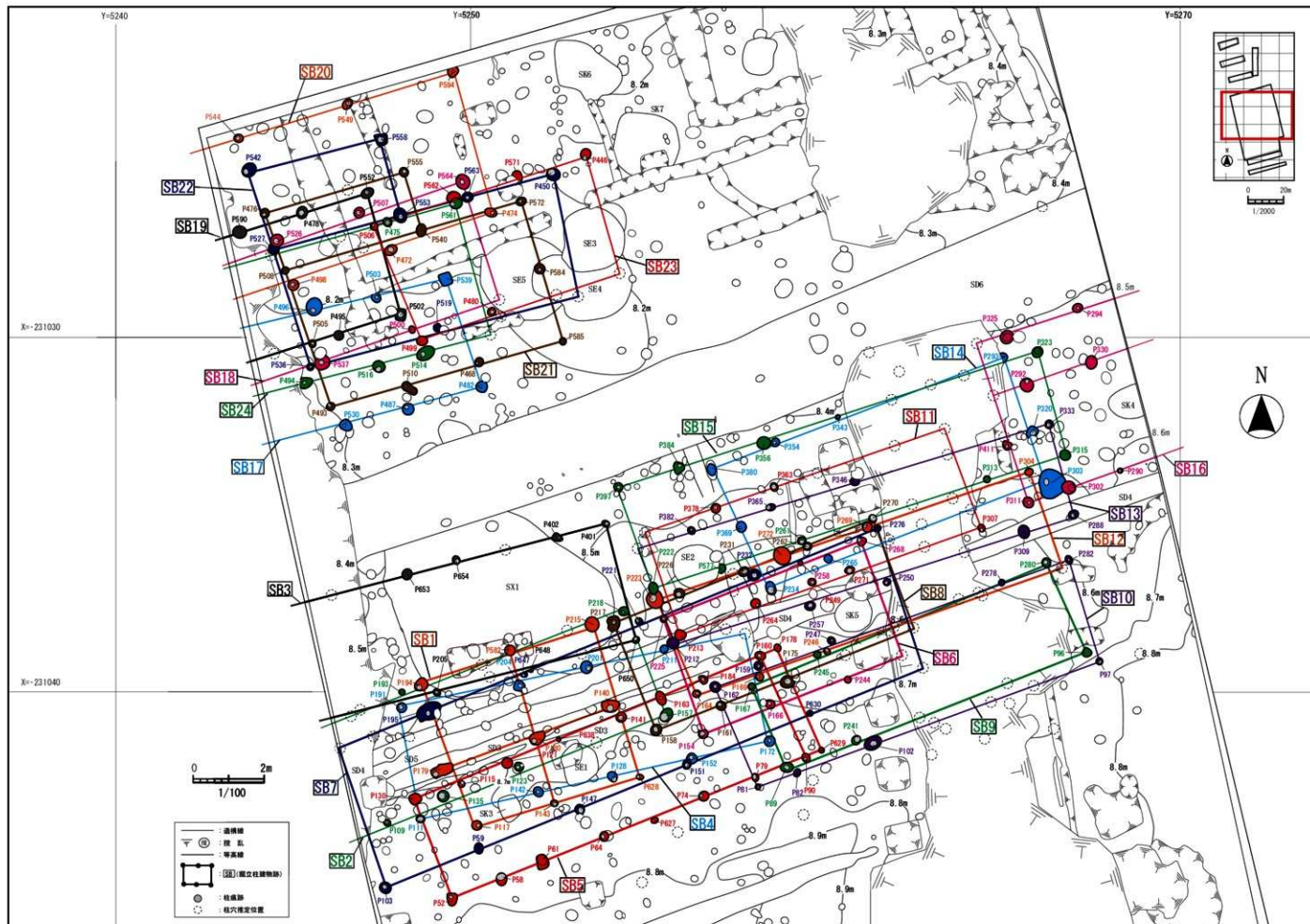
建物跡の身舎の規模の内訳は、7間の建物が1棟(7間×1間:1棟)、6間の建物が2棟(6間×1間:2棟)、5間の建物が5棟(5間以上×1間:1棟/5間×1間:4棟)、4間の建物が5棟(4間以上×1間:1棟/4間×2間:1棟/4間×1間:3棟)、3間の建物が5棟(3間以上×1間:1棟/3間×2間:1棟/3間×1間:3棟)、2間の建物が6棟(2間以上×2間:1棟/2間×2間:1棟/2間以上×1間:4棟)である。

【柱穴規模・柱痕跡・柱間寸法】

柱穴掘方の規模は、長軸25~30cm前後の円形・楕円形を呈するものが主体で、柱痕跡は、直径10cm前後のもので円形・楕円形を呈するものが多い。身舎の桁行の柱間寸法は、1.1~3.7mでばらつきがあるが、1.9~2.4m前後のものが多い。

【建物の方向・傾き】

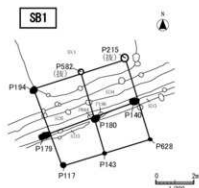
建物棟方向・傾きの内訳は、いずれも「建物の東辺・西辺が真北に対して西に傾く東西棟建物」である。



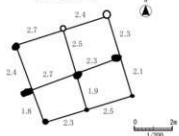
第10図 藁首城跡 獨立柱建物跡 平面図

【SB1 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行2間×梁行2間 東西棟建物跡（総柱建物） / 【建物方向】 N-21°-W
 【構成Pit】 P117・140・143・179・180・194・215・S82・628
 【平面規模】 桁行5.1m×梁行4.4m（身舎面積22.4㎡）
 【柱間寸法】 桁行2.3～2.7m・梁行1.8～2.4m
 【出土遺物】 なし / 【重複】 P664、SX1、SD3→SB1→P186



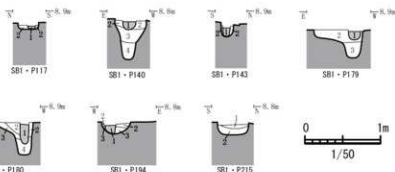
【SB1 模式図】



【P117・140・143・179・180・194】
 1層：柱前跡 2～4層：掘方埋土
 【P215】1・2層：埋積土（柱採取）

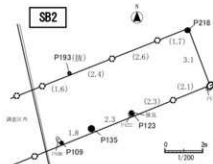
SB1 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱式・ピット部方 (柱間・梁間・身舎・埋積土)				柱 遺 跡			柱 間 寸 法 (東・西・北・南)	注 記 (重複・出土遺物等)		
	平面形	長 軸	短 軸	残存 部	平面形	長 軸	短 軸			埋 土	
P117	円形	2.5	2.1	7	R, 6	円形	1.1	1.0	6A	あ	
P140	角円形	4.5	4.0	5.0	R, 1	製埋1: 6Aa 製埋2: 6Aa 製埋3: 6Aa	円形	1.9	1.8	6A	い SD2上層前
P143	円形	1.7	1.7	1.8	R, 5	7Aa	円形	1.4	1.1	6A	あ
P179	角円形	6.6	3.2	3.7	R, 2	製埋1: 7Aa 製埋2: 7Aa	円形	1.6	1.4	6A	い SD2上層前
P180	角円形	5.0	3.3	4.4	R, 2	製埋1: 7Aa・h 製埋2: 7Aa	円形	1.4	1.4	6A	い P664、SD2上層前 埋土・柱跡
P194	角円形	3.6	3.0	1.6	R, 4	製埋1: 6Aa 製埋2: 9Aa	円形	1.5	1.5	6A	あ SX2上層前
P215	円形	3.7	3.4	1.7	R, 4	抜穴1: 9Aa 抜穴2: 7Aa	-	-	-	-	SX1上層前 柱採取 埋土・柱跡
P582	円形	3.0	2.8	2.8	R, 3	抜穴: 6Aa・h	-	-	-	-	SX1上層前 柱採取 埋土・柱跡
P628	円形	1.6	1.5	1	R, 6	12Aa	円形	0.9	0.9	6A	あ



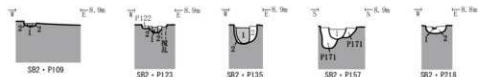
【SB2 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行4間以上（推定）×梁行1間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-23°-W
 【構成Pit】 P109・123・135・157・193・218 / 【平面規模】 桁行8.5m以上×梁行3.1m（身舎面積26.4㎡以上）
 【柱間寸法】 桁行1.8～2.3m・梁行3.1m / 【出土遺物】 なし / 【重複】 P122・171→SB2→P108



SB2 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱式・ピット部方 (柱間・梁間・身舎・埋積土)				柱 遺 跡			柱 間 寸 法 (東・西・北・南)	注 記 (重複・出土遺物等)		
	平面形	長 軸	短 軸	残存 部	平面形	長 軸	短 軸			埋 土	
P109	円形	1.8	1.7	4	R, 6	13Aa	円形	1.0	0.9	6A	あ P108上層前
P123	円形	2.9	2.5	1.2	R, 4	6Aa	円形	1.1	1.1	6A	あ P122上層前
P125	円形	2.1	2.0	2.5	R, 4	12Aa・h	円形	2.0	2.0	6A	あ 埋土・彩色土等
P157	円形	2.7	2.3	1.6	R, 8	抜穴: 8Aa	-	-	-	-	P171上層前 柱採取
P193	円形	1.6	1.5	6	R, 3	抜穴: 12Aa	-	-	-	-	柱採取
P218	円形	2.5	2.3	8	R, 4	13Aa	円形	0.9	0.7	6A	い

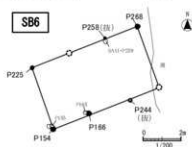


【P109・123・135・218】1層：柱前跡 2層：掘方埋土
 【P157】1層：埋積土（柱採取）

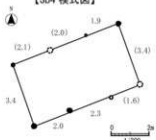
第11図 SB1・2 掘立柱建物跡

【SB6 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行3間×梁行1間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-19°-W
 【構成 Pit】 P154・166・225・244・258・268 / 【平面規模】 桁行6.0m×梁行3.4m（身舎面積20.4㎡）
 【柱間寸法】 桁行1.9～2.3m・梁行3.4m / 【出土遺物】 土師器 / 【重複】 SA11～SB6～P155・165

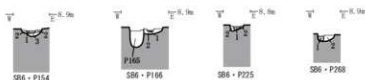


【SB4 模式図】



SB6 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

遺構番号	柱穴・ピット属性				柱遺跡				柱間寸法	備考 (重複・出土遺物等)
	平面形	長	幅	深	平面形	長	幅	埋上		
P154	円形	27	25	8	8.6 埋埋1・7.6a 埋埋2・6.6a	円形	15	14	TA	い P153より古 土師器
P166	円形	23	23	7	8.6 12.5a	円形	22	19	11A	い P165より古
P225	円形	16	16	6	8.6 11.5a	円形	10	9	TA	あ
P244	円形	19	18	16	8.1 柱穴・6.6T	—	—	—	—	—
P258	円形	22	20	8	8.1 柱穴・7.6a	—	—	—	—	—
P268	円形	24	23	9	8.6 7.6a	円形	13	10	6A	あ



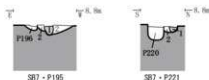
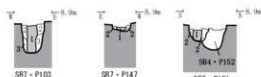
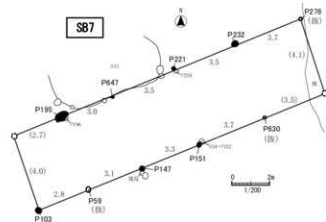
【P154・166・225・268】

1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土



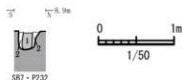
【SB7 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行5間×梁行1間（推定） 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-20°-W
 【構成 Pit】 P59・103・147・151・195・221・232・276・630・647
 【平面規模】 桁行16.4m（推定）×梁行4.1m（推定）（身舎面積67.2㎡）
 【柱間寸法】 桁行2.8～3.7m・梁行4.0～4.1m（推定） / 【出土遺物】 なし / 【重複】 SB4～SB7～P196・220・SX1



SB7 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

遺構番号	柱穴・ピット属性				柱遺跡				柱間寸法	備考 (重複・出土遺物等)
	平面形	長	幅	深	平面形	長	幅	埋上		
P59	円形	25	22	27	8.6 柱穴・12.0a	—	—	—	—	柱痕跡
P103	円形	33	31	40	8.3 埋埋1・6.6a 埋埋2・6.6a	円形	14	12	6A	あ
P147	円形	25	24	9	8.6 12.5a	円形	19	15	11A	あ
P151	円形	27	26	20	8.6 14.0a	円形	13	12	6A	あ
P196	楕円形	73	45	13	8.4 11.6a	楕円形	16	12	6A	5 P196より古
P221	円形	19	18	10	8.6 8.6a	円形	12	9	6A	あ P220より古
P232	円形	33	29	25	8.3 14.6a・h	円形	16	15	6A	あ 埋・黒色土層
P276	円形	18	17	13	8.4 柱穴・9.6a	—	—	—	—	柱痕跡
P630	円形	16	16	9	8.4 柱穴・12.6a	—	—	—	—	柱痕跡
P647	円形	19	13	4	8.8 12.0a	円形	9	9	6A	あ S31より古



【P103・147・151・195・221・232】

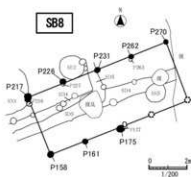
1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土



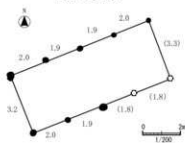
第14図 SB6・7 掘立柱建物跡

【SB8 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行4間×梁行1間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-22°-W
 【構成Pit】 P158・161・175・217・226・231・262・270 / 【平面規模】 桁行7.8m×梁行3.2m(身舎面積25.0㎡)
 【柱間寸法】 桁行1.9~2.0m、梁行3.2m / 【出土遺物】 須恵器(第31図1)
 【重複】 P227・263, Sd5, SX1→SB8→P177・216

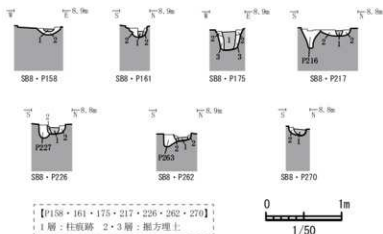


【SB8 模式図】



SB8 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

遺構番号	柱穴・ピット諸方 <small>(点線・短線・破線・点線短線)</small>				柱遺跡				柱間寸法 (東側・出土遺物等)		
	平面形	長	短	残存部	柱面	柱上	平面形	長		短	柱上
P158	円形	30	28	9	8.5	10Aa	円形	17	14	9A	3.1
P161	円形	25	23	14	8.8	11Ba	円形	13	10	7A	3.0
P175	円形	34	31	30	8.3	断面1:7Ab 断面2:12Ab	円形	29	17	6A	3.0 P177より古須恵器
P217	円形	38	35	19	8.4	12Ba	円形	12	10	6A	3.0 P216より古須恵器
P226	円形	26	26	14	8.4	6Ab	円形	15	15	7A	3.0 P227より新
P231	楕円形	30	22	15	8.4	9Ab	楕円形	16	12	8A	3.0 より新
P262	円形	23	23	11	8.4	18Aa	円形	14	14	9A	3.0 より新
P270	円形	23	20	10	8.4	11Ba	円形	19	16	6A	3.0



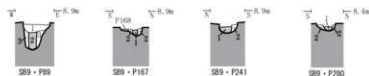
【SB9 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行4間(推定)×梁行1間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-23°-W
 【構成Pit】 P89・96・167・241・245・280 / 【平面規模】 桁行9.1m×梁行2.9m(身舎面積26.4㎡)
 【柱間寸法】 桁行2.0~2.1m、梁行2.5~2.9m / 【出土遺物】 なし / 【重複】 P168→SB9



SB9 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

遺構番号	柱穴・ピット諸方 <small>(点線・短線・破線・点線短線)</small>				柱遺跡				柱間寸法 (東側・出土遺物等)		
	平面形	長	短	残存部	柱面	柱上	平面形	長		短	柱上
P89	楕円形	32	26	38	8.3	切欠:2Ab 断面:8Ab	円形	18	13	6A	3.0 柱切取
P96	楕円形	29	23	18	8.4	陥穴:8Ab	—	—	—	—	柱切取
P167	楕円形	23	19	10	8.5	7Ab	円形	8	7	6A	3.0 P168より新
P241	円形	25	22	18	8.6	12Ba	円形	19	16	6A	3.0
P245	円形	18	18	13	8.4	陥穴:11Aa	—	—	—	—	柱切取
P280	円形	25	23	10	8.3	12Ba	円形	13	13	6A	3.0

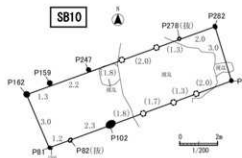


【P89】
 1層:堆積土(柱切取) 2層:柱痕跡 3層:掘方土上
 【P167・241・280】
 1層:柱痕跡 2層:掘方土上

第15図 SB8・9 掘立柱建物跡

【SB10 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行6間(推定)×梁行1間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-22°-W
 【構成Pit】 P81・82・97・102・159・162・247・278・282 / 【平面規模】 桁行10.6m×梁行3.0m(身舎面積31.8㎡)
 【柱間寸法】 桁行1.2~2.3m・梁行3.0m / 【出土遺物】 なし / 【重複】 P80→SB10



SB10 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

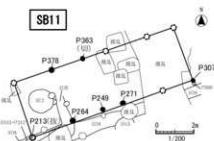
遺構番号	柱穴・ピット掘方(注:形状・寸法・高さ等は凡例参照)				柱遺跡				柱間(東側・出土遺物等)		
	平面形	長	短	残存状況	高さ	埋土	平面形	長		短	埋土
P81	円形	16	14	8	8.6	6.6a	円形	7	7	6A	なし
P82	楕円形	23	17	8	8.6	跡欠:6.6a	-	-	-	-	柱抜取
P97	円形	19	17	18	8.5	2.6a	円形	11	9	7A	あり
P102	楕円形	30	35	32	8.4	新埋土:1.14a+b 旧埋土:1.15a	円形	19	17	6A	埋土:黄色土層
P159	円形	25	25	30	8.3	1.6a	円形	10	9	6A	あり
P162	円形	30	28	36	8.4	1.6a+b	円形	12	11	6A	埋土:黄色土層
P247	円形	21	18	11	8.6	1.6a	円形	9	8	6A	あり
P278	円形	15	15	18	8.4	跡欠:5.87	-	-	-	-	柱抜取
P282	楕円形	22	17	10	8.5	7.6a	円形	9	7	6A	あり



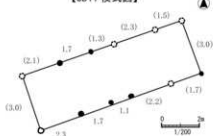
【P81・97・102・159・162・247・282】
 1層:柱痕跡 2・3層:掘方埋土

【SB11 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行5間(推定)×梁行1間(推定) 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-22°-W
 【構成Pit】 P213・249・264・271・307・363・378 / 【平面規模】 桁行9.0m×梁行3.0m(推定)(身舎面積27.0㎡)
 【柱間寸法】 桁行1.1~2.3m・梁行3.0m(推定) / 【出土遺物】 土師器・石器
 【重複】 SB13、P308、SD4・5→SB11



【SB11 模式図】



SB11 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット掘方(注:形状・寸法・高さ等は凡例参照)				柱遺跡				柱間(東側・出土遺物等)		
	平面形	長	短	残存状況	高さ	埋土	平面形	長		短	埋土
P213	円形	30	29	33	8.3	跡欠:9.47a+b 跡欠:7.9a	-	-	-	-	P813・P212、SD4・5(中央・北面)土師器、包拵器埋土:黄褐色少量
P249	円形	30	19	8	8.5	1.2a	円形	12	11	6A	あり
P264	円形	23	23	2	8.3	1.6a	円形	9	8	6A	あり
P271	円形	24	20	18	8.4	1.6a	円形	15	15	7A	あり
P307	円形	26	19	7	8.4	1.2a	円形	10	9	6A	P308より新
P363	円形	29	18	21	8.2	切欠:7.8a 新埋土:1.6a	円形	15	15	8A	包拵器
P378	円形	24	23	15	8.2	8.6a	円形	13	13	6A	あり

【P213】
 1・2層:堆積土(柱抜取)
 【P271・307・378】
 1層:柱痕跡 2層:掘方埋土
 【P363】
 1層:堆積土(柱切取) 2層:柱痕跡 3層:掘方埋土



第16図 SB10・11 掘立柱建物跡

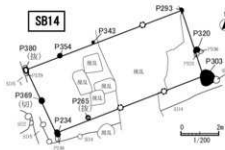
【SB14 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行4間（推定）×梁行2間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-24°-W

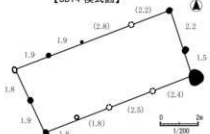
【構成Pit】 P234・265・293・303・320・343・354・369・380

【平面規模】 桁行8.8m×梁行3.7m（身舎面積32.6㎡）

【柱間寸法】 桁行1.8～1.9m・梁行1.5～2.2m / 【出土遺物】 なし / 【重複】 P248・336・379→SB14→SB16、P321



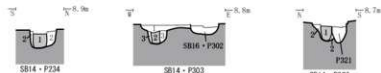
【SB14 模式図】



【P234・320】1層：柱痕跡 2層：掘方埋土
 【P303】1層：堆積土（柱切取） 2層：柱痕跡 3層：掘方埋土

SB14 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

遺構番号	柱穴・ピット掘方				柱痕跡				柱型	備考 (重複・出土遺物等)	
	平面形	長	短	残存底面形状	埋土	平面形	長	短			
P234	円形	23	21	23	8.3	掘方	20	19	9A	→SB14上層	
P265	円形	22	20	5	8.5	掘方	—	—	—	柱切取	
P293	円形	23	18	4	8.4	掘方	8	8	6A	—	
P303	円形	81	67	27	8.3	切穴・8A×3 敷層：12A	円形	19	13	6A	SB14・P302上層古瓦知取、埋土・敷層
P320	円形	28	27	24	8.2	11A	円形	18	15	7A	→SB14上層
P343	円形	14	12	4	8.4	12A	円形	7	6	11A	—
P354	円形	23	20	9	8.4	7A	円形	9	9	6A	—
P369	円形	26	26	26	8.2	切穴・8A×3 敷層：6A	円形	7	8	6A	柱切取 埋土・掘方
P380	円形	30	25	23	8.2	掘方・7A	—	—	—	→P279上層 柱切取	



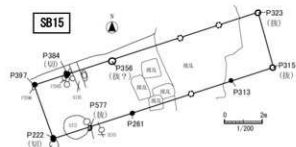
【SB15 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行5間（推定）×梁行1間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-18°-W

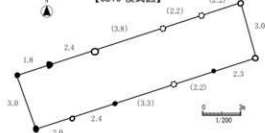
【構成Pit】 P222・261・313・315・323・356・384・397・577

【平面規模】 桁行12.2m×梁行3.0m（身舎面積36.6㎡） / 【柱間寸法】 桁行1.8～2.4m・梁行3.0m

【出土遺物】 土師器 / 【重複】 SB12、P385、SD5→SB15→P396、SE2

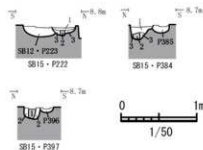


【SB15 模式図】



SB15 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

遺構番号	柱穴・ピット掘方				柱痕跡				柱型	備考 (重複・出土遺物等)	
	平面形	長	短	残存底面形状	埋土	平面形	長	短			
P222	円形	28	26	12	8.4	切穴・7A 敷層：11A	円形	7	6	6A	SB12・P223上層 新 柱知取
P261	円形	20	20	5	8.5	7A	円形	14	13	6A	—
P313	円形	18	17	11	8.4	7A	円形	9	9	7A	—
P315	円形	30	27	18	8.1	切穴：8A 切穴：11A	—	—	—	—	柱切取
P323	円形	30	30	37	8.4	切穴：7A 敷層：8A	—	—	—	—	柱切取
P356	円形	36	34	19	8.2	1層：11A 2層：12A	—	—	—	—	土師器 柱切取
P384	円形	30	24	19	8.2	切穴：11A 敷層：7A	円形	12	10	6A	→SB15上層 柱知取
P397	円形	24	22	13	8.3	11A	円形	11	11	6A	→P396上層古瓦知取
P577	円形	28	19	8	8.4	切穴：7A	—	—	—	—	→SD2上層古瓦知取 →SD5上層 柱切取



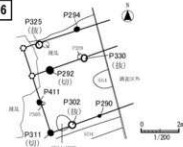
【P222・384】1層：堆積土（柱切取）
 2層：柱痕跡 3層：掘方埋土
 【P397】
 1層：柱痕跡 2層：掘方埋土

第18図 SB14・15 掘立柱建物跡

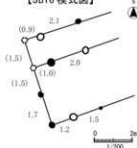
【SB16 掘立柱建物跡】

- 〔建物間数〕 桁行2間以上×梁行2間+庇 東西棟建物跡（身舎の北側に庇が付く） / 〔建物方向〕 N-20°-W
 〔構成Pit〕 P290・292・294・302・311・325・330・411
 〔平面規模〕 桁行2.7m以上×梁行3.2m（推定）・庇の出1.5m（推定）（身舎面積8.6㎡以上・庇付面積12.7㎡以上）
 〔柱間寸法〕 桁行1.2～2.0m・梁行1.7m / 〔出土遺物〕 なし / 〔重複〕 SB14、P329→SB16→P305

SB16



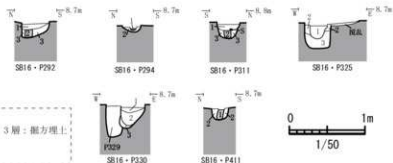
【SB16 模式図】



- 〔P294・411〕 1層：柱痕跡 2層：掘方壇上
 〔P292・311〕 1層：堆積土（柱切取） 2層：柱痕跡 3層：掘方壇上
 〔P325〕 1層：堆積土（柱切取） 2・3層：掘方壇上
 〔P330〕 1・2層：堆積土（柱切取） 3層：掘方壇上

SB16 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

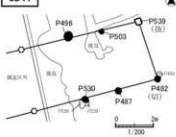
遺構番号	柱穴・ピット部方				埋土	柱痕跡			柱間寸法 (重複・出土遺物等)		
	平面形	長	短	残存部		平面形	長	短			
P290	円形	13	13	4	8.3	12.6a	円形	9	8	8A	なし
P292	円形	38	33	20	8.3	切欠：88a×h 埋土：143a	円形	12	12	7A	柱切取 礎石・扉石
P294	楕円形	28	24	8	8.4	88a	円形	10	9	6A	なし
P302	円形	35	33	13	8.4	柱穴：88a 埋土：88a×h	—	—	—	—	SB14・P303より新 柱痕跡・埋土・扉石
P311	円形	30	27	20	8.4	切欠：78a 埋土：113a	円形	10	8	8A	柱切取
P325	円形	36	33	33	8.1	柱穴：74a 埋土：143a	—	—	—	—	柱切取
P330	楕円形	36	31	32	8.2	柱穴：178a×h 埋土：98a	—	—	—	—	P329より新 柱痕跡・礎石・扉石
P411	円形	25	22	15	8.3	88a	円形	11	10	7A	なし



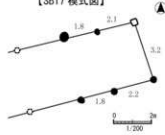
【SB17 掘立柱建物跡】

- 〔建物間数〕 桁行2間以上×梁行1間 東西棟建物跡 〔建物方向〕 N-18°-W
 〔構成Pit〕 P482・487・496・503・530・539 〔平面規模〕 桁行4.0m以上×梁行3.2m（身舎面積12.8㎡以上）
 〔柱間寸法〕 桁行1.8～2.2m・梁行3.2m / 〔出土遺物〕 なし / 〔重複〕 P528・529→SB17→P481

SB17

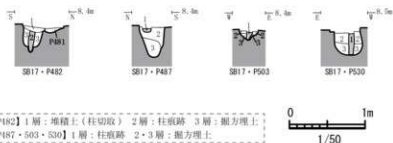


【SB17 模式図】



SB17 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット部方				埋土	柱痕跡			柱間寸法 (重複・出土遺物等)		
	平面形	長	短	残存部		平面形	長	短			
P482	円形	28	27	31	7.8	切欠：68a 埋土：68a	円形	8	8	5A	P481より新 柱切取
P487	円形	33	32	40	7.8	埋土：78a 埋土：68a	円形	12	12	6A	なし
P496	楕円形	47	42	18	8.0	78a	円形	16	13	6A	なし
P530	円形	24	23	16	8.0	埋土：178a 埋土：123a	円形	11	10	6A	なし
P503	楕円形	32	28	35	7.9	埋土：113a 埋土：68a	円形	8	8	8A	なし
P529	円形	33	31	3	8.1	88a	—	—	—	—	柱切取

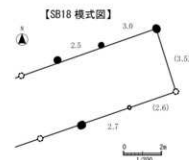
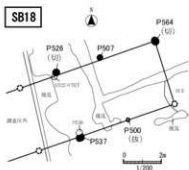


- 〔P482〕 1層：堆積土（柱切取） 2層：柱痕跡 3層：掘方壇上
 〔P487・503・530〕 1層：柱痕跡 2・3層：掘方壇上

第19図 SB16・17 掘立柱建物跡

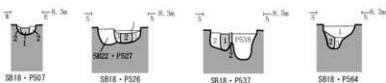
【SB18 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行2間以上×梁行1間(推定) 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-20°-W
 【構成Pit】 P500・507・526・537・564 / 【平面規模】 桁行5.5m以上×梁行3.5m(推定)(身舎面積19.3㎡以上)
 【柱間寸法】 桁行2.5~3.0m・梁行3.5m(推定) / 【出土遺物】 なし / 【重複】 SB22→SB18→PS38、SE5



SB18 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

遺構番号	積穴・ピット掘方 (形状・寸法・深さ・埋土)				積遺跡				柱型	遺物 (土器・出土遺物等)			
	平面形	長軸	短軸	残存標高	埋土	平面形	長軸	短軸			埋土		
P500	円形	1.7	1.5	2.0	8.0	踏土	6Aa	-	-	-	-	-	柱痕跡
P507	円形	2.6	2.6	1.3	8.0	12Aa	内側	1.8	1.3	2.4	赤	-	柱
P526	円形	3.5	3.5	2.0	7.8	切欠: 2Aa・N 敷層: 6Ac	内側	1.6	1.5	6Aa	赤	-	SB22・PS27より新 柱切取 埋土: 泥片少量
P537	円形	3.4	3.5	3.6	8.0	11Aa・N	内側	1.8	1.2	6Aa	赤	-	PS38より古 埋土: 埋
P564	円形	3.9	3.5	3.1	7.8	切欠: 12Aa・N 敷層: 6Aa	内側	1.8	1.3	6Aa	赤	-	柱切取 埋土: 泥片少量

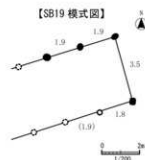
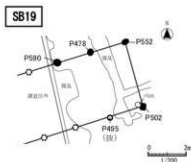


【P507・537】
 1層: 柱痕跡 2層: 掘方埋土
 【P526・564】
 1層: 堆積土(柱切取) 2層: 柱痕跡 3層: 掘方埋土



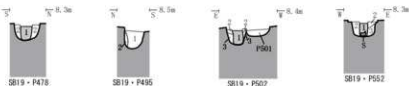
【SB19 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行2間以上×梁行1間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-15°-W / 【構成Pit】 P478・495・502・552・590
 【平面規模】 桁行3.8m以上×梁行3.5m(身舎面積13.3㎡以上) / 【柱間寸法】 桁行1.8~1.9m・梁行3.5m
 【出土遺物】 土師器 / 【重複】 SB19→P501



SB19 掘立柱建物跡 構成 Pit 属性表

遺構番号	積穴・ピット掘方 (形状・寸法・深さ・埋土)				積遺跡				柱型	遺物 (土器・出土遺物等)			
	平面形	長軸	短軸	残存標高	埋土	平面形	長軸	短軸			埋土		
P478	円形	3.0	2.8	2.4	7.9	6Aa	内側	1.7	1.6	6Aa	赤	-	柱切取 埋土: 泥片少量
P495	円形	3.9	2.7	2.4	7.9	敷土: 6Aa 敷層: 11Aa・N	-	-	-	-	-	-	柱切取 埋土: 泥片少量
P502	円形	3.0	2.5	2.0	8.0	敷層1: 7Aa 敷層2: 11Aa	内側	1.7	1.6	6Aa	赤	-	P501より古
P552	円形	3.1	3.0	2.2	7.9	敷層1: 6Aa 敷層2: 6Aa	内側	1.2	1.1	6Aa	赤	-	土師器
P590	円形	3.6	3.2	2.5	7.9	7Aa	内側	1.7	1.6	6Aa	赤	-	柱



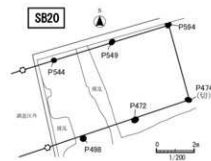
【P478・502・552】
 1層: 柱痕跡 2・3層: 掘方埋土
 【P495】
 1層: 堆積土(柱切取) 2層: 掘方埋土



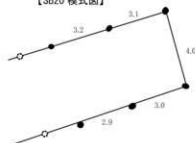
第20図 SB18・19 掘立柱建物跡

【SB20 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行2間以上×梁行1間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-15°-W
 【構成Pit】 P472・474・498・544・549・594 / 【平面規模】 桁行6.3m以上×梁行4.0m(身舎面積25.2㎡以上)
 【柱間寸法】 桁行2.9～3.2m×梁行4.0m / 【出土遺物】 なし / 【重複】 なし

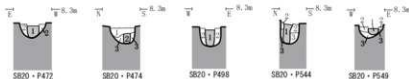


【SB20 模式図】



SB20 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット壁方 (単位: m)				柱 属性				柱 型 (基礎・出土遺物等)
	平面形	長軸	短軸	底面積	埋上	平面形	長軸	短軸	
P472	楕円形	28	27	7.9	6A	円形	17	16	6A 否
P474	円形	34	30	7.9	切欠: 148a×b 埋上: 148a	円形	11	9	6A 否 柱切取 埋上: 灰色土P
P498	円形	27	25	7.9	6A	円形	14	12	6A 否
P544	円形	26	23	7.8	埋上: 6Aa 埋上: 113a	円形	13	13	6A 否
P549	楕円形	30	22	7.9	埋上: 6Aa 埋上: 113a	円形	14	14	6A い
P594	円形	26	23	7.8	6A	円形	7	6	6A 5

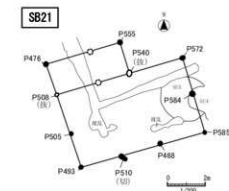


【P472・498・544・549】1層:柱痕跡 2・3層:掘方埋土
 【P474】1層:堆積土(柱切取) 2層:柱痕跡 3層:掘方埋土

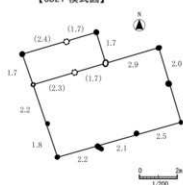


【SB21 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行3間×梁行2間・張出 東西棟建物跡(身舎の北側に張出が付く) / 【建物方向】 N-19°-W
 【構成Pit】 P468・476・493・505・508・510・540・555・572・584・585
 【平面規模】 桁行6.8m×梁行4.0m(身舎面積27.2㎡・張出面積34.2㎡)
 【柱間寸法】 桁行2.1～2.9m×梁行1.8～2.2m / 【出土遺物】 土師器 / 【重複】 SE4-SB21

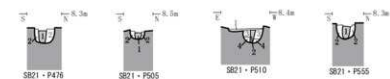


【SB21 模式図】



SB21 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット壁方 (単位: m)				柱 属性				柱 型 (基礎・出土遺物等)		
	平面形	長軸	短軸	底面積	埋上	平面形	長軸	短軸			
P468	楕円形	28	22	8.0	7a	円形	9	7	6A 5		
P476	円形	29	23	7.8	6A	円形	12	10	6A 否		
P493	円形	29	19	8.1	7A	円形	12	9	6A 否		
P505	円形	19	18	8.1	11a	円形	10	9	6A 否		
P508	円形	18	12	7.9	嵌穴: 6Aa	-	-	-	-	柱切取	
P510	円形	29	23	8.0	切欠: 113a 埋上: 113a 埋上: 73a	円形	2	6	6A 否	柱切取	
P540	円形	32	28	27	7.8	嵌穴: 73a×b	-	-	-	柱切取・埋上: 埋	
P555	楕円形	28	22	7.9	6A	円形	12	11	6A 否		
P572	円形	23	20	11	8.0	6Aa	円形	10	9	6A 否 土師器	
P584	円形	26	26	7.9	73a×b	円形	11	9	7A 否	54より細い。A材 埋上: 灰色土P	
P585	円形	18	17	7	8.1	113a×b	円形	6	5	10A 否	埋上: 灰色土P



【P476・505・555・572】
 1層:柱痕跡 2層:掘方埋土
 【P510】1層:堆積土(柱切取)
 2層:柱痕跡 3・4層:掘方埋土



第21図 SB20・21 掘立柱建物跡

【SB22 掘立柱建物跡】

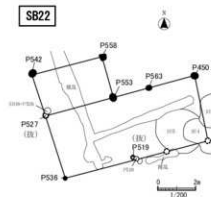
【建物間数】 桁行3間×梁行1間・張出 東西棟建物跡（身舎の北側に張出が付く） / 【建物方向】 N-17°-W

【構成Pit】 P450・519・527・536・542・553・558・563

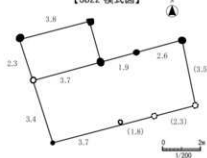
【平面規模】 桁行8.2m×梁行3.4m（身舎面積27.9㎡・張出付面積26.6㎡） / 【柱間寸法】 桁行1.9～3.7m・梁行3.4m

【出土遺物】 なし / 【重複】 SB22→SB18、P518、SE4

SB22



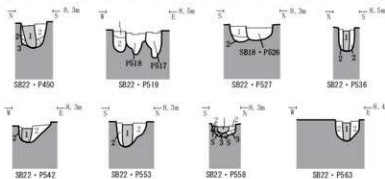
【SB22 模式図】



【P450・536・542・553・558・563】1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土
【P519・527】1・2層：堆積土（柱抜き）

SB22 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット番号	柱穴・ピット番号 (遺構・Pit)				柱穴番号	柱穴番号				柱穴型	備考 (遺構・出土遺物等)
		平面	長	短	残存		平面	長	短	埋土		
P450	円形	33	33	33	7.9	掘方1: 65a 掘方2: 73a	円形	28	28	6A	あり	
P519	円形	20	(1A)	28	7.9	抜穴1: 74a 抜穴2: 84a	—	—	—	—	—	P519より穴 柱抜き
P527	円形	26	(22)	23	7.9	抜穴1: 84a 抜穴2: 114a	—	—	—	—	—	SB18・P526より穴 柱抜き
P536	円形	21	18	22	7.9	86a	円形	10	7	6A	あり	
P542	楕円形	41	36	24	7.9	86a	円形	17	14	6A	あり	
P553	楕円形	40	32	32	7.9	86a	円形	14	14	6A	あり	
P558	円形	32	30	13	7.9	掘方1: 74a 掘方2: 114a・5	円形	20	19	6A	あり	埋土・あり
P563	円形	28	24	20	7.9	86a	円形	11	11	6A	あり	



0 1m
1/50

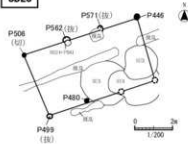
【SB23 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行3間×梁行1間 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-22°-W

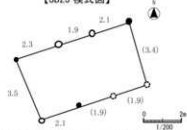
【構成Pit】 P446・480・499・506・562・571 / 【平面規模】 桁行6.3m×梁行3.5m（身舎面積22.1㎡）

【柱間寸法】 桁行1.9～2.3m・梁行3.5m / 【出土遺物】 なし / 【重複】 SB23→SB24、SE4

SB23



【SB23 模式図】



SB23 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット番号	柱穴・ピット番号 (遺構・Pit)				柱穴番号	柱穴番号				柱穴型	備考 (遺構・出土遺物等)
		平面	長	短	残存		平面	長	短	埋土		
P446	円形	28	28	30	7.9	掘方1: 65a・65b 掘方2: 114a	円形	13	12	6A	あり	埋土・あり
P480	円形	28	28	27	7.9	148d	円形	12	12	11A	あり	
P499	楕円形	29	24	21	7.9	抜穴1: 64a	—	—	—	—	—	柱抜き
P506	円形	21	20	9	8.9	掘方1: 64a 掘方2: 123a	楕円形	9	7	7A	5	柱抜き
P562	円形	24	(1A)	13	7.9	抜穴1: 64a	—	—	—	—	—	SB24・P561より穴 柱抜き
P571	円形	24	(17)	18	7.9	抜穴1: 86a	—	—	—	—	—	柱抜き



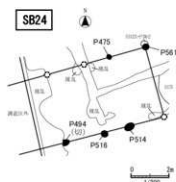
【P446・480】
1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土

0 1m
1/50

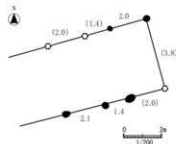
第22図 SB22・23 掘立柱建物跡

【SB24 掘立柱建物跡】

【建物間数】 桁行3間以上×梁行1間(推定) 東西棟建物跡 / 【建物方向】 N-16°-W
 【構成Pit】 P475・494・514・516・561 / 【平面規模】 桁行5.5m以上×梁行3.8m(推定)(身舎面積20.9㎡以上)
 【柱間寸法】 桁行1.4~2.1m・梁行3.8m(推定) / 【出土遺物】 なし / 【重 複】 SB23→SB24

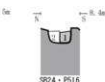


【SB24 模式図】



SB24 掘立柱建物跡 構成Pit属性表

遺構番号	柱穴・ピット番号 (名称・形状・寸法・埋戻し)				柱 礎 跡			柱 軸 (方向・出土遺物等)			
	平面形	長 軸	短 軸	埋上 高さ	平面形	長軸	短軸				
P475	円形	23	23	7.9	6Aa	円形	13	13	赤		
P494	楕円形	42	30	26	6.9	切欠1:9Aa 埋戻し:7Aa	円形	12	9	6Aa	赤 柱切取
P514	楕円形	32	32	7.9	埋戻し1:7Aa 埋戻し2:11Aa	円形	14	14	6Aa	赤	
P516	円形	32	31	16	6.9	6Aa+3	円形	15	15	7Aa	赤 埋戻し:埋
P561	円形	33	29	8	6.9	11Aa	円形	13	13	6Aa	赤 SB23・P562より前



【P475・514・516・561】
 1層:柱痕跡 2・3層:掘方埋土
 【P494】
 1層:堆積土(柱切取) 2層:柱痕跡 3層:掘方埋土



第23図 SB24 掘立柱建物跡

2) 柱穴列跡 (第24~30図、第7表)

今回の調査では、柱穴列跡を15条(SA1~15)確認した(第24図)。柱穴列跡はA区南側付近に位置するSD1~5溝跡の周辺と、A区中央のSD6溝跡の周辺に分布する。B区周辺においても同様の柱穴跡が分布しており、掘立柱建物跡と同様に調査範囲が限られていたことから、柱列の認定には至っていない。今回検出した柱穴列跡は周辺で確認されている掘立柱建物跡と関連性のある遺構と考えられる。以下、その概要について説明する。それぞれの建物の詳細については、第25~30図、第7表を参照していただきたい。

【柱列の特徴】

今回の調査で確認した柱穴列跡の規模は、2間以上~12間以上、総長2.2~22.2mを測る。柱間寸法は0.6~5.5mとばらつきがある。その方向はSA15を除くと、全て東西方向に延びるものであり、周辺で確認されている溝跡と方向が揃うことから、これらの溝跡との関係性が窺える。それぞれの柱穴掘方は、直径20~40cm前後の円形を呈するものが多い。

SA15については、東西方向に延びるSD6溝跡に直行した形で南北に配置された2条の柱列で、橋脚の柱列の可能性が高い。

【出土遺物】

柱穴列として認定した柱穴跡からは、SA14・P418で土師器甕破片1点(20g)が出土したのみである。

第7表 葦首城跡 柱穴列跡(SA1~15) 一覧表

遺構 No.	柱列 (順数)	方向	平面規模(m)		備考
			総長	柱間寸法	
SA1	7以上	東西	12.6以上	1.9+1.3+2.1+1.9+2.0+1.6+1.8	構成No. P97-7-9-610-611+612-615
SA2	4以上	東西	7.2以上	1.4+1.6+1.8+2.4	構成No. P93-5-14+15+18
SA3	5以上	東西	9.6以上	2.4+1.8+1.4+2.4+1.8	構成No. P4+10-12-12+13-17+612
SA4	3以上	東西	5.5以上	2.1+2.0+1.4	構成No. P19+20-71+82
SA5	6以上	東西	8.2以上	0.5+1.0+1.6+2.0+1.4+1.7	構成No. P41+45-616+620+621+623/産物: P42-SA5
SA6	4以上	東西	7.9以上	1.4+1.2+2.3+2.5	構成No. P23-26-624+625+631
SA7	5以上	東西	20.3以上	2.9+3.0+4.2+4.7+5.5	構成No. P27-28-29-30-377-662/産物 SA7-P69
SA8	10以上	東西	21.2以上	2.5+2.0+2.2+2+2.2+0.8+1.2+1.7+3.3+3.0+1.1	構成No. P29-31-47-76-77-86+93+95
SA9	11以上	東西	22.2以上	1.7+1.1+1.9+2.0+1.9+2.2+1+1.6+2.4+1.8+1.6+2.2+1+1.6	構成No. P31+48-51+52+101-288+667+668
SA10	7以上	東西	21.2以上	3.0+3.6+2.6+3.2+3.0+3.2.5+3.4	構成No. P60-65-72-84-94+134/産物: P60-SA10
SA11	10以上	東西	18.8以上	2.4+2.1+3.1+3.2+6+1.6+2.0+1.8+1.1.5+1.1.6	構成No. P180-214+229+230+259+267+261+212+645/産物 SA11-S26
SA12	5以上	東西	12.6以上	3.6+2.6+2.3+2.0+2.1	構成No. P344+267+277-302-400+403/産物: SX1-SA12
SA13	1以上	東西	2.2以上	2.2	構成No. P335-337
SA14	8以上	東西	13.5以上	1.3+2.0+1.2+2.1+1.6+1.7+2.1+1.4	構成No. P489-517+418+421+466+483+511+511+533
SA15	4	陸奥	-	1.2+0.6+0.7+1.2	構成No. P52+613+416+632-636/産物 SA15-P412-S26

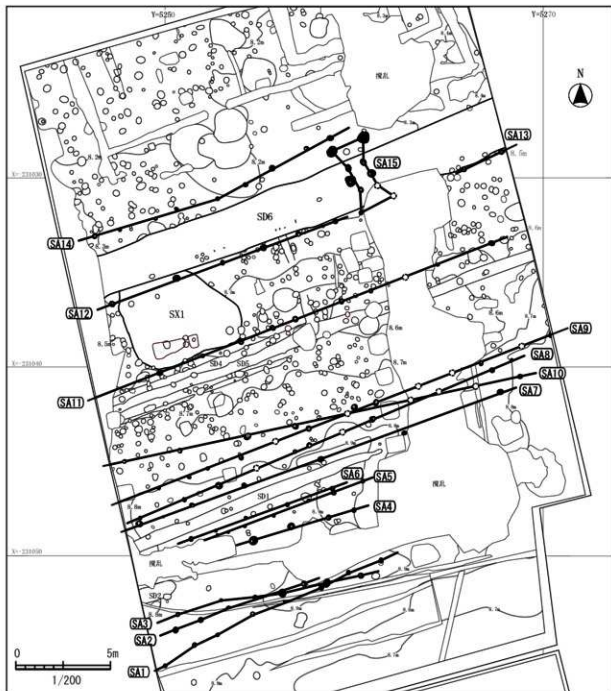
※平面規模の()内の数値は推定値を示す。

※柱穴列跡は、東西方向のものは西から、南北方向のものは北から順に記した。

※柱穴列跡が調査区外に延びているため、規模が不明な柱列については、下記のとおり表記した。

○調査区外に延びる柱列・・・○回数：●以上、平面規模：総長を●以上と表記し表記。

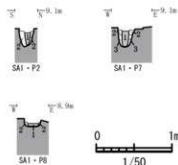
○柱穴の一部が残存していない柱穴列・・・●総長・柱間寸法のうち、実際の計測値は●、推定値は●とし、●●●●●●●●●●と表記。



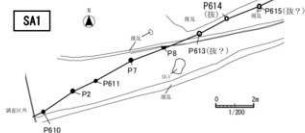
第24図 葦首城跡 柱穴列跡 平面図

【SA1 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P2・7・8・610・611・613～615
 【規模】 7間以上・総長12.6m以上
 【柱間寸法】 1.3～2.1m / 【方向】 東西
 【出土遺物】 なし / 【重複】 なし



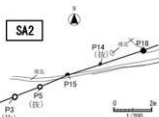
【P2・7・8】
 1層：柱痕跡 2～3層：掘方埋土



遺構番号	柱穴・ピット掘方 (注釈: 短縮寸法は省略)					柱痕跡			柱間寸法 (重複・出土遺物等)		
	平面積	長軸	短軸	残存底面	掘上	平面積	長軸	短軸			
P2	円形	1.9	1.6	2.5	0.6	0.6	円形	1.0	1.0	0.6	なし
P7	円形	2.3	2.0	2.6	0.6	掘上1: 0.6a 掘上2: 0.6a	円形	1.7	1.2	0.6	なし
P8	円形	2.3	1.7	1.6	0.8	1.2a	円形	1.6	1.0	0.6	なし
P610	円形	1.7	1.5	2.3	0.5	1.6a	円形	0.9	0.9	0.6	なし
P611	円形	1.4	1.0	1.2	0.6	1.6a	—	—	—	—	柱痕跡
P613	円形	2.5	2.3	2	0.7	1.6a	—	—	—	—	柱痕跡
P614	円形	2.3	2.0	3	0.7	掘上: 1.1a	—	—	—	—	柱痕跡
P615	円形	2.5	2.2	3	0.6	1.1a	—	—	—	—	柱痕跡

【SA2 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P3・5・14・15・18
 【規模】 4間以上・総長7.2m以上
 【柱間寸法】 1.4～2.4m
 【方向】 東西
 【出土遺物】 なし
 【重複】 なし



遺構番号	柱穴・ピット掘方 (注釈: 短縮寸法は省略)					柱痕跡			柱間寸法 (重複・出土遺物等)		
	平面積	長軸	短軸	残存底面	掘上	平面積	長軸	短軸			
P3	円形	2.7	2.4	3.5	0.6	掘上: 0.6a x 0.6	—	—	—	—	柱痕跡 埋土・掘上少量
P5	円形	2.2	2.2	1.9	0.6	掘上: 1.2a 掘上: 0.6a	—	—	—	—	柱痕跡
P14	円形	1.4	1.2	0.8	0.7	掘上: 1.7a	—	—	—	—	柱痕跡
P15	円形	1.9	1.9	1	0.8	1.2a	円形	0.9	0.6	0.6	なし
P18	円形	2.7	2.1	0	0.8	1.2a	円形	1.5	1.2	0.6	なし

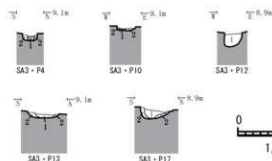


【P3・5・14】 1層：堆積土(柱痕跡) 2層：掘方埋土
 【P15・18】 1層：柱痕跡 2層：掘方埋土

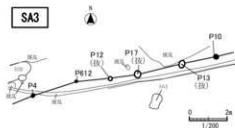
【SA3 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P4・10・12・13・17・612
 【規模】 5間以上・総長9.8m以上
 【柱間寸法】 1.4～2.4m
 【方向】 東西
 【出土遺物】 なし
 【重複】 なし

【P4・10】 1層：柱痕跡 2層：掘方埋土
 【P12・13・17】
 1層：堆積土(柱痕跡) 2層：掘方埋土



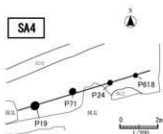
遺構番号	柱穴・ピット掘方 (注釈: 短縮寸法は省略)					柱痕跡			柱間寸法 (重複・出土遺物等)		
	平面積	長軸	短軸	残存底面	掘上	平面積	長軸	短軸			
P4	円形	1.9	1.6	1.1	0.7	0.6a	円形	1.2	0.9	0.6	なし
P10	円形	2.4	2.3	0	0.8	1.2a	円形	1.1	0.9	0.6	なし
P12	円形	2.5	2.4	1.9	0.6	掘上: 1.2a	—	—	—	—	柱痕跡
P13	円形	1.0	0.9	0.6	0.8	掘上: 0.6a 掘上: 0.6a	—	—	—	—	柱痕跡 埋土・黄色土層
P17	円形	0.6	0.2	1.4	0.8	掘上: 1.7a 掘上: 1.2a	—	—	—	—	柱痕跡
P612	円形	1.2	1.2	1.3	0.6	1.1a	円形	0.9	0.9	0.6	なし



第25図 SA1～3 柱穴列跡

【SA4 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P19・24・71・618
 【規模】 3間以上・総長5.5m以上
 【柱間寸法】 1.4～2.1m
 【方向】 東西
 【出土遺物】 なし
 【重複】 なし



【P19・24・71】

1層：柱痕跡 2～4層：掘方壇上

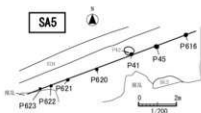


遺構番号	柱穴・ピット跡方 (名称・形状・寸法・遺構高さ)					柱痕跡			柱間寸法 (重複・出土遺物等)				
	平面形状	長	短	残存寸法	底面標高	埋土	平面形状	長		短			
SA4	P19	円形	43	46	36	8.4	掘方1・126a・71 掘方2・44a 掘方3・124a・71	円形	12	12	8A	あ	黄土・黒色土・多量
	P24	円形	26	22	15	8.7	65a	円形	11	10	6A	い	
	P71	円形	34	32	29	8.6	掘方1・125a 掘方2・143a 掘方3・73a	円形	14	13	6A	い	
	P618	円形	15	14	11	8.9	144a	円形	8	6	6A	あ	

【SA5 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P41・45・616・620・621～623
 【規模】 6間以上・総長8.2m以上
 【柱間寸法】 0.5～2.0m
 【方向】 東西
 【出土遺物】 なし
 【重複】 P42→SA5

遺構番号	柱穴・ピット跡方 (名称・形状・寸法・遺構高さ)					柱痕跡			柱間寸法 (重複・出土遺物等)				
	平面形状	長	短	残存寸法	底面標高	埋土	平面形状	長		短			
SA5	P41	円形	13	13	2	8.9	78a	円形	9	8	7A	あ	P42より前
	P45	円形	20	17	11	8.8	113a	円形	10	9	7A	い	
	P616	円形	29	29	4	8.2	143a	円形	9	8	6A	あ	
	P620	円形	12	12	12	8.6	143a	円形	6	6	6A	あ	
	P621	円形	13	13	15	8.6	143a	円形	4	3	6A	あ	
	P622	円形	10	10	5	8.7	143a	円形	3	4	6A	あ	
	P623	円形	10	9	5	8.7	143a	円形	4	4	6A	あ	



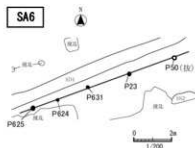
【P41・45】 1層：柱痕跡 2層：掘方壇上



【SA6 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P23・50・624・625・631
 【規模】 4間以上・総長7.9m以上
 【柱間寸法】 1.4～2.5m
 【方向】 東西
 【出土遺物】 なし
 【重複】 なし

遺構番号	柱穴・ピット跡方 (名称・形状・寸法・遺構高さ)					柱痕跡			柱間寸法 (重複・出土遺物等)				
	平面形状	長	短	残存寸法	底面標高	埋土	平面形状	長		短			
SA6	P23	円形	17	17	12	8.7	掘方1・114a 掘方2・123a	円形	8	8	8A	い	
	P50	円形	20	19	14	8.7	掘穴・84a・51	—	—	—	—	—	柱痕跡埋土・掘方
	P624	円形	14	13	10	8.6	143a	円形	5	5	6A	あ	
	P625	円形	20	17	10	8.8	143a	円形	8	7	6A	あ	
	P631	円形	14	13	20	8.6	143a	円形	7	7	6A	あ	



【P23】 1層：柱痕跡 2・3層：掘方壇上

【P50】 1層：堆積土(柱抜取)

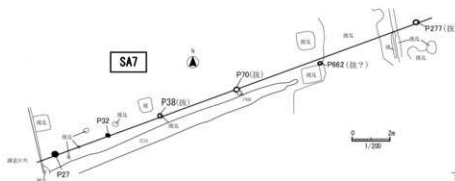


第26図 SA4～6 柱穴列跡

【SA7 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P27・32・38・70・277・662
 【規模】 5間以上・総長20.3m以上
 【柱間寸法】 2.9～5.5m / 【方向】 東西
 【出土遺物】 なし / 【重複】 SA7→P69

【P27・32】 1層：柱痕跡 2層：掘方埋土
 【P38】 1層：堆積土（柱抜取） 2層：掘方埋土
 【P70・277】 1・2層：堆積土（柱抜取）



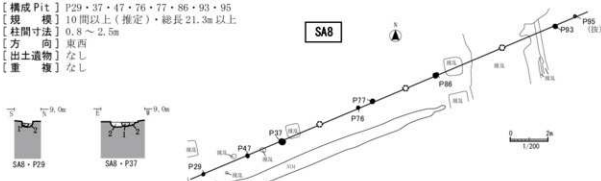
遺構番号	柱穴・ピット掘方				柱 遺 跡				柱 間 型	地 帯 (基層・出土遺物等)		
	平面形	長	短	残存寸法	平面形	長	短	埋土				
P27	円形	33	30	24	8.6	126a	円形	19	16	6A	ホ	
P32	円形	29	17	17	8.6	88a	円形	12	12	7A	5	
P38	円形	29	19	10	8.6	掘方：74d 基層：64a	-	-	-	-	-	柱抜取
P70	円形	29	27	35	8.6	掘方：111a 掘方：88a	-	-	-	-	-	P69上中層 柱抜取
P277	楕円形	29	23	21	8.6	掘方：111a・b	-	-	-	-	-	柱抜取 埋土：黒色土層
P662	円形	29	19	5	8.8	186a	-	-	-	-	-	柱抜取？



【SA8 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P29・37・47・76・77・86・93・95
 【規模】 10間以上（推定）・総長21.3m以上
 【柱間寸法】 0.8～2.5m
 【方 向】 東西
 【出土遺物】 なし
 【重 複】 なし

SA8



遺構番号	柱穴・ピット掘方				柱 遺 跡				柱 間 型	地 帯 (基層・出土遺物等)		
	平面形	長	短	残存寸法	平面形	長	短	埋土				
P29	円形	18	12	6	8.7	124a	円形	9	8	6A	ホ	
P37	楕円形	126b	28	6	8.7	124a	円形？	12	10b	7A	ホ	
P47	円形	19	18	10	8.7	124a	円形	8	8	6A	ホ	
P76	円形	14	14	14	8.6	124a	円形	10	9	6A	ホ	
P77	円形	24	24	10	8.6	掘方：135a・b 掘方：135a	円形	18	17	7A	ホ	埋土：黒色土層
P86	円形	27	24	4	8.6	144a	円形	13	11	7A	ホ	
P93	円形	25	24	25	8.4	掘方：85a 掘方：74a	円形	9	8	6A	ホ	
P95	円形	16	16	7	8.7	掘方：74a	-	-	-	-	-	柱抜取

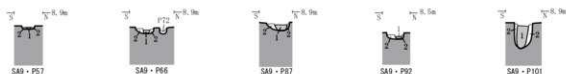
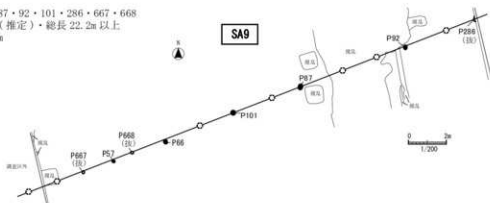
【P29・37・47・76・77・86・93】
 1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土
 【P95】 1層：堆積土（柱抜取）



第27図 SA7・8 柱穴列跡

【SA9 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P57・66・87・92・101・286・667・668
 【規模】 12間以上（推定）・総長22.2m以上
 【柱間寸法】 1.1～1.9m
 【方向】 東西
 【出土遺物】 なし
 【重複】 なし



【P57・66・87・92・101】

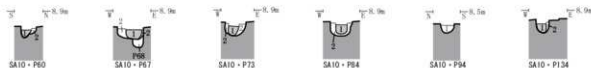
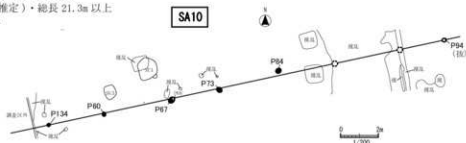
1層：柱痕跡 2層：掘方埋土



遺構 番号	柱穴・ピット縦方 (断面・平面・柱間寸法・柱間寸法)					柱 痕 跡			柱 間 距	備 考 (重複・出土遺 物等)	
	平面形	長 軸	短 軸	残存 径	埋土 径	平面形	長軸	短軸			埋土
P57	円形	16	14	4	8.8	128%	円形	6	6	11A	あ
P66	円形	22	22	8	8.8	148%	円形	12	10	11A	あ
P87	楕円形	29	24	8	8.8	128%	楕円形	19	14	8A	あ
P92	円形	23	21	3	8.8	146%	円形	11	11	8A	あ
P101	円形	20	22	34	8.4	86%	円形	10	14	8A	あ
P286	円形ク	25	100	10	8.8	径欠：88%	-	-	-	-	柱痕跡 無し
P667	円形	18	18	8	8.8	径欠：148%・h	-	-	-	-	柱痕跡 無し・黒色土ゾ
P668	円形	13	12	2	8.8	径欠：148%・h	-	-	-	-	柱痕跡 無し・黒色土ゾ

【SA10 柱穴列跡】

【構成 Pit】 P60・67・73・84・94・134
 【規模】 7間以上（推定）・総長21.3m以上
 【柱間寸法】 2.6～3.6m
 【方向】 東西
 【出土遺物】 なし
 【重複】 P68→SA10



遺構 番号	柱穴・ピット縦方 (断面・平面・柱間寸法・柱間寸法)					柱 痕 跡			柱 間 距	備 考 (重複・出土遺 物等)	
	平面形	長 軸	短 軸	残存 径	埋土 径	平面形	長軸	短軸			埋土
P60	円形	19	16	14	8.8	124%	円形	10	14	8A	7
P67	円形	26	29	14	8.8	118%	円形	23	22	8A	あ
P73	円形	15	15	12	8.8	88%	円形	15	15	8A	あ
P84	円形	22	24	23	8.8	88%	円形	17	15	8A	11
P94	円形	19	17	11	8.7	径欠：74%	-	-	-	-	柱痕跡 無し
P134	円形	18	17	21	8.8	124%・h	円形	10	13	8A	あ

【P60・67・73・84・134】

1層：柱痕跡 2層：掘方埋土

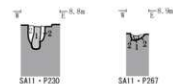
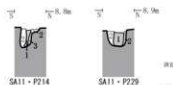
【P94】1層：埋土（柱痕跡）



第28図 SA9・10 柱穴列跡

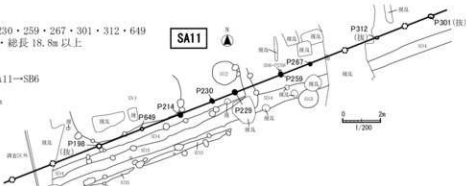
【SA11 柱穴列跡】

〔構成 Pit〕 P198・214・229・230・259・267・301・312・649
 〔規模〕 10間以上（推定）・総長 18.8m 以上
 〔柱間寸法〕 1.3～2.6m
 〔方向〕 東西
 〔出土遺物〕 なし / 〔重複〕 SA11→SB6



【P214・229・230・267】

1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土



遺構 番号	柱穴・ピット部方 (注釈・尺取・寸法・遺物・埋土)					柱 礎 跡				柱 間 幅	埋 土 層	注 意 点 (重複・出土遺物 等)
	平面形	長 軸	短 軸	残存 部	底面 積点	埋土 層	平面形	長軸	短軸			
SA11	P198	円形	25	25	21	8.3	底穴：28×3	—	—	—	—	柱痕跡 埋土：底片
	P214	円形	23	22	28	8.3	掘埋：73h 掘埋土：145h	円形	11	10	7A	JA
	P229	円形	25	24	23	8.4	125a	円形	13	15	6A	JA
	P230	円形	27	24	32	8.2	78a	円形	19	10	7A	5
	P259	円形	13	12	12	8.5	123a	円形	13	11	6A	JA
	P267	円形	19	19	9	8.5	125a	円形	10	9	6A	JA
	P301	円形	27	23	33	8.2	底穴：85a	—	—	—	—	柱痕跡
	P312	円形	13	12	8	8.5	底穴：74a	—	—	—	—	柱痕跡
P649	円形	17	16	8	8.1	64h	円形	9	9	6A	5	

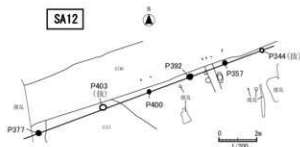
【SA12 柱穴列跡】

〔構成 Pit〕 P344・357・377・392・400・403
 〔規模〕 5間以上・総長 12.6m 以上
 〔柱間寸法〕 2.0～3.6m
 〔方向〕 東西 / 〔出土遺物〕 なし
 〔重複〕 SA12→SA12



【P357・377・392・400】

1層：柱痕跡 2層：掘方埋土



遺構 番号	柱穴・ピット部方 (注釈・尺取・寸法・遺物・埋土)					柱 礎 跡				柱 間 幅	埋 土 層	注 意 点 (重複・出土遺物 等)
	平面形	長 軸	短 軸	残存 部	底面 積点	埋土 層	平面形	長軸	短軸			
SA12	P344	円形	22	22	28	8.1	底穴：60×3	—	—	—	—	柱痕跡 埋土：底片、埋
	P357	楕円形	28	21	9	8.3	123a	円形	15	14	6A	JA
	P377	円形	25	23	8	8.1	116a	円形	11	10	7A	JA
	P392	楕円形	32	27	3	8.4	145a	円形	9	8	6A	JA
	P400	円形	19	18	7	8.3	144×3	円形	8	7	6A	JA
	P403	円形	20	28	18	8.2	底穴：85a	—	—	—	—	SA12より 新発見

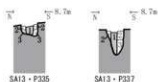
【SA13 柱穴列跡】

〔構成 Pit〕 P335・337
 〔規模〕 1間以上・総長 2.2m 以上
 〔柱間寸法〕 2.2m / 〔方向〕 東西
 〔出土遺物〕 なし / 〔重複〕 なし



【P335・337】

1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土



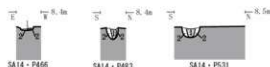
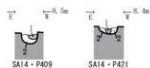
【P335・337】
 1層：柱痕跡 2・3層：掘方埋土



第29図 SA11～13 柱穴列跡

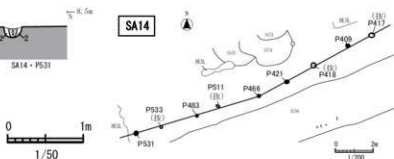
【SA14 柱穴列跡】

[構成 Pit] P409・417・418・421・466・483・511・531・533
 [規模] 8間以上・総長13.5m以上
 [柱間寸法] 1.2～2.2m
 [方向] 東西
 [出土遺物] 土師器
 [重複] なし



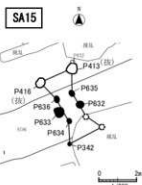
【P409・421・466・483・531】
 1層：柱痕跡 2層：掘方埋土

遺構 番号	柱穴・ピット部方 <small>（平面・断面・残存・埋土）</small>				柱 遺 跡				柱 加 厚 （重複・出 土遺物等）
	平面形 幅 軸	断面 幅 径	残存 高さ 径	埋土 構造	平面形 幅 軸	断面 幅 径	埋土 構造		
P409	円形 1.8 1.7	1.8 1.7	0.0	埋土	円形 1.8 1.7	1.8 1.7	0.0	なし	
P417	円形 2.2 2.0	2.2 2.0	0.0	埋土	—	—	—	—	
P418	円形 2.8 2.6	2.8 2.6	7.9	柱穴1：11ka・h 柱穴2：12ka	—	—	—	埋土・段状 柱遺跡	
P421	円形 2.0 1.8	2.0 1.8	0.0	柱穴1：6ka 柱穴2：6aT	—	—	—	上段部 柱遺跡	
P466	円形 1.8 1.6	1.8 1.6	0.0	14ka	円形 1.8 1.6	1.8 1.6	0.0	なし	
P483	円形 1.3 1.3	1.3 1.3	0.0	7ab	円形 1.3 1.3	1.3 1.3	0.0	なし	
P511	円形 1.8 1.5	1.8 1.5	0.0	柱穴1：12ka	—	—	—	—	
P531	円形 2.4 2.4	2.4 2.4	1.3	7ab	円形 2.4 2.4	2.4 2.4	1.3	なし	
P533	円形 1.5 1.4	1.5 1.4	0.0	柱穴：6ka・h	—	—	—	—	

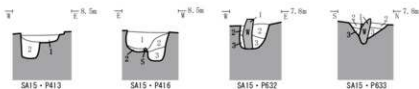


【SA15 柱穴列跡】

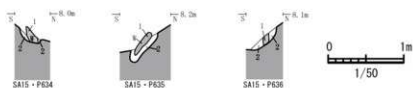
[構成 Pit] P342・413・416・632～636
 [規模] 4間
 [柱間寸法] 0.6～1.2m
 [方向] 南北 / 【出土遺物】なし
 [重複] SA15→P412
 ※SD6と同時期か



遺構 番号	柱穴・ピット部方 <small>（平面・断面・残存・埋土）</small>				柱 遺 跡				柱 加 厚 （重複・出 土遺物等）
	平面形 幅 軸	断面 幅 径	残存 高さ 径	埋土 構造	平面形 幅 軸	断面 幅 径	埋土 構造		
P342	円形 1.7 1.7	1.7 1.7	7.0	6ab	円形 1.7 1.7	1.7 1.7	7.0	0.0	なし
P413	楕円形 0.9 0.2	0.9 0.2	7.0	柱穴1：7ka 柱穴2：11ka	—	—	—	—	P412より古 柱遺跡
P416	楕円形 0.4 0.6	0.4 0.6	7.0	柱穴1：8ka 柱穴2：14ka 埋土：16ab	—	—	—	—	柱遺跡
P632	円形 0.4 0.4	0.4 0.4	7.3	埋土：17ab 埋土：16ab	円形 0.4 0.4	0.4 0.4	7.3	0.0	SD6面で検出 柱柱遺存
P633	楕円形 0.5 0.4	0.5 0.4	7.4	埋土：17ab 埋土：16ab	楕円形 0.5 0.4	0.5 0.4	7.4	0.0	SD6面で検出
P634	楕円形 0.3 0.3	0.3 0.3	7.0	17ab	楕円形 0.3 0.3	0.3 0.3	7.0	0.0	SD6面で検出 柱柱遺存
P635	楕円形 0.3 0.3	0.3 0.3	7.3	17ab	楕円形 0.3 0.3	0.3 0.3	7.3	0.0	SD6面で検出 柱柱遺存
P636	楕円形 0.3 0.3	0.3 0.3	7.3	11ka	楕円形 0.3 0.3	0.3 0.3	7.3	0.0	SD6面で検出



【P413・416】
 1～3層：堆積土（柱接取）
 【P632～636】
 1層：柱痕跡 2～3層：掘方埋土



第30図 SA14・15 柱穴列跡

(3) その他の柱穴・小穴 (第9・32~34図、第8-1~5表)

前述のとおり、今回精査した柱穴・小穴746個のうち、建物・柱穴列を構成する柱穴として認定できたものは286個(掘立柱建物跡24棟:柱穴数189個/柱穴列跡15条:柱穴数97個)であった。その他の残された460個の柱穴・小穴についても、本来は建物や柱穴列・その他の建築物を構成する柱穴であったと考えられる。ここでは、建物として認定できなかった柱穴・小穴について若干の記載を行う。

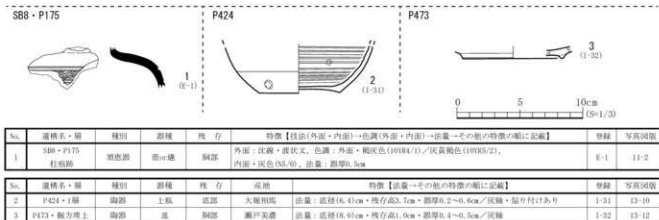
なお、柱穴・小穴個別の情報は、今後もさらなる検討が加えられるよう、平面図を第9図、断面図を第32~34図、規模・堆積土・出土遺物などのデータを第8-1~8-5表に掲載した。

【その他の柱穴・小穴の特徴】

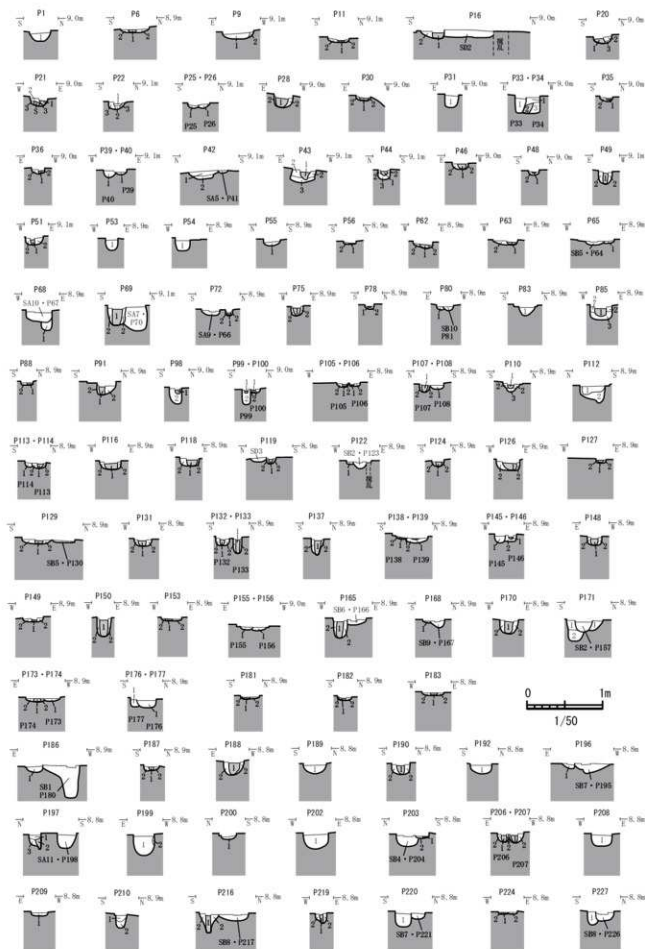
柱穴・小穴は、前述の掘立柱建物跡・柱穴列跡を構成する柱穴群とほぼ同一の範囲で確認した。検出した柱穴・小穴の規模・平面形は、長軸10~106cm、短軸7~83cmの円形・楕円形を呈し、残存深は2~58cmほどである。精査した460個のうち、295個で直径5~23cmの円形・楕円形を呈する柱痕跡を確認した。全体として、今回確認した柱穴・小穴は、平面形が円形・楕円形、掘方規模が長軸20~40cm前後、柱痕跡が15cm前後のものが主体といえる。

【出土遺物】

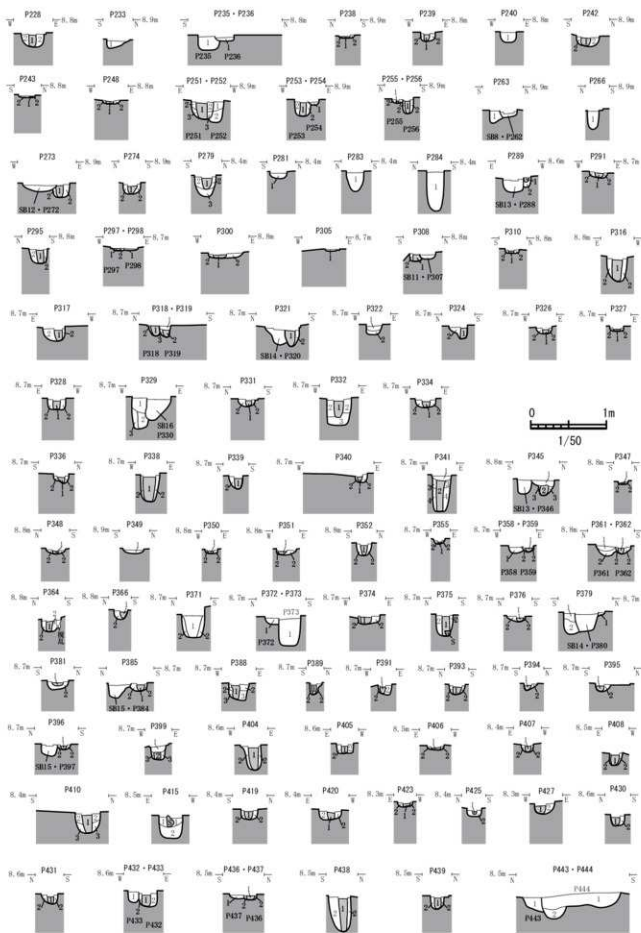
掘立柱建物跡・柱穴列跡以外の柱穴・小穴から出土した遺物は、次のとおりである。P399 掘方埋土で土師器甕破片1点(10g)、P415 堆積土で土師器甕破片2点(30g)、P424 堆積土で弥生土器破片1点(10g)・土師器甕破片10点(110g)・陶器土瓶破片1点(30g/第31図2)、P473 掘方埋土で土師器甕破片1点(5g)・陶器皿1点(5g/第31図3)、P601 掘方埋土で土師器甕破片1点(10g)が出土している。



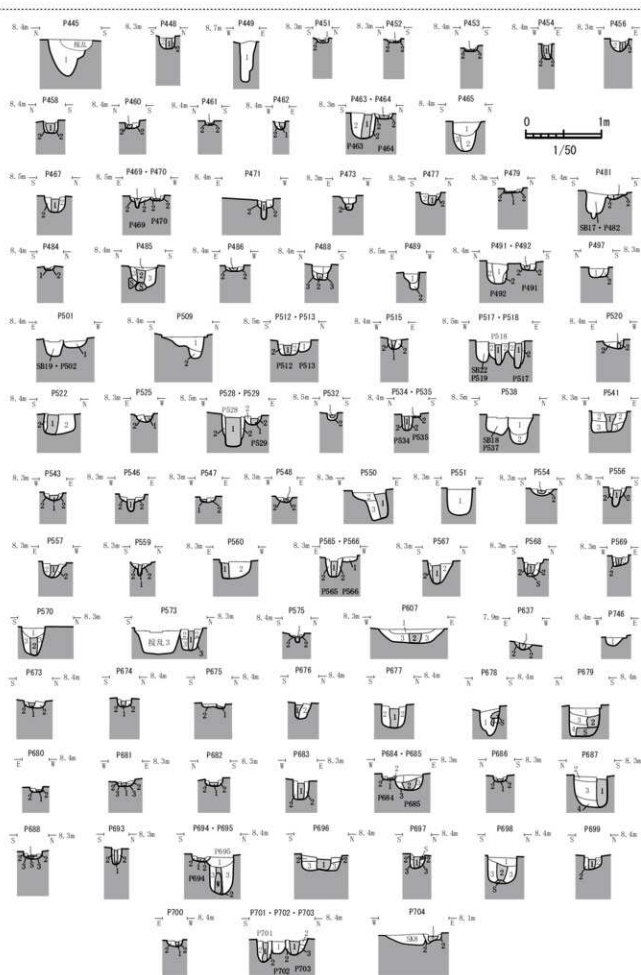
第31図 掘立柱建物跡(SB)・小穴(Pit) 出土遺物



第32図 柱穴・小穴(SA・SB以外)断面図(1)



第33図 柱穴・小穴 (SA・SB以外) 断面図 (2)



第34図 柱穴・小穴 (SA・SB以外) 断面図 (3)

2 溝跡

今回の調査では、A区において6条（SD1～6）、B-1区において1条（SD7）を検出した。

【SD1 溝跡】（第35・36図）

【位置】 A区南側の標高8.8～8.9m付近の平坦面で検出した。

【重複】 P28・31・33～35と重複し、これより古い（SD1→P28・31・33～35）。溝の西端は攪乱により削平を受けている。

【規模・形状】 東-西方向に延びる溝で、検出長13.89m、上幅44～72cm、下幅22～41cm、深さ2～24cmである。底面の標高は、溝の東側が高く、西側が低い。溝の断面形は逆台形である。検出状況からみて、遺構西側は調査区外に延びる溝跡と推定される。

【堆積土】 4層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から弥生土器破片1点（75g）、土師器甕破片2点（160g）、磁器皿破片1点（5g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。

【SD2 溝跡】（第35・36図）

【位置】 A区南側の標高8.8mの平坦面で検出した。

【重複】 P16と重複し、これより古い（SD2→P16）。溝の北端の一部は攪乱により削平を受けている。

【規模・形状】 東-西方向に延びる溝で、検出長1.80m、上幅82cm、下幅58cm、深さ24cmである。底面の標高は、溝の東側が高く、西側が低い。溝の断面形は皿状である。検出状況からみて、遺構西側は調査区外に延びる溝跡と推定される。

【堆積土】 2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から土師器甕破片5点（65g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。

【SD3 溝跡】（第35・36図）

【位置】 A区中央の標高8.6～8.7mの平坦面で検出した。

【重複】 SB1・5、P119・120・137・185・210・237と重複し、これより古い（SD3→SB1・5、P119・120・137・185・210・237）。溝の西端は攪乱により削平を受けている。

【規模・形状】 東-西方向に延びる溝で、検出長9.53m（西側4.20m、東側5.33m）、上幅9～27cm、下幅6～19cm、深さ5～7cmである。底面の標高は、ほぼ平坦である。溝の断面形は皿状である。検出状況からみて、遺構西側は調査区外に延びる溝跡と推定される。

【堆積土】 2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

【SD4 溝跡】（第35・36図）

【位置】 A区中央の標高8.6mの平坦面で検出した。

【重複】 SB4・11・13、P189・192・202・206～209・235・236・240・289・643～646、SD5、SK5と重複し、SB13、P289・643～646→SD4→SB4・11・13、P189・192・202・206～209・235・236・240、SD5、SK5）。溝の西端と中央付近は攪乱により削平を受けている。

【規模・形状】 東-西方向に延びる溝で、検出長23.7m、上幅56～75cm、下幅25～55cm、深さ18～38cmである。底面の標高は、溝の東側が高く、西側が低い。溝の断面形はU字形である。検出状況からみて、遺構東西ともに調査区外に延びる溝跡と推定される。

【堆積土】 3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から土師器甕破片8点（135g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。

【SD5 溝跡】 (第35・36図)

【位置】 A区中央の標高8.6m付近の平坦面で検出した。

【重複】 SB8・11・15、P183・192・202・235・379・383・387・642、SD4と重複し、P183・642、SD4より新しく、その他の遺構より古い(P183・642、SD4→SD5→SB8・11・15、P192・202・235・379・383・387)。溝の西端は攪乱により削平を受けている。

【規模・形状】 東-西・南-北方向に延びるし字形の溝で、検出長16.59m(東西12.83m、南北3.76m)、上幅37~67cm、下幅27~40cm、深さ9~125cmである。底面の標高は、溝の東側が高く、西側が低い。溝の断面形は皿状である。検出状況からみて、遺構西側は調査区外に延びる溝跡と推定される。

【堆積土】 1層確認した。人為堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から土師器甕破片4点(35g)が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。

【SD6 溝跡】 (第35~37図)

【位置】 A区中央の標高8.3~8.4mの平坦面で検出した。

【重複】 SA15、P509・606~609・637・651・652・655~660・669~672、SD5、SX1と重複し、これらより新しい(SA15、P509・606~609・637・651・652・655~660・669~672、SD5、SX1→SD6)。溝の西端は攪乱により削平を受けている。

【規模・形状】 東-西方向に延びる溝で、検出長22.50m、上幅212~280cm、下幅63~92cm、深さ69~79cmである。底面の標高は、溝の東側が高く、西側が低い。溝の断面形はし字形である。検出状況からみて、遺構東西ともに調査区外に延びる溝跡と推定される。

【堆積土】 8層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 土師器甕破片14点(105g/堆積土出土)、須恵器甕破片1点(25g/2層出土)、青銅製品破片2点(11.4g/6層出土:写真図版11-10a・b)、砥石1点(25.7g/8層出土:第37図19)、敲石1点(106.8g/8層出土:第37図20)、不定形石器1点(5.4g/8層出土)、石器剥片1点(5.7g/8層出土)、陶器13点、磁器14点が出土した。このうち、青銅製品・陶磁器類はSD6機能時に流入したものとみられる。出土した陶磁器の器種・出土地点の内訳は次のとおりである。

陶器は、皿4点(125g/堆積土出土:第37図1~3/2~4層出土:写真図版11-19)、碗2点(20g/堆積土出土:第37図11/5層出土:写真図版11-18)、鉢2点(65g/堆積土出土:第37図7・10)、播鉢2点(165g/堆積土出土:第37図4/2~4層出土:第37図9)、鉢類1点(60g/堆積土出土:第37図6)、袋物1点(20g/堆積土出土:第37図8)、天目茶碗1点(80g/堆積土出土:第37図5)が出土した。

磁器は、皿3点(15g/堆積土出土:写真図版13-19/2層出土:写真図版13-16/5層出土:写真図版13-21)、碗6点(145g/1層出土:第37図12/堆積土出土:第37図13~15、写真図版13-20/5層出土:写真図版13-22)、小坏4点(50g/2~4層出土:第37図17/堆積土出土:第37図16・18/写真図版13-17)、瓶類1点(10g/堆積土出土:写真図版13-18)が出土した。

【SD7 溝跡】 (第35・36・38図)

【位置】 B-1区及びB-2区の標高7.6~7.9mの平坦面で検出した。

【重複】 SK8、SE6と重複し、これらより新しい(SK8、SE6→SD7)。

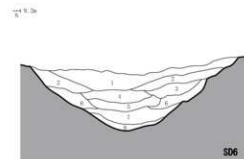
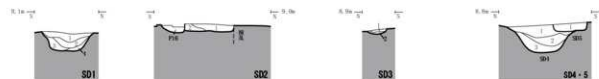
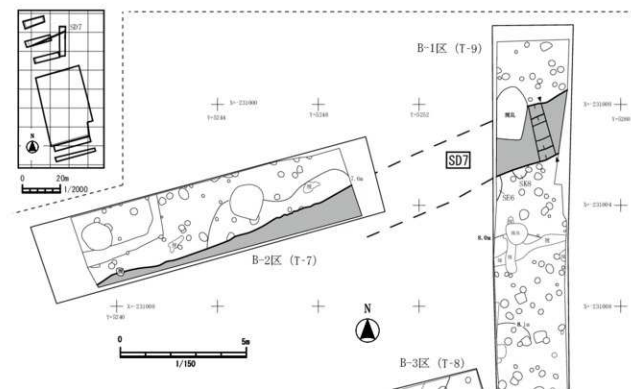
【規模・形状】 東-西方向に延びる溝で、検出長19.65m、上幅208cm、下幅70cm、深さ48cmである。底面の標高は、溝の東側が高く、西側が低い。溝の断面形は皿状である。検出状況からみて、遺構東西ともに調査区外に延びる溝跡と推定される。

【堆積土】 4層確認した。1層は人為堆積層、2~4層は自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土2層から陶器5点、磁器6点、石器剥片1点(5.3g)が出土した。陶磁器類は出土状況から見て、SD7機能時に流入したものとみられる。出土した陶磁器の器種の内訳は次のとおりである。

陶器は、土瓶1点(75g/第38図1)、徳利1点(115g/第38図2)・水差または花瓶1点(150g/第38図5)・皿1点(40g/第38図3)・播鉢1点(180g/第38図4)、磁器は、碗4点(40g/第38図6~9)・皿2点(275g/第38図10・11)が出土した。

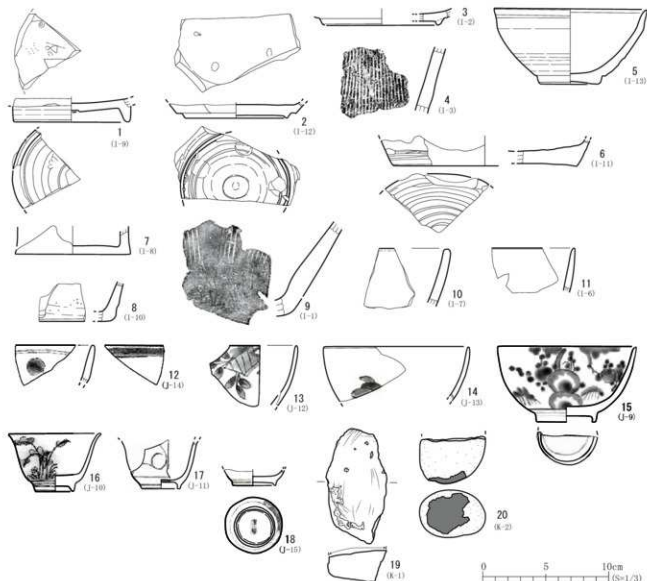
【その他】 SD7溝跡については、遺構確認後、今回の工事による掘削が遺構面まで及ばない地点に位置していることが判明したことから、遺構内容の確認の意味で、一部分の精査のみを行った。



SD1～7土層注記

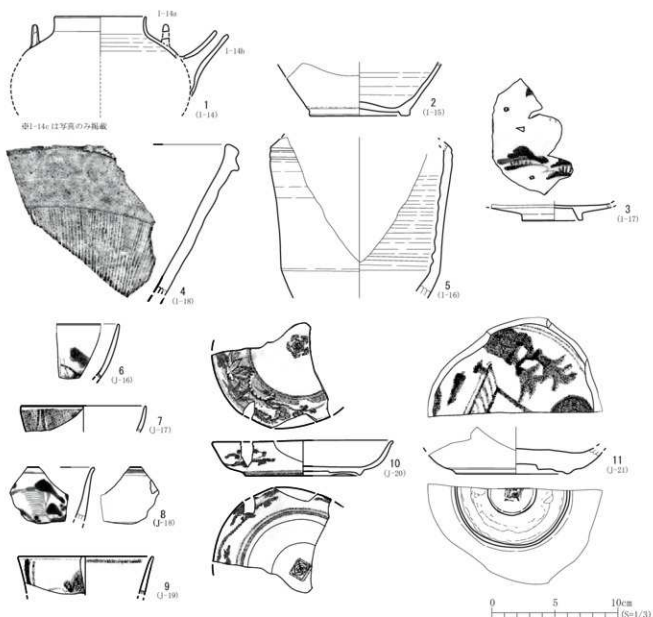
遺構	層	土色	土性	備考
SD1	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック含む。
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒子少量含む。
	3	褐色 (7.5YR4/3)	シルト	地山ブロック、酸化鉄含む。
	4	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山ブロック少量含む。
SD2	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック少量含む。
SD3	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロック含む。
	2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック少量含む。
SD4	1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒子、炭化物片含む。
	2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒子含む。
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック・粒子少量含む。
SD5	1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山ブロック多量、炭化物片含む。
SD6	1	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山粒子、炭化物片含む。
	2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロック多量含む。
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	小礫、地山粒子少量含む。
	4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒子含む。グライ化。
	5	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒子、炭化物片含む。
	6	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山粒子含む。
	7	黄灰色 (2.5Y4/1)	シルト	地山粒子含む。
	8	暗灰黄色 (2.5Y4/2)	シルト	小礫、地山粒子含む。
SD7	1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	礫、炭化物片多量含む。
	2	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山粒子、炭化物片含む。
	3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山粒子、炭化物片含む。
	4	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	地山ブロック、地山粒子含む。

第36図 SD7溝跡 平面図・SD1～7溝跡 断面図



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	方位	特徴【遺品→その他の特徴の順に記載】	発掘	写真図版				
									長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	SD6・堆積土	陶器	皿	底部	唐津	法量：直径(9.3)cm・残存高1.9cm・器厚0.3~0.9cm/灰緑・緑褐色の草花文?	I-9	11-22				
2	SD6・堆積土	陶器	皿	底部	唐津	法量：直径(8.2)cm・残存高1.1cm・器厚0.2~0.9cm 鉄輪・鉄絵・見込みに目録・透面(白)土	I-12	12-2				
3	SD6・堆積土	陶器	皿	底部	瀬戸美濃	法量：直径(9.4cm・残存高1.3cm・器厚0.5~0.6cm/鉄輪	I-2	11-16				
4	SD6・堆積土	陶器	磁鉢	胴部	瀬戸美濃	法量：器厚0.4~0.9cm/鉄輪・内面：おろし目	I-3	11-17				
5	SD6・堆積土	陶器	火目茶碗	口縁部 ~底部	瀬戸美濃	法量：口径(12.1)cm・器高6.0cm・直径(4.8)cm・器厚0.2~1.1cm 鉄化装・S字口縁・割り出し・内反り高台	I-13	12-3				
6	SD6・堆積土	陶器	鉢類	底部	瀬戸美濃?	法量：直径(14.6)cm・残存高2.4cm・器厚0.4~1.6cm/鉄輪	I-11	12-1				
7	SD6・堆積土	陶器	鉢	底部	古瀬戸?	法量：直径(9.2)cm・残存高2.3cm・器厚0.6~1.1cm/鉄輪	I-8	11-21				
8	SD6・堆積土	陶器	袋物	胴部	志野	法量：器厚0.5~1.6cm/白色釉	I-10	11-24				
9	SD6・2~4層	陶器	磁鉢	胴部~底部	唐	法量：器厚1.0~1.2cm/鉄輪・内面：おろし目	I-1	11-15				
10	SD6・堆積土	陶器	鉢	口縁部	小野相馬	法量：器厚0.6~0.75cm/淡青色釉	I-7	11-23				
11	SD6・堆積土	陶器	碗	口縁部	小野相馬	法量：器厚0.2~0.5cm/淡青色釉	I-6	11-20				
12	SD6・1層	磁器	碗	口縁部	鹿伏見	法量：器厚0.35~0.6cm/染付・不明文	J-14	14-7				
13	SD6・堆積土	磁器	碗	口縁部	肥前	法量：器厚0.2~0.4cm/染付・植物文13.5	J-12	14-5				
14	SD6・堆積土	磁器	碗	口縁部	肥前	法量：口径(11.4)cm・残存高4.4cm・器厚0.2~0.4cm/染付・不明文	J-13	14-6				
15	SD6 堆積土	磁器	碗	口縁部 ~底部	肥前	法量：口径(11.0)cm・器高6.0cm・直径(4.8)cm・器厚0.2~0.9cm 染付・太鼓石ワ・樹木文・巻付に砂付着	J-9	14-1 14-2				
16	SD6・堆積土	磁器	小杯	口縁部~底部	肥前	法量：口径7.2cm・器高4.7cm・直径2.8cm・器厚0.2~0.9cm/染付・草花文	J-10	14-3				
17	SD6・2~4層	磁器	小杯	胴部~底部	肥前	法量：直径(3.0)cm・残存高3.8cm・器厚0.2~0.5cm/染付・蔓草	J-11	14-4				
18	SD6 堆積土	磁器	小杯?	底部	肥前	法量：直径3.2cm・残存高1.2cm・器厚0.2~0.5cm 染付・太鼓石ワ・巻付に砂付着・高台内(宣明)字	J-15	14-9				
No.	遺構名・層	種別	器種	残存	石材	法量				備考	発掘	写真図版
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
19	SD6・8層	石器	砥石	完形	砂岩	9.1	4.9	1.0	25.7		K-1	11-11
20	SD6・8層	石器	砥石	下平	花崗岩	3.8	5.2	3.8	106.8		K-2	11-12

第37図 SD6溝跡出土遺物



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	位置	特徴【図量→その他の特徴の順に記述】	発掘	写真図章
1	S07 2層	陶器	土瓶	口縁部～胴部	大塚相馬	図量：口径(7.2)cm・器厚0.1～0.3cm/色絵	I-14	12-4～6
2	S07 2層	陶器	徳利	胴部 ～底部	大塚相馬	図量：底径8.0cm・残存高4.3cm・器厚0.3～0.5cm 軸軸・削り出し高台・内面ロクロナデ	I-15	12-7
3	S07 2層	陶器	皿	底部	大塚相馬	図量：底径(5.0)cm・残存高1.3cm・器厚0.2～0.6cm 鉄絵・松・白駒・外面に作れ	I-17	12-10
4	S07 2層	陶器	楕鉢	口縁部	堤守	図量：器厚0.8～1.4cm/鉄軸	I-18	12-15
5	S07 2層	陶器	水差し or花瓶	胴部	不明	図量：器厚0.5～1.1cm/鉄軸	I-16	12-9
6	S07 2層	磁器	碗	口縁部	肥前	図量：器厚0.2～0.4cm/染付・草花文	J-16	14-10
7	S07 2層	磁器	碗	口縁部	肥前	図量：口径(10.0)cm・残存高2.0cm・器厚0.2～0.3cm 植物文・口縁端部磨き・焼き継ぎ	J-17	14-8
8	S07 2層	磁器	碗	口縁部	瀬戸美濃	図量：器厚0.2～0.6cm/染付・草花文・編反	J-18	14-11
9	S07 2層	磁器	碗	口縁部	肥前?	図量：口径(10.0)cm・残存高3.0cm・器厚0.2～0.4cm 染付・草花文・編反	J-19	14-12
10	S07 2層	磁器	皿	口縁部 ～底部	肥前	図量：口径(14.0)cm・器高2.7cm・底径(9.0)cm・器厚0.2～0.5cm 染付・削り出し高台・手縁き玉穿花・底面に二重特の溝筋・蛇の目四高台・漆継ぎ	J-20	14-13
11	S07 2層	磁器	皿	底部	肥前	図量：底径(9.0)cm・残存高3.7cm・器厚0.7～1.6cm 青磁染付・丸縁・植物文・高台内に粉付溝筋・蛇の目四高台・漆継ぎ	J-21	14-14

第38図 SD7溝跡出土遺物

3 井戸跡

今回の調査では、A区において5基(SE1~5)、B-1区において2基(SE6・7)を検出した。

[SE1 井戸跡] (第39・41図)

[位置] A区中央の標高8.7mの平坦面で検出した。

[重複] P360と重複し、これより新しい(P360→SE1)。

[規模・形状] 素掘りの井戸で、1.10×1.08mの円形を呈し、深さは2.7m以上である。長軸方向の断面形は漏斗形である。

[堆積土] 7層以上確認した。いずれも自然堆積層である。

[出土遺物] 堆積土から土師器甕破片1点(15g)、砥石1点(98.7g/第41図2)、6層から瓦質土器挿鉢破片1点(45g/第41図1)、が出土した。

[その他] SE1については、7層以下の半截作業中に湧水が認められたことから、作業の安全性を考慮し、それ以下の土層断面の記録は行わず、以後、湧水を汲み上げながら完掘作業を行った。以後、遺構確認面から2.7m下まで精査を行ったが、井戸の底面までは至らなかった。

[SE2 井戸跡] (第39・41図)

[位置] A区中央の標高8.6mの平坦面で検出した。

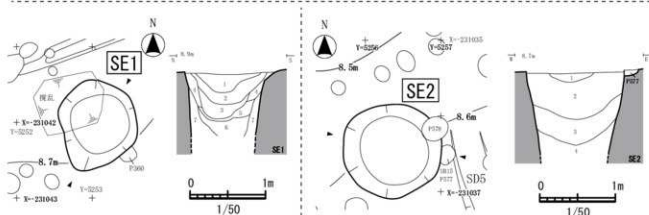
[重複] SB15、P578と重複し、SB15より新しく、P578より古い(SB15→SE2→P578)。

[規模・形状] 素掘りの井戸で、1.30×1.28mの円形を呈し、深さは3.7m以上である。長軸方向の断面形は逆台形である。

[堆積土] 4層以上確認した。1・2層は井戸の埋戻土(人為堆積層)、3・4層は自然堆積層である。

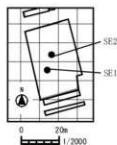
[出土遺物] 堆積土(5層以下)から磁器皿破片1点(40g/第41図3)、堆積土から土玉1点(10g/写真図版11-4)が出土した。

[その他] SE2については、4層以下の半截作業中に湧水が認められたことから、SE1と同様の調査方法をとった。なお、遺構確認面から3.7m下まで精査を行ったが、井戸の底面までは至らなかった。



SE1・2土層注記

遺構	層	土色	土性	備考
SE1	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック、炭化物片含む。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒子、炭化物片少量含む。
	3	褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロック、炭化物片少量含む。
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック多量含む。礫層落土。
	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック少量、炭化物片微量含む。
	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック少量含む。
	7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。礫層落土。
SE2	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック、炭化物片、小礫含む。人為堆積。
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。人為堆積。
	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック少量含む。
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック含む。



第39図 SE1・2井戸跡

【SE3 井戸跡】 (第40・41図)

【位置】 A区北側の標高8.2mの平坦面で検出した。

【重複】 SE4・5と重複し、これより新しい(SE4・5→SE3)。

【規模・形状】 素掘りの井戸で、1.83×1.73mの円形を呈し、深さは3.2m以上である。長軸方向の断面形は漏斗形である。

【堆積土】 8層以上確認した。1～7層は井戸の埋戻土(人為堆積層)、8層は自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から土師器甕破片16点(115g)、陶器挿鉢破片1点(70g/第41図4)が出土した。

【その他】 SE3については、8層以下の半裁作業中に湧水が認められたことから、SE1と同様の調査方法をとった。なお、遺構確認面から3.2m下まで精査を行ったが、井戸の底面までは至らなかった。

【SE4 井戸跡】 (第40・41図)

【位置】 A区北側の標高8.2mの平坦面で検出した。

【重複】 SB21、P586、SE3・5と重複し、SE5より新しく、その他の遺構より古い(SE5→SE4→SB21、P586、SE3)。

【規模・形状】 素掘りの井戸で、2.78×2.23mの不整形を呈し、深さは3.1m以上である。長軸方向の断面形は漏斗形である。

【堆積土】 8層以上確認した。1～3層は井戸の埋戻土(人為堆積層)、4～8層は自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から弥生土器壺破片3点(50g)、土師器甕破片12点(355g)、中世陶器甕破片1点(70g/第41図6)、陶器皿破片1点(20g/第41図7)、瓦質土器挿鉢破片1点(95g/第41図5)が出土した。

【その他】 SE4については、8層以下の半裁作業中に湧水が認められたことから、SE1と同様の調査方法をとった。なお、遺構確認面から3.1m下まで精査を行ったが、井戸の底面までは至らなかった。

【SE5 井戸跡】 (第40・41図)

【位置】 A区北側の標高8.2mの平坦面で検出した。

【重複】 P639、SE3・4と重複し、P639より新しく、SE3・4より古い(P639→SE5→SE3・4)。

【規模・形状】 素掘りの井戸で、2.49×2.32mの円形を呈し、深さは3.6m以上である。長軸方向の断面形は漏斗形である。

【堆積土】 10層確認した。1・2層は井戸の埋戻土(人為堆積層)、3～5層は自然堆積層、6～10層は井戸掘方埋土(人為堆積層)である。

【出土遺物】 堆積土から陶器皿破片1点(110g/第41図8)、磁器皿破片1点(20g/写真図版14-16)、鉄鍬1点(26.1g/第41図9)が出土した。

【その他】 SE5については、10層以下の半裁作業中に湧水が認められたことから、SE1と同様の調査方法をとった。なお、遺構確認面から3.6m下まで精査を行ったが、井戸の底面までは至らなかった。

【SE6 井戸跡】 (第40図)

【位置】 B-1区中央の標高7.9mの平坦面で検出した。

【重複】 SD7と重複し、これより古い(SE6→SD7)。遺構西半の大部分は調査区外に延びる。

【規模・形状】 0.96×0.2m以上の円形もしくは楕円形(推定)を呈すると考えられる。

【出土遺物】 なし。

【その他】 SE6については、その大部分が調査区外に延びていたため、その調査は遺構東端部分の掘り込みを行い、堆積土の観察等を行うのみにとどめた。遺構の形状、堆積土の状況から、周辺で検出されている井戸跡との類似性が高いと判断されたことから、本報告では井戸跡として報告した。

【SE7 井戸跡】 (第40・41図)

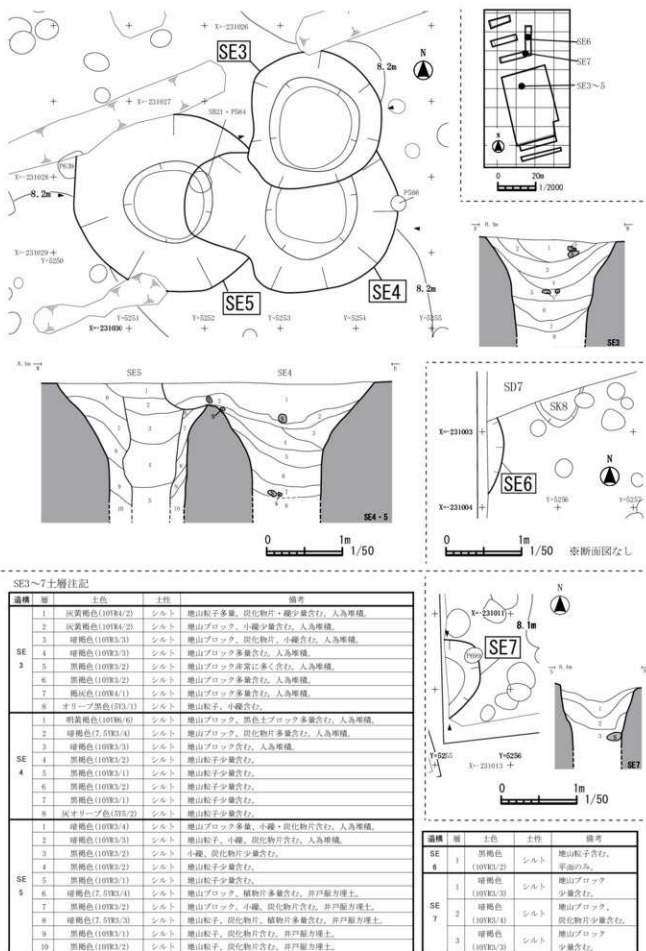
【位置】 B-1区南端の標高8.1mの平坦面で検出した。

【重複】 P699と重複し、これより古い(SE7→P699)。遺構西半は調査区外に延びる。

【規模・形状】 素掘りの井戸で、1.00×0.48m以上の円形(推定)を呈し、深さは0.8m以上である。断面形は漏斗形である。

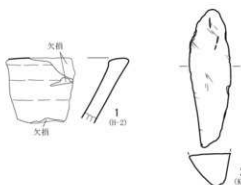
【堆積土】 3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 堆積土2・3層から土師器甕1点(1,365g/第41図10)が出土した。遺構に伴う遺物であるかは不明である。



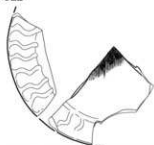
第40図 SE3~7井戸跡

SE1



No.	遺構名・層	SE1 6層	特徴【技法(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記述】	登録	写真回数	
1	種別	瓦質土器	内外面：ナデ	11-7		
	器種	椀鉢	法量：器厚1.1~1.6cm			
	残存	口縁部				
	出所	5-2	写真回数			
2	種別	石器	法	11-9		
	器種	砥石	長さ(cm)			3.6
	残存	完形	幅(cm)			2.6
	出所	砂岩	重量(g)			98.7
	出所	砂岩	備考			
	登録	8-6	写真回数			11-14

SE2

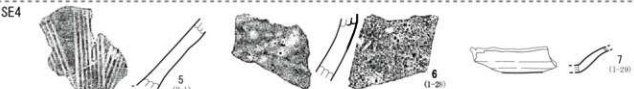


SE3



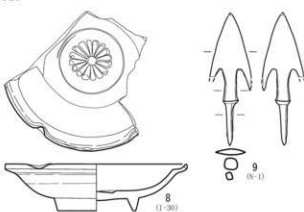
No.	遺構名・層	SE2 8層以下	特徴【法量→その他の特徴の順に記述】	登録	写真回数
3	種別	磁器	法量：口径(15.3)cm・器高2.3cm・直径(4.7)cm・器厚0.3~0.7cm	14-15	
	器種	皿	型押し・捺花文・見込みに染付・裏付に砂付着・縁潤しムラあり		
	残存	口縁部~底部	登録		
	出所	肥前	写真回数		
4	遺構名・層	SE3 埴輪上	特徴【法量→その他の特徴の順に記述】	13-6	
	種別	陶器	法量：器厚0.55~0.96cm		
	器種	椀鉢	器種・内面：おろし目		
	残存	口縁部	登録		
出所	伊	写真回数	13-6		

SE4

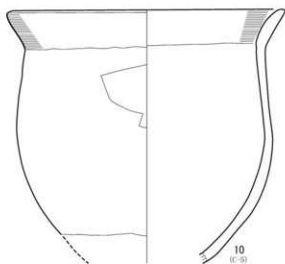


No.	遺構名・層	種別	器種	残存	出所	特徴【技法(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記述】	登録	写真回数
5	SE4・埴輪上	瓦質土器	椀鉢	胴部	内面：おろし目、法量：器厚1.1~1.3cm、二次焼成受け		8-1	11-6
6	SE4・埴輪上	中世陶器	甕	胴部	白石	法量：器厚1.2~1.4cm/内面：ナデ・オサマ	1-28	13-7

SE5



SE7



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	出所	特徴【法量→その他の特徴の順に記述】	登録	写真回数			
8	SE5 埴輪上	陶器	皿	口縁部 ~底部	小野和馬	法量：口径(14.6)cm・器高3.7cm・直径(6.2)cm・器厚0.3~0.8cm 灰被・輪文・捺印定文・高台内面塗着(二)	1-30	13-9			
9	SE5・埴輪上	金属製品	鉄線			法量	備考	登録	写真回数		
										長さ(cm)	幅(cm)
						(10.5)	(1.3)	26.1	重量は保存処理前	5-1	11-9
10	SE7 2・3層	土師器	甕	口縁部 ~胴部	内外面：磨滅のため不明(口縁部ヨコナデ?)、色調：外面・にぶい褐色(SR06/4)、内面・にぶい褐色(T.SR06/3)、法量：口径22.0cm・残存高20.3cm・器厚0.6~1.0cm		C-5	11-1			

第41図 SE1~5・7井戸跡出土遺物

4 土坑

今回の調査では、A区において7基（SK1～7）、B-1区において1基（SK8）を検出した。

【SK1 土坑】（第42図）

【位置】 A区南側の標高8.9m付近の平坦面で検出した。

【重複】 なし。

【規模・形状】 78cm×52cmの不整形。深さ9cm。底面には凹凸があり、断面形は皿状である。

【堆積土】 1層確認した。自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

【SK2 土坑】（第42図）

【位置】 A区南側の標高8.9mの平坦面で検出した。

【重複】 遺構の南半は後世の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】 163cm×63cm以上の楕円形（推定）。深さは18cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

【SK3 土坑】（第42図）

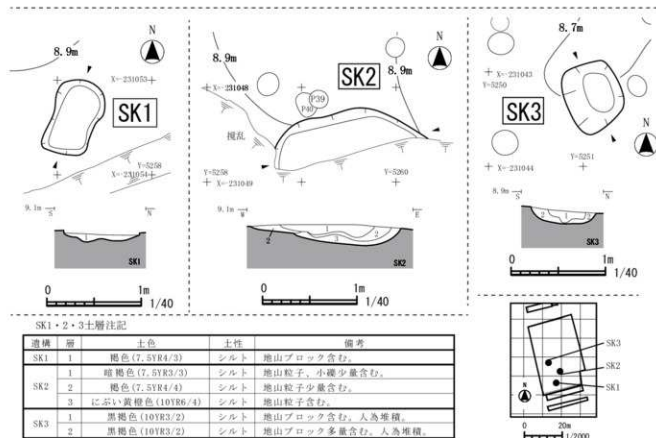
【位置】 A区中央の標高8.7mの平坦面で検出した。

【重複】 なし。

【規模・形状】 70cm×60cmの不整形。深さは15cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。

【堆積土】 2層確認した。いずれも地山ブロックを含む人為堆積層である

【出土遺物】 なし。



第42図 SK1～3土坑

【SK4 土坑】(第43図)

【位置】 A区中央の標高8.6mの平坦面で検出した。

【重複】 なし。遺構の東半は調査区外に延びる。

【規模・形状】 96cm×84cm以上の楕円形(推定)。深さは40cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。

【堆積土】 4層確認した。1〜3層が人為堆積層、4層が自然堆積層である

【出土遺物】 堆積土(人為堆積層)から土師器甕破片2点(30g)が出土した。出土状況からみて、遺構を埋め戻す際に流入したものとみられる。

【SK5 土坑】(第43図)

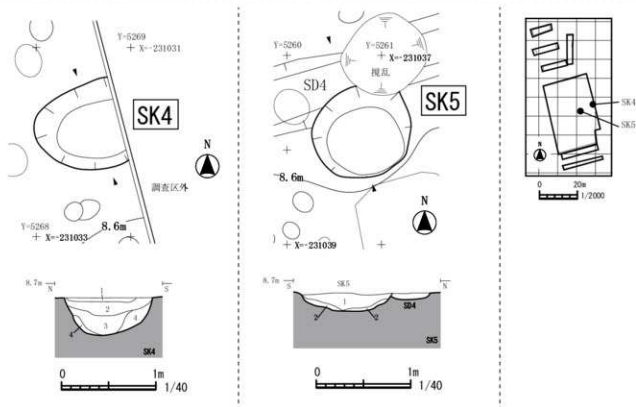
【位置】 A区中央の標高8.6m付近の平坦面で検出した。

【重複】 SD4と重複し、これより新しい(SD4→SK5)。遺構北側の一部は後世の擾乱により削平を受けており残存していない。

【規模・形状】 118cm×99cmの円形。深さ20cm。底面は平坦で、断面形はU字形である。

【堆積土】 2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。



SK4・5土層注記

遺構	層	土色	土性	備考
SK4	1	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	地山ブロック含む。人為堆積。
	2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック、炭化物片含む。人為堆積。
	3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。人為堆積。
	4	褐色(10YR4/4)	シルト	地山粒子多量含む。
SK5	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒子、黒色土ブロック含む。
	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック少量含む。

第43図 SK4・5土坑

【SK6 土坑】(第44図)

【位置】 A区北側の標高8.2mの平坦面で検出した。

【重複】 P448・463と重複し、これらより新しい(P448・463→SK6)。

【規模・形状】 217cm×138cmの不整形。深さ33cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 3層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。

【SK7 土坑】(第44図)

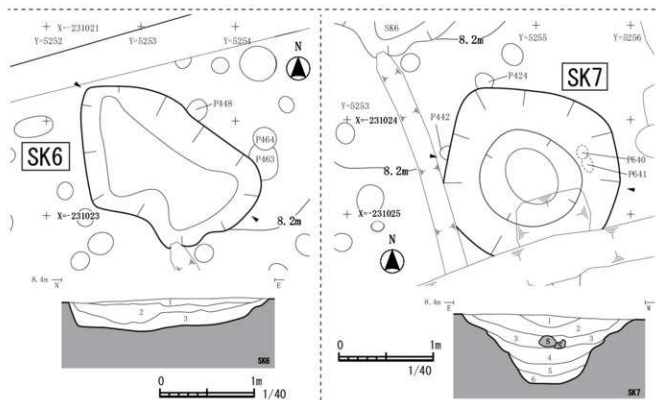
【位置】 A区北側の標高8.2m付近の平坦面で検出した。

【重複】 P424・442・640・641と重複し、これらより新しい(P424・442・640・641→SK7)。

【規模・形状】 180cm以上×178cmの円形(推定)。深さ70cm。底面は平坦で、断面形は漏斗形である。

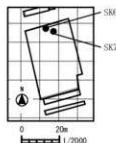
【堆積土】 6層確認した。1~4層は自然堆積層、5・6層は人為堆積層である。

【出土遺物】 堆積土から須志器壺破片1点(220g/写真図版11-3)が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。



SK6・7土層注記

遺構	層	土色	土性	備考
SK6	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック・礫少量、酸化鉄含む。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック少量、酸化鉄含む。
	3	褐色(10YR4/1)	シルト	地山ブロック少量、酸化鉄含む。
SK7	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒子少量含む。
	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒子、小礫、炭化物片含む。
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロック微量、地山粒子・炭化物片少量含む。
	4	褐色(10YR4/1)	シルト	地山粒子含む。壺胎薄土。
SK7	5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック多量含む。人為堆積。
	6	暗褐色(10YR3/4)	シルト	地山ブロック多量含む。人為堆積。



第44図 SK6・7土坑

【SK8 土坑】 (第45図)

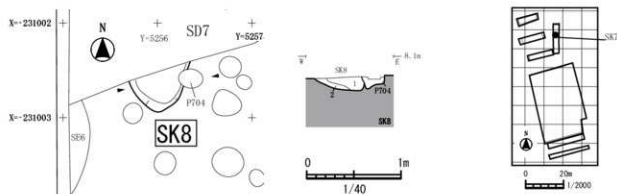
【位置】 B-1区中央の標高7.9m付近の平坦面で検出した。

【重複】 P704、SD7と重複し、これらより古い (SK8→P704、SD7)。

【規模・形状】 63cm×40cm以上の楕円形(推定)。深さ13cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。

【堆積土】 2層確認した。いずれも自然堆積層である。

【出土遺物】 なし。



SK8土層注記

層	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒子、炭化物片含む。
2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山ブロック少量含む。

第45図 SK8土坑

5 堅穴状遺構

今回の調査では、A区において堅穴状遺構1基(SX1)を検出した。

【SX1 堅穴状遺構】 (第46・47図)

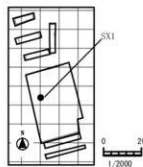
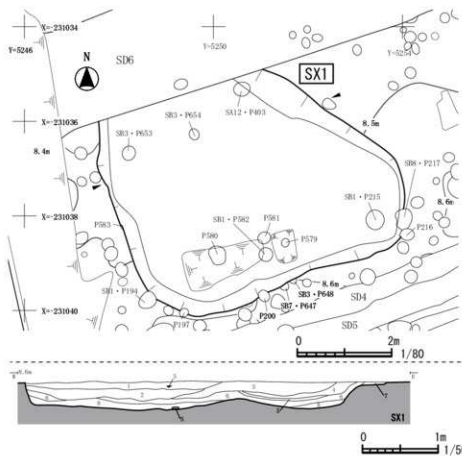
【位置】 A区中央の標高8.4～8.6mの平坦面で検出した。

【重複】 SA12、SB1・3・7・8、SD6、P197・200・216・579～581・583と重複し、SB3・7、P583より新しく、その他の遺構より古い (SB3・7、P583→SE1→SA12、SB1・8、SD6、P197・200・216・579～581)。遺構北端部分はSD6溝跡により大きく削平を受け残存していない。

【規模・形状】 東-西5.92m×南-北4.64m以上のやや円形に近い不整形を呈し、深さは22～38cm。底面は概ね平坦であるが、部分的に凹凸が認められる。東西方向の断面形は皿状である。

【堆積土】 8層確認した。1～3層は地山ブロック等を多く含む人為堆積層、4～8層は自然堆積層である。1～3層はSX1の埋戻土とみられる。また、6～8層は、調査時、水の影響により灰褐色に変色していた。

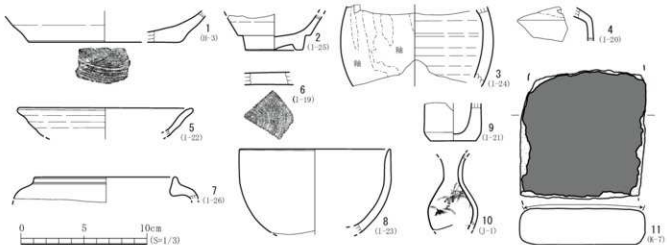
【出土遺物】 土師器甕破片2点(5g/1～3層出土)、陶器8点、磁器壺1点(30g/1・2層:第47図10)、瓦質土器鉢破片1点(25g/1・2層:第47図1)、瓦1点(115g/検出面出土:写真図版11-5)石器剥片1点(0.6g/1～3層出土)、石皿1点(600g/8層:第47図11)が出土した。出土した陶器の器種・出土地点の内訳は、皿1点(10g/8層:第47図5)、碗1点(75g/1～3層出土:第47図8)、鉢1点(10g/8層出土:第47図4)、大鉢1点(15g/8層出土:第47図6)、茶入れ?1点(25g/8層:第47図9)、瓶類1点(75g/1・2層出土:第47図3)、天目茶碗1点(45g/1・2層出土:第47図2)、水差1点(50g/1・2層出土:第47図7)である。



SX1土層注記

層	土色	土質	備考
1	灰黄褐色 (10YR4/2)	シルト	南向ブロッコ、 層上段下、小礫含む。 埋戻土(土気層)
2	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	南向ブロッコ、 灰化物質含む。 S13埋戻土(土気層)
3	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	灰化物質多量含む。 南向ブロッコ、 S13埋戻土(土気層)
4	暗褐色 (10YR3/2)	シルト	南向ブロッコ、 灰化物質少量含む。
5	黄褐色 (10YR3/2)	シルト	南向粘土少量、 灰化物質多量含む。
6	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	南向粘土、灰化物質、 南向粘土少量、 白色砂質粘土・無灰砂 含む。
7	黄褐色 (7.5YR3/2)	シルト	南向粘土少量、無灰砂 含む。
8	中黄色 (7.5YR3/2)	シルト	南向ブロッコ少量、 無灰砂含む。

第46図 SX1竪穴状遺構



No.	遺構名・層	種別	器種	残存	特徴	注記	登録	写真掲載	
1	SX1・1~3層	瓦管土層	鉢類	胴部~底部	外面・底部小切り。法量：底径(12.2)cm・残存高(2.9cm・器高0.9~1.3cm		0-3	11-9	
No.	遺構名・層	種別	器種	残存	産地	特徴	注記	写真掲載	
2	SX1・1,2層	陶器	天目茶碗	底部	瀬戸美濃	法量：底径4.6cm・残存高2.9cm・器高0.4~1.1cm/灰釉	1-25	13-3・4	
3	SX1・1,2層	陶器	瓶類	胴部	瀬戸美濃	法量：胴部最大径12.0cm・残存高6.4cm・器高0.7~0.9cm/きび釉に胎輪成し	1-24	13-2	
4	SX1・8層	陶器	鉢	胴部	瀬戸美濃	法量：器高0.4~0.7cm/3凸輪	1-20	12-12	
5	SX1・8層	陶器	皿	口縁部	瀬戸美濃	法量：口径(14.0)cm・残存高2.3cm・器高0.3~0.6cm/灰釉	1-22	12-14	
6	SX1・8層	陶器	大鉢	底部	瀬戸美濃	法量：器高0.9~1.0cm/長石釉	1-19	12-11	
7	SX1・1,2層	陶器	水盃	口縁部	伊	法量：口径(11.0)cm・残存高2.6cm・器高0.3~1.2cm/灰釉に胎輪成し	1-26	13-5	
8	SX1・1~3層	陶器	碗	口縁部	小野相馬	法量：口径(12.0)cm・残存高6.8cm・器高0.2~0.3cm/灰釉	1-23	13-1	
9	SX1・8層	陶器	茶入(土)	底部	不明	法量：底径(2.7)cm・残存高3.0cm・器高0.5~1.2cm/長石釉	1-21	12-13	
10	SX1・1,2層	磁器	壺	口縁部~胴部	肥前	法量：胴部最大径4.6cm・残存高6.0cm・器高0.3~0.6cm/黄文	1-1	13-14・15	
No.	遺構名・層	種別	器種	残存	石材	法量	備考	登録	写真掲載
11	SX1・8層	石器	石皿	中間部	安山岩	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm) 重量(g)		0-7	11-13

第47図 SX1竪穴状遺構出土遺物

第3章 総括

第1節 出土遺物の時期と特徴

今回の調査で検出した遺構からは、弥生土器、土師器（非ロクロ成形）、須恵器、陶器、磁器、瓦質土器、石器、金属製品、土製品、瓦が出土した。出土遺物の総数は185点（6,772.4g）である。出土遺物の内訳は、弥生土器が6点（150g）、土師器が100点（2,755g）、須恵器が3点（270g）、中世陶器が1点（70g）、陶器が34点（1,715g）、磁器が24点（630g）、瓦質土器が3点（165g）、石器9点（854.9g）、金属製品3点（37.5g）、土製品1点（10g）、瓦1点（115g）である（第9表）。

このうち、図示できたのは、土師器1点、須恵器1点、中世陶器1点、陶器30点、磁器15点、瓦質土器3点、石器4点、金属製品1点の合計56点で、写真のみ掲載した遺物は須恵器1点（写真図版11-3）、陶器2点（写真図版11-18・19）、磁器8点（写真図版13-16～22、14-16）、金属製品2点（写真図版11-10a・10b）、土製品1点（写真図版11-4）、瓦1点（写真図版11-5）の合計15点である。

今回の本格的な発掘調査により発見された遺構の主たる時期は、葺首城が機能した中世末～近世であることから、以下、中・近世の遺物を中心に検討を行うこととする。

第9表 葺首城跡 出土遺物一覧

	弥生土器	土師器 (非ロクロ)	須恵器	中世陶器	陶器	磁器	瓦質土器	石器	金属製品	土製品	瓦	遺構別出土数
SB6-P154		2 (20)										2 (20)
SB8-P175			1 (25)									1 (25.0)
SB11-P213		1 (5)						1 (6.7)				2 (11.7)
SB15-P356		1 (5)										1 (5)
SB19-P52		1 (5)										1 (5)
SB21-P572		1 (5)										1 (5)
SA14-P418		1 (20)										1 (20)
SK4		2 (20)										2 (20)
SK7			1 (220)									1 (220)
SE1		1 (15)					1 (45)	1 (98.7)				3 (158.7)
SE2						1 (40)				1 (10)		2 (50)
SE3		16 (115)			1 (70)							17 (185)
SE4	3 (30)	12 (335)		1 (70)	1 (20)		1 (95)					18 (590)
SE5					2 (120)	1 (20)				1 (26.1)		4 (166.1)
SE7		1 (1,265)										1 (1,265)
SD1	1 (25)	2 (90)				1 (5)						4 (240)
SD2		5 (65)										5 (65)
SD4		8 (35)										8 (135)
SD5		4 (25)										4 (25)
SD6		14 (105)	1 (25)		13 (535)	14 (220)		4 (143.6)	2 (11.4)			48 (1040)
SD7					5 (90)	6 (315)		1 (5.3)				12 (500.3)
SX1		2 (5)			8 (305)	1 (20)	1 (25)	2 (600.4)			1 (115)	15 (1080.6)
P399		1 (10)										1 (10)
P415		2 (30)										2 (30)
P424	1 (10)	10 (10)			1 (20)							12 (150)
P473		1 (5)			1 (5)							2 (10)
P691		1 (10)										1 (10)
T-3		1 (10)										1 (10)
素土	1 (15)	10 (35)										11 (50)
検出前					2 (70)							2 (70)
埋別合計	6 (150)	100 (2,755)	3 (270)	1 (70)	34 (630)	24 (630)	3 (165)	9 (854.9)	3 (37.5)	1 (10)	1 (115)	185 (6,772.4)

※左の数値は出土点数、右の()内の数値は遺物の乾燥重量(g)を示す。

1 陶磁器

今回の調査で出土した陶磁器のうち、本報告に図示（写真のみ掲載も含む）できたものは陶器が33点、磁器が23点で、それぞれの産地・年代については第10表のとおりである（註1）。

これらの年代については、13～14世紀の白石窯産の中世陶器甕（第41図6）と中世の可能性のある陶器鉢（第37図7）を除けば、概ね16世紀～19世紀前半の幅の中におさまる。文献等により確認できる葺首城の機能期間は、16世紀後半（1572）年から19世紀半ば（1868年）までであり、出土した遺物の年代幅と合致する。したがって、今回出土した陶磁器類は、葺首城機能時に使用されたものと判断される。

陶磁器の産地には、堤・岸・大塚相馬・小野相馬・瀬戸美濃・志野・唐津・肥前・佐波見があり、皿・碗・小杯・鉢類・播鉢・甕・壺・天目茶碗・茶入れ・德利・土瓶・袋物・瓶類・水差などの器種が出土している（第48図）。各産地・器種別の内訳は表11のとおりである。

第10表 養首城跡 出土陶磁器一覧

No. 陶器						No. 磁器					
器種	産地	年代	出土遺跡	登録	実真図版	器種	産地等	年代	出土遺跡	登録	実真図版
1	磁鉢	志野	16c後半?	S07	I-11	29	瀬戸美濃	16c前～中葉	S07	J-10	29図1
2	大甕	岸	17c前半～中葉	SK1	I-20	30	小杯	肥前	S08	J-10	29図1
3	磁鉢	岸	17c	SE3	I-27	41	小鉢	肥前	S06	J-6	—
4	磁鉢	岸	17c前～中葉	S06	I-1	31	肥前	近世	S06	J-11	37図17
5	皿	大塚相馬	16c前半	S07	I-17	32	小鉢?	肥前	S06	J-15	37図18
6	磁鉢	大塚相馬	16c～16c	S07	I-15	33	—	志野	S04	J-4	—
7	土瓶	大塚相馬	16c前半?	P424	I-31	33	皿	肥前	SE2	J-22	41図3
8	土瓶	大塚相馬	16c前半	S07	I-14	34	皿	肥前	SE3	J-21	—
9	皿	小野相馬	16c	SE5	I-30	34	皿	肥前	S07	J-20	38図10
10	碗	小野相馬	16c	S06	I-4	35	皿	肥前	S07	J-21	38図11
11	碗	小野相馬	16c	SK1	I-23	35	皿	肥前	S06	J-7	—
12	鉢	小野相馬	16c	S06	I-6	37	碗	肥前	S06	J-8	—
13	鉢	小野相馬	16c	S06	I-7	37	碗	肥前	S06	J-12	37図13
14	皿	瀬戸美濃	16c	S06	I-2	37	碗	肥前	S06	J-13	37図14
15	皿	瀬戸美濃	16c	P473	I-32	38	碗	肥前	S07	J-10	38図15
16	皿	瀬戸美濃	17c後半?	SK1	I-22	39	碗	肥前	S06	J-9	38図16
17	皿	瀬戸美濃	16c?	S06	I-5	—	碗	肥前	S07	J-17	38図7
18	天目茶碗	瀬戸	16c後半	S06	I-13	40	碗	肥前	S07	J-19	38図9
19	天目茶碗?	瀬戸美濃	17c?	SK1	I-25	42	壺	志野	SK1	J-1	47図10
20	鉢類	瀬戸美濃?	17c	S06	I-11	42	瓶類	肥前	S06	J-3	—
21	大鉢	瀬戸美濃	17c前～中葉	SK1	I-19	43	皿	瀬戸美濃	S06	J-2	—
22	鉢	瀬戸美濃	近世?	SK1	I-20	43	碗	志野	S06	J-14	37図12
23	磁鉢	瀬戸美濃	近世?	S06	I-3	44	碗	志野	S06	J-5	—
24	袋物	志野	17c前	S06	I-10	44	—	—	—	—	—
25	瓶類	志野	16c	SE3	I-23	45	—	—	—	—	—
26	水差	唐津	16c末～17c初め	S06	I-12	45	—	—	—	—	—
27	茶入れ?	不明	17c初	SK1	I-21	47	—	—	—	—	—
28	茶碗・茶皿	不明	16c～16c	S07	I-18	47	—	—	—	—	—

※第10表No.1は第48図中の番号を必ず
※第10表の「実真図版」欄の「-」表記は、遺物が小破片のため図版でできなかった遺物で、
写真のみを掲載した遺物である。

第11表 養首城跡出土陶磁器類 産地・器種一覧

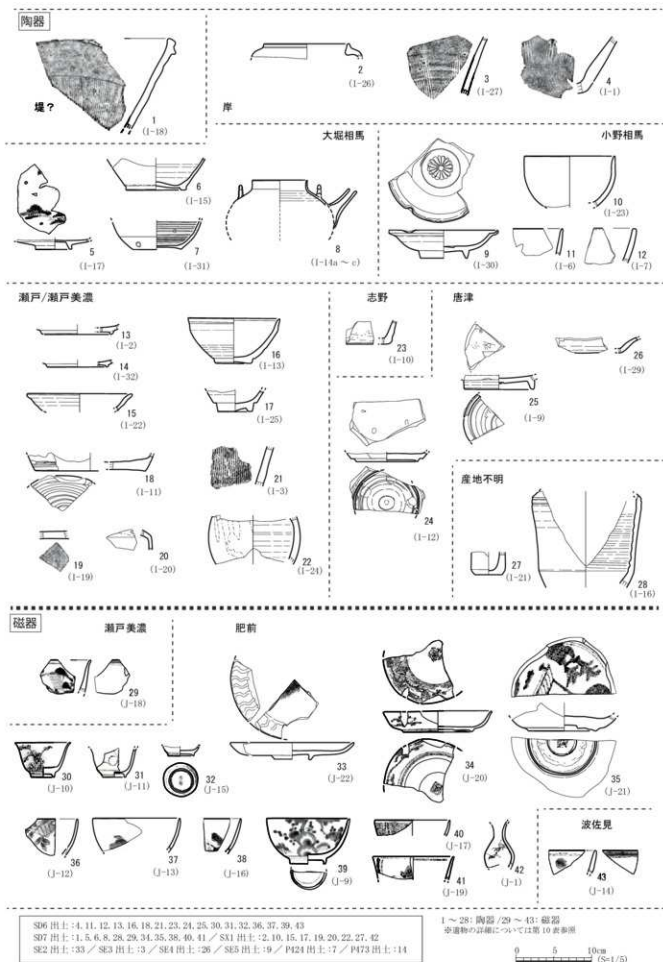
時期	産地	陶器										計	
		堤	岸	大塚相馬	小野相馬	瀬戸美濃	志野	肥前	唐津	不明	瀬戸美濃		肥前
16c代					4								4
16c末～17c初									1				1
17c代		3	4	1				2	1		5	1	17
17c～18c代											6		6
18c代				5				1			2	2	10
18c以降					5								5
18～19c代					1						3		4
19c代		1	3							1	1	1	6
近世(詳細不明)						2					2		4
計		1	3	4	5	11	1	1	3	2	1	19	54

時期	器種	陶器										計	
		碗	皿	天目茶碗	磁鉢	鉢類	磁鉢	袋物	土瓶	德利	水差		茶入
16c代			3	1									4
16c末～17c初													1
17c代			3	1	2	2		1			1	1	11
17c～18c代													6
18c代		4										2	10
18c以降								1					1
18～19c代										1	1	1	3
19c代			1	1					2			2	6
近世(詳細不明)												1	1
計		4	9	2	4	4	1	1	2	1	2	1	34

2 その他の遺物

その他の遺物としては、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器の土器類、砥石・敲石・石皿・不定形石器・剥片などの石器類、金属製品（鉄織・不明青銅製品）、土製品（土玉）、瓦が出土した。このうち、瓦質土器の鉢類（第41図1・5、第47図1）と砥石（第37図19・第41図2）、鉄織（第41図9）・不明青銅製品（写真図版11-10a・b）については概ね陶磁器類と同時期のものとみられる。

その他の遺物については、まず、弥生土器は甕類の破片が主体であるが詳細な時期は不明である。土師器はすべて非クロコ成形の甕（第41図10など）が出土しており、概ね古代以前のものとみられる。須恵器は壺または甕（第31図1）と甕（写真図版11-3）があり、このうち前者は古墳時代、後者は古代墳のものと考えられる。土玉（写真図版11-4）については時期不明である。瓦（写真図版11-5）は、燻瓦で概ね近世以降のものと考えられるが、今回の調査区では1点のみの出土であり、養首城の機能時の遺構に伴うものかは不明である。



第48図 養首城二の丸跡出土陶磁器一覧

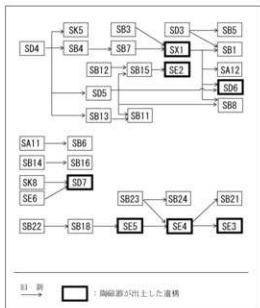
第2節 検出遺構の特徴

今回の調査で検出・精査を行った遺構は、掘立柱建物跡 24 棟、柱穴列跡 15 条、溝跡 7 条、井戸跡 7 基、土坑 8 基、竪穴状遺構 1 基、柱穴跡・小穴 746 個（掘立柱建物跡・柱穴列跡を構成する柱穴を含む）である。これらの遺構のほとんどは、出土遺物の年代、葺首城の歴史的経緯からみて、中世末～近世に属するものと考えられる。

以下、検出した遺構について、若干の検討を試みる。

1 各遺構の新旧関係と遺構の分布状況

主要遺構の重複関係をまとめたのが第 49 図である。これらの重複関係と建物同士の重なりを考慮すると、掘立柱建物だけでみても、少なくとも 5 時期以上の変遷があったことが想定される。建物として認定できなかった柱穴が多数残されていること、葺首城が約 300 年近く機能したことを踏まえれば、これ以上の建物の変遷があったことは容易に想像できるところである。各遺構の分布をみると、調査区南半には柱穴列 (SA1～11) と比較的幅が狭く浅い溝跡 (SD1～4) が東西方向に平行した形で配置される。一方、調査区の中央～北半には、身舎の規模が 3 間×1 間～7 間×1 間といった東西に長い平面形の建物、井戸 (SE1～5)、幅 2m・深さ 70cm ほどある大溝 (SD6) とそれに平行する柱穴列 (SA12～14)、大溝 (SD6) と直行する柱穴列 (SA15)、SX1 竪穴状遺構などが配置される。このように、今回の調査範囲においては、南半が溝と柱穴列、北半が建物とそれに付随する遺構群に大きく分けられることができる (第 50 図)。



第 49 図 葺首城跡主要遺構の新旧関係

2 各遺構の性格について

第 1 章第 3 節で触れたとおり、現状で葺首城二の丸機能時の建物配置を示す史料は発見されていない。こうした現状では、今回発見された建物等の詳細な性格を明らかにすることは難しい。そこで、ここでは、各遺構の配置・堆積土の状況、そして、先にも示した葺首城の絵図をもとに、各遺構の性格について若干の検討を行う。

(1) SD6 溝跡・SA12～15 柱穴列跡

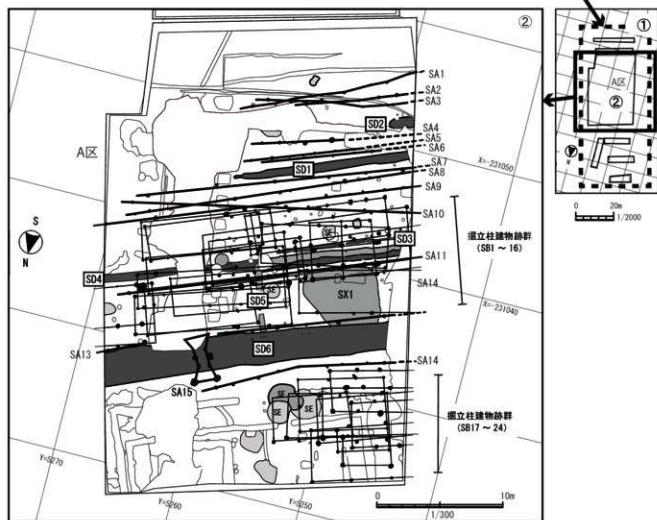
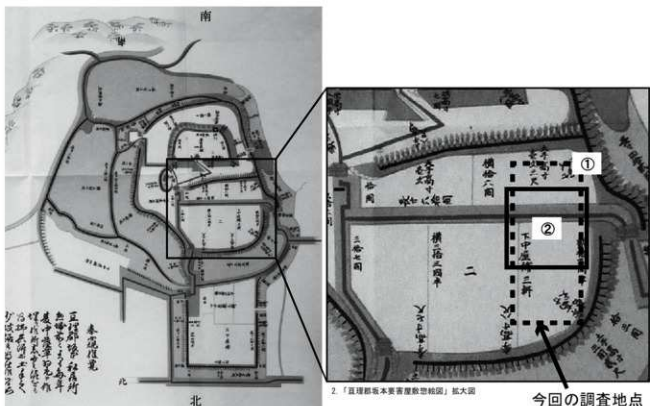
SD6 は調査区北半を東西方向に延びる大溝跡である。その規模・形状、堆積土の状況から堀跡の可能性がある。この大溝の南北の端には、溝と平行する形で SA12～14 が配置されていることから、この柱穴列は SD6 に付随する柵列の可能性が高い。また、SD6 の東側には、溝と直行する形で SA15 柱穴列が配置されており、その柱穴は SD6 底面で確認している。SA15 は位置的にみて、SD6 より区画された南北の空間を行き来するための橋脚の柱列であったと推定される。

(2) SX1 竪穴状遺構

SX1 は調査区中央西側に位置する。その規模は東-西 5.92m×南-北 4.64m 以上のやや円形に近い不整形を呈する。遺構の断面形は皿状で、深さは 30cm ほどである。堆積土下層の観察から、機能時は遺構下位が漂流していた可能性が高いと考えられ、水溜等の性格が想定される。

(3) SD1～4 溝跡・SA1～11 柱穴列跡と掘立柱建物跡

SD1～4 溝跡と SA1～11 柱穴列跡はいずれも東西方向に延びる遺構で、調査区南半に配置される。溝の幅は 1m 以下、深さ 20～50cm ほどで、SD6 とは規模・堆積土の面で様相が異なる。SA1～11 柱穴列は、この溝と平行する形で溝跡の付近に配置される。これらの平行する柱穴列と溝跡の性格を考える上で、「互理郡坂本要吉屋敷絵図」が参考になる。この絵図に今回の調査箇所概ねの位置を示した図面が第 50 図である。第 50 図のとおり、今回の調査箇所は葺首城二の丸の西半地区にあたり、SA1～4 及び SA1～11 が検出された位置は、二の丸を東西方向に通る通路の範囲にあたる。このことから、SD1～4 溝跡と SA1～11 柱穴列は、この通路の側溝と柵



第50図 今回の調査位置と主要遺構

列の可能性が高い。そして、この通路の北側に密集して配置されている掘立柱建物は、絵図中の「下中屋敷」にあたると思われる。現状で「下中屋敷」の建物配置を示す史料は確認されておらず、どのような建物が配置されていたかは不明といわざるを得ないが、その周辺に井戸や多数の柱穴跡が存在することから、この建物の範囲には、葦首城の運営にあたり、様々な用途の建物が配置されていたと推定される。

第3節 まとめ

今回の葦首城二の丸跡の調査では、掘立柱建物跡 24 棟、柱穴跡 15 条、溝跡 7 条、井戸跡 7 基、土坑 8 基、堅穴状遺構 1 基、柱穴跡・小穴 746 個（掘立柱建物跡・柱穴列跡を構成する柱穴を含む）を検出した。これらの遺構の多くは、16 世紀後半（1572）年から 19 世紀半ば（1868 年）まで機能した葦首城二の丸跡の遺構群と考えられる。現在のところ、葦首城内の具体的な建物配置を示す文献史料は確認されておらず、今回の調査成果は、近世の葦首城二の丸の遺構を考える上で貴重な成果となった。また、明治維新後、学校用地として利用されてきた二の丸の遺構が想像以上に良好な状態で保存されていた事実を把握できたことも大きな成果と言える。今後、文献調査も含め、周辺の継続的な調査を進めていく必要があるだろう。今後の課題としたい。

注

1) 中近世の遺物の年代・産地等については、佐藤洋氏（仙台市教育委員会）にご教示いただいた。

引用・参考文献

- 青山博樹ほか 2000 「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第 2 号
 伊藤晶文 2006 「仙台平野における歴史時代の海岸線変化」『鹿児島大学教育学部紀要自然科学編』57
 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究事典』
 小山正忠・竹原秀雄編 1967 『新版標準色紙』2010 年版
 菊池逸夫 2003 「一本杉家跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
 財団法人郷土文化振興財団蔵文化財センター 2006 『江戸時代のやきもの一生産と流通』
 佐藤司馬編 1966 「大塚家坂元開邑三百五十一年祭小志」
 栗橋正隆 1974 『史料 仙台領内古城・館』第四巻
 志藤泰治 1982 「坂本要書」『仙台城と仙台領の城・要書』日本城郭史研究叢書 第 2 巻 名著出版
 仙台市史編さん委員会 1995 『仙台市史』特別編 2 考古資料
 仙台市史編さん委員会 2006 『仙台市史』特別編 7 城郭
 伊達宗行 1988 『翠山山房夜話（上）一支倉 100 年記念』
 伊達忠敏 1988 『大鶴流 伊達家記録』
 藤吉邦彦ほか 1982 「坂元城」『日本城郭体系』第 3 巻
 藤本辰彦・千葉孝歌 1992 「宮城県の中世築」『日本における古代・中世築業の諸問題』
 藤本辰彦・松本秀明 2012 「阿武隈川付近における築堤列の分類とその形成時期に関する再検討」『人間情報学研究』第 17 巻
 文化庁文化財部記念物課 2010a 『発掘調査のてびき集 発掘調査編Ⅰ』
 文化庁文化財部記念物課 2010b 『発掘調査のてびき集 整理・報告書編Ⅰ』
 宮城県考古学会編 2014 『平成 26 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
 宮城県考古学会編 2015 『平成 27 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
 宮城県考古学会編 2016 『平成 28 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
 宮城県教育委員会 1991 『合戦原遺跡』『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 140 集
 宮城県教育委員会 1993 『孤塚遺跡』『孤塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 157 集
 宮城県教育委員会 1996 『一本杉家跡群』宮城県文化財調査報告書第 172 集
 宮城県教育委員会 2002 『館の内遺跡』『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 188 集
 宮城県教育委員会 2012 『西石山原遺跡ほか—常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ—』宮城県文化財調査報告書第 230 集
 宮城県教育委員会 2015 『涌泉遺跡ほか—常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ—』宮城県文化財調査報告書第 239 集
 宮城県教育委員会 2016 『平成 26 年度東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 240 集
 山田隆博 2015a 「山元町中筋遺跡の浄灰集約」『宮城考古学』第 17 号
 山田隆博 2015b 「山元町の復興調査と合戦原遺跡の横穴墓群」『古代国家形成期の地域社会—山元町の調査から—』平成 27 年度宮城県考古学会 総会・研究発表会資料
 山田隆博 2017 「宮城県山元町 合戦原遺跡の調査—横穴墓群の調査を中心に—」『一般社団法人日本考古学協会 2017 年度宮城大会資料集』
 山元町教育委員会 1995 『孤塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 3 集
 山元町教育委員会 2004 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 3 集
 山元町教育委員会 2010 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 4 集
 山元町教育委員会 2013 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 5 集
 山元町教育委員会 2014a 『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第 6 集
 山元町教育委員会 2014b 『石垣遺跡』山元町文化財調査報告書第 7 集
 山元町教育委員会 2014c 『日向北遺跡』山元町文化財調査報告書第 8 集
 山元町教育委員会 2015a 『日向遺跡』山元町文化財調査報告書第 9 集
 山元町教育委員会 2015b 『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第 10 集
 山元町教育委員会 2015c 『小平館跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第 11 集
 山元町教育委員会 2016a 『谷原遺跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第 12 集
 山元町教育委員会 2016b 『谷原遺跡Ⅱ』山元町文化財調査報告書第 13 集
 山元町教育委員会 2017a 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 14 集
 山元町教育委員会 2017b 『日向遺跡 第 2 次発掘調査』山元町文化財調査報告書第 15 集
 山元町教育委員会 2018a 『川内遺跡』山元町文化財調査報告書第 16 集
 山元町教育委員会 2018b 『繁足館跡 第 1～5 次発掘調査』山元町文化財調査報告書第 17 集
 山元町教育委員会 2018c 『館の作遺跡 第 2 次発掘調査』山元町文化財調査報告書第 18 集
 山元町誌編纂委員会 1971 『山元町誌』
 山元町誌編纂委員会 1986 『山元町誌 二巻』
 山元町歴史民俗資料館 2009 『大塚三郎と伊達宗亮—幕末を生きた仙台藩士の生涯—』
 滝辺信夫監修 2000 『復興 仙台前編総論』

写 真 图 版



1. A区完掘状況（北から撮影）



2. A区完掘状況（東から撮影）

写真図版 1 養首城跡A区全景

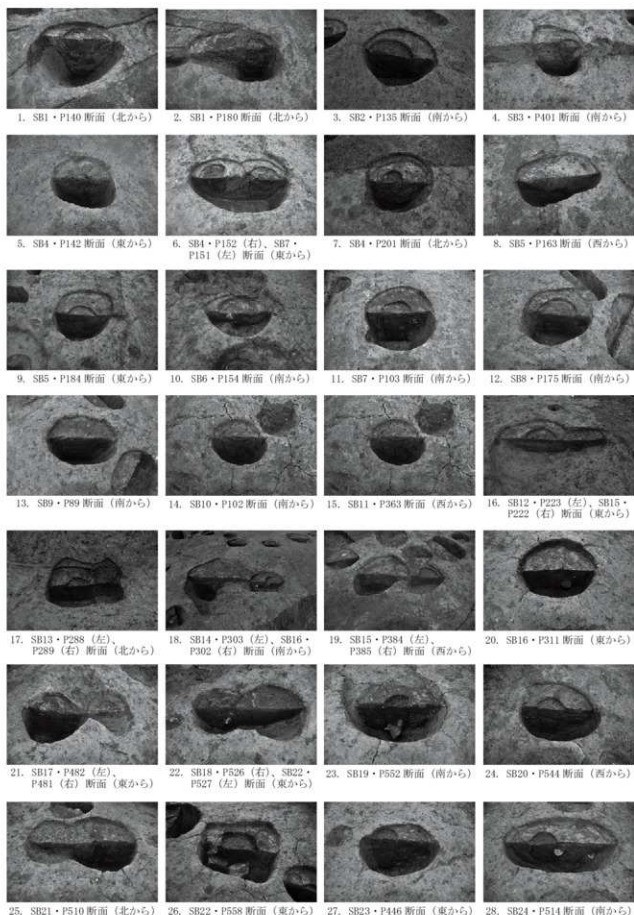


1. A区南半 掘立柱建物跡完掘状況（南から撮影）



2. A区北半 掘立柱建物跡完掘状況（南西から撮影）

写真図版2 掘立柱建物跡



写真図版3 掘立柱建物跡 柱穴断面

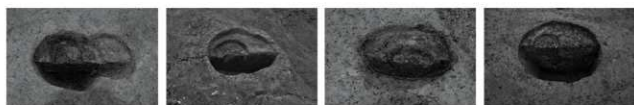


1. A区南半 柱穴列跡完掘状況 (南から撮影)



2. SA15 柱穴列跡完掘状況 (西から撮影)

写真図版 4 柱穴列跡

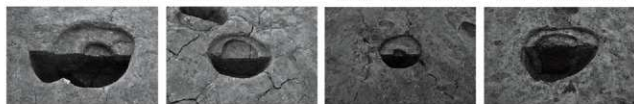


1. SA1・P7 断面 (南から)

2. SA2・P18 断面 (南から)

3. SA3・P4 断面 (東から)

4. SA4・P19 断面 (南から)

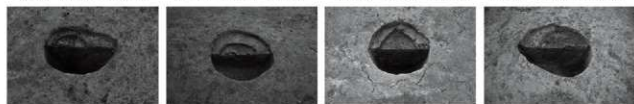


5. SA4・P71 断面 (南から)

6. SA5・P45 断面 (西から)

7. SA6・P23 断面 (東から)

8. SA7・P27 断面 (南から)

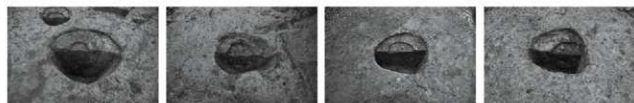


9. SA7・P32 断面 (東から)

10. SA8・P77 断面 (東から)

11. SA9・P101 断面 (東から)

12. SA10・P67 (上)、
P68 (下) 断面 (南から)

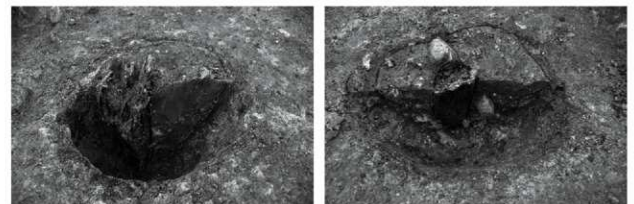


13. SA11・P230 断面 (南から)

14. SA12・P377 断面 (西から)

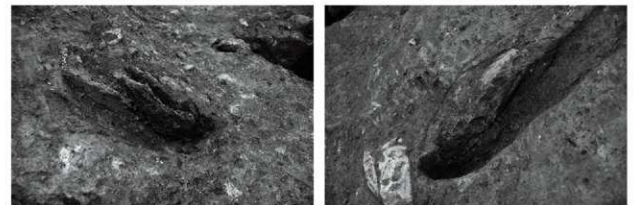
15. SA13・P335 断面 (西から)

16. SA14・P409 断面 (北から)



17. SA15・P632 断面 (南から)

18. SA15・P633 断面 (東から)



19. SA15・P634 断面 (東から)

20. SA15・P635 断面 (東から)

写真図版5 柱穴列跡 柱穴断面



1. A区南半 SD1～5 溝跡完掘状況（西から撮影）



2. A区北半 SD6 溝跡完掘状況（西から撮影）



1. SD1 溝跡 断面 (東から)



2. SD2 溝跡、P16 断面 (東から)



3. SD3 溝跡 断面 (西から)



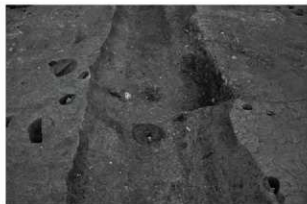
4. SD4・5 溝跡 断面 (西から)



5. SD4・5 溝跡 断面 (西から)



6. SD6 溝跡 断面 (西から)



7. SD6 溝跡 完掘状況 (西から)

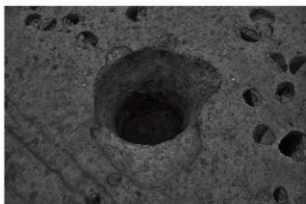


8. SD7 溝跡 断面 (西から)

写真図版7 溝跡 土層断面・完掘状況



1. SE1 井戸跡 断面 (北から)



2. SE1 井戸跡 完掘状況 (西から)



3. SE2 井戸跡 断面 (南から)



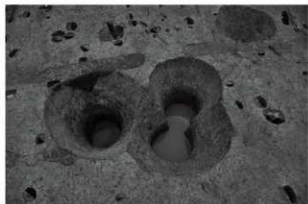
4. SE2 井戸跡 完掘状況 (南から)



5. SE3 井戸跡 断面 (北から)



6. SE4・5 井戸跡 断面 (南から)



7. SE3・4・5 井戸跡 完掘状況 (南から)

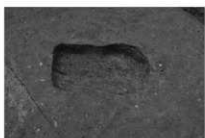


8. SE7 井戸跡 断面 (東から)

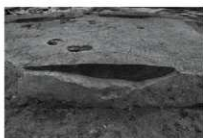
写真図版 8 井戸跡 土層断面・完掘状況



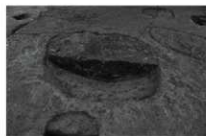
1. SK1 土坑 断面 (東から)



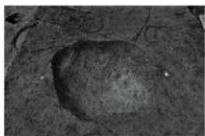
2. SK1 土坑 完掘状況 (東から)



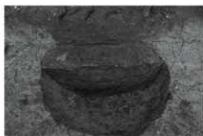
3. SK2 土坑 断面 (南から)



4. SK3 土坑 断面 (東から)



5. SK3 土坑 完掘状況 (東から)



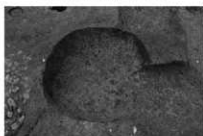
6. SK4 土坑 断面 (西から)



7. SK4 土坑 完掘状況 (西から)



8. SK5 土坑 断面 (東から)



9. SK5 土坑 完掘状況 (東から)



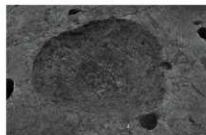
10. SK6 土坑 断面 (西から)



11. SK6 土坑 完掘状況 (西から)



12. SK7 土坑 断面 (北から)



13. SK7 土坑 完掘状況 (北から)



14. SK8 土坑、P704 断面 (南から)



15. SK1 竪穴状遺構 断面 (南から)

写真図版 9 土坑・竪穴状遺構



2.B-1区 (T-9) 全景 (南から撮影)

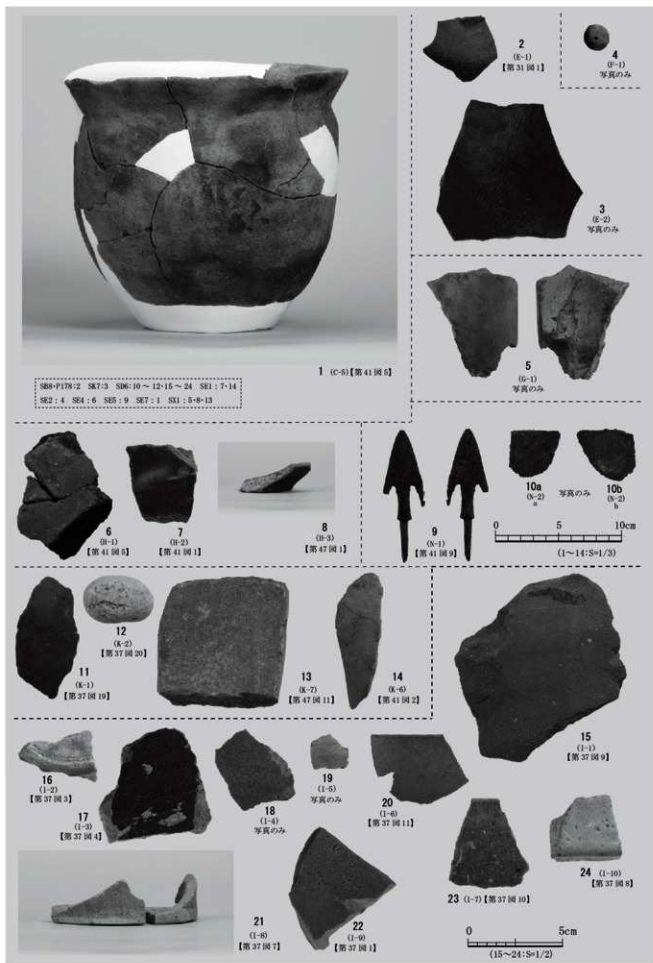


2.B-2区 (T-7) 全景 (西から撮影)

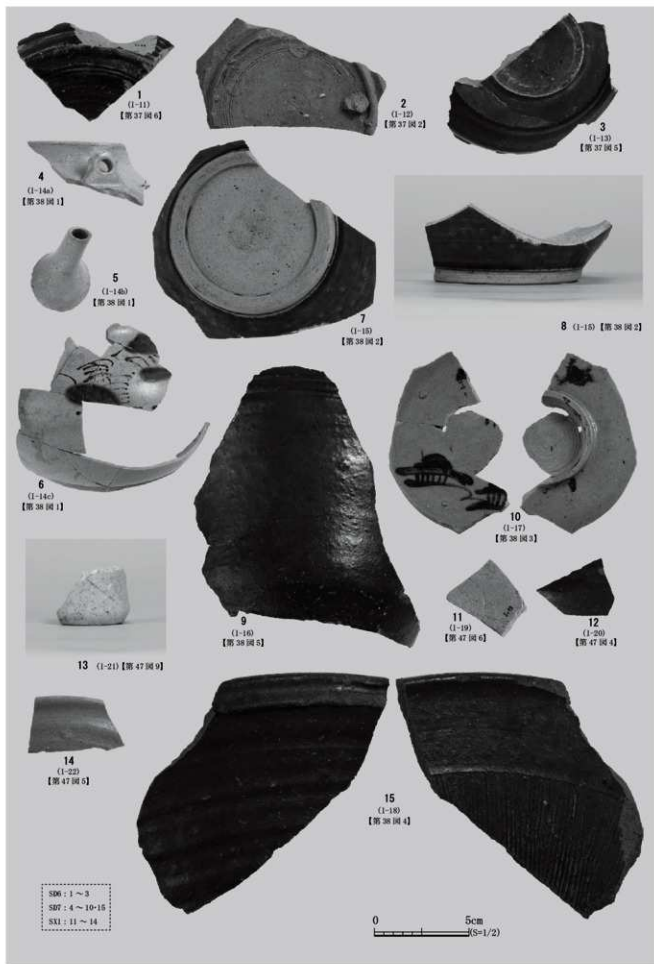


3.B-3区 (T-8) 全景 (西から撮影)

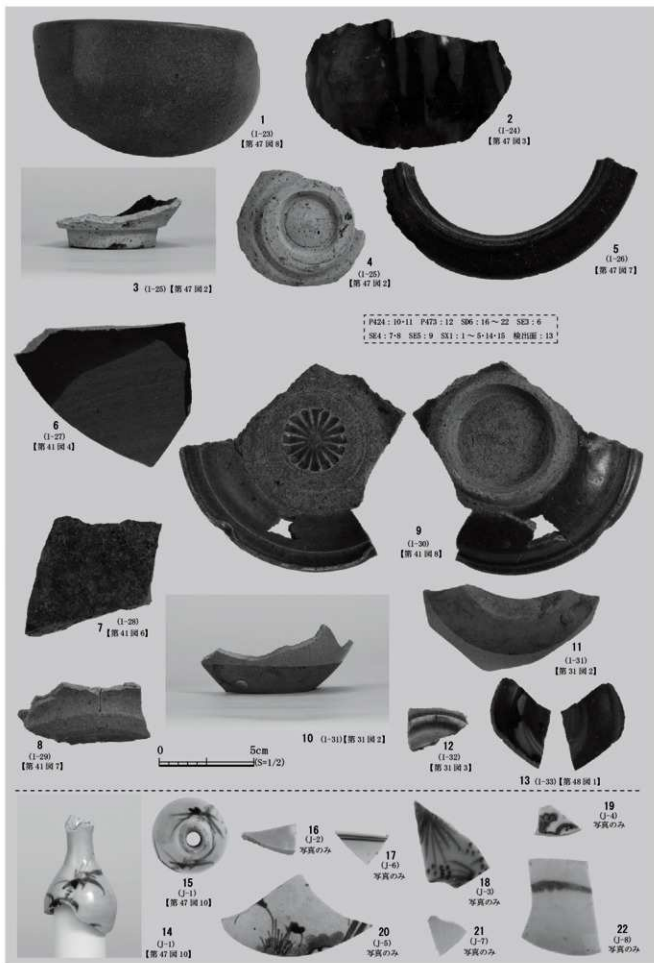
写真図版10 菟首城跡B区全景



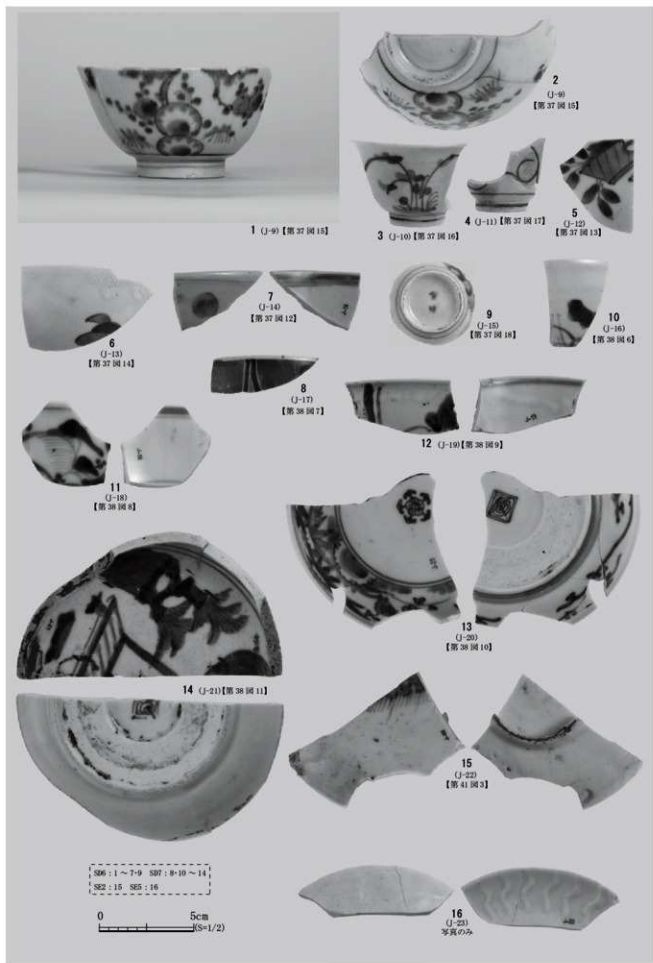
写真図版 11 出土遺物 (1)



写真図版 12 出土遺物 (2)



写真図版13 出土遺物(3)



写真図版 14 出土遺物 (4)

報告書抄録

ふりがな	みのくびじょうあと							
書名	養首城跡 二の丸跡の発掘調査							
副書名	東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅱ							
巻次								
シリーズ名	山元町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 19 集							
編著者名	山田隆博							
編集機関	山元町教育委員会							
所在地	〒989-2203 宮城県亶理郡山元町茂生原字日向 12-1 電話 0223-37-5116							
発行年月日	平成 31 (2019) 年 3 月 29 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
みのくびじょうあと 養首城跡	宮城県 亶理郡 山元町 坂元字 さしほ 館下	043621	14007	37 度 55 分 07 秒	140 度 53 分 35 秒	確認調査 2013.08.21～08.27 本発掘調査 2013.08.28～09.13 2013.11.11～11.14	880 m ²	山元町立坂元小学校講堂(屋内運動場)改築事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
養首城跡	城館跡	中世末～近世	掘立柱建物跡、柱穴列跡、溝跡、井戸跡、土坑、堅穴状遺構、柱穴跡・小穴		陶磁器、瓦質土器、砥石、金属製品	養首城二の丸跡の遺構群を検出		
	散布地	弥生～古代	-		弥生土器・土師器・須恵器			
要約	<p>養首城跡は、宮城県亶理郡山元町坂元字館下に所在する。養首城は、戦国伊代末期から幕末まで機能した城館跡で、亶理郡一帯を治めていた亶理氏の家臣「坂本三河」が元龜3年(1572年)に築城したと伝えられている。養首城は「坂本要害」とも呼ばれ、坂本氏以後、後藤・黒木・津田の諸氏が居城した後、元和2(1616)年に、大條宗綱が伊達政宗より城を拝領し、明治維新までの252年間、大條氏の居城となる。</p> <p>今回の調査箇所は、養首城二の丸跡の西半の範囲にあたり、調査の結果、掘立柱建物跡24棟、柱穴列跡15条、溝跡7条、井戸跡7基、土坑8基、堅穴状遺構1基などの遺構を検出した。これらの遺構からは、弥生土器、土師器(非クロロ成形)、須恵器、陶器、磁器、瓦質土器、石器、金属製品、土製品、瓦が出土した。このうち、出土した陶磁器には、埴・岸・大塚相馬・小野相馬・瀬戸美濃・志野・唐津・肥前・佐波見などの産地があり、皿・碗・小杯・鉢・楢鉢・甕・壺・天目茶碗・茶入れ・徳利・土瓶・袋物・瓶類・水差などの器種が出土した。陶磁器の年代は概ね16世紀～19世紀前半代の幅の中におさまることから、これらは養首城機能時に使用されたものと判断され、今回検出した遺構の多くは、16世紀後半(1572)年から19世紀半ば(1868)年まで機能した養首城二の丸跡の遺構群と考えられる。</p> <p>現在のところ、養首城内の具体的な建物配置を示す文献史料は確認されておらず、今回の調査成果は、近世の養首城二の丸の遺構を考える上で貴重な成果となった。また、明治維新後、学校用地として利用されてきた二の丸の遺構が想像以上に良好な状態で保存されていた事実を把握できたことも大きな成果と言える。</p>							

山元町文化財調査報告書第19集

葺首城跡

二の丸跡の発掘調査

—東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅱ—

平成31年3月29日 発行

発行 山元町教育委員会

宮城県亶理郡山元町茂生跡字日向12-1

TEL0223-37-5116/FAX0223-37-0119

印刷 株式会社 東北プリント

宮城県仙台市青葉区立町24-24
